

禁限と是れ既に古く關司有るに似たり云々又た云杜陽編、玉海瀨府等に所謂濠露臺は蓋し此なりと
 佐賀關門より國道(五十一號線)を西に向つて進むこと七里にして大分町に達す海路に據れば十六哩
 にして大分港まで約二時間を要す又八幡濱を距ること海路三十二哩なり

◎ 南海部郡

佐伯町 佐伯城址 養賢寺 陸軍墳墓地 村社 住吉神社 海神社 五所社 柳牟禮城址 尺麻嶽 老櫻樹 佐伯港 日魚類
 活洲 日向泊 鷺見岬 浮城 水の子島燈臺

地勢縣の東南に位し南黒澤の諸嶺を以て日州との堺を劃り三國、楯の諸山西北に聳へ其の脈鏡彦に
 連りて大野、北海部の二郡に接し東北は海に面して蒲戸鷺見の兩岬遠く海中に斗出し遙に相對して
 一大灣を爲す之を名けて佐伯灣と云ふ面積三十九方里四六廣袤東西九里〇三南北八里〇三戸數一萬四
 千四百零七、人口八萬零三百七十あり氣候温暖にして霜雪を見ること少なし道路は國道三十六號線大
 野郡宇目より來りて佐伯港に達し佐伯町より都府道、蒲江道、市場道、因尾道等の路線縱横に郡中を
 貫通し海路は又た佐伯港に着發の船舶絶ゆる事なし是を以て運輸交通の便大に開け水陸の産物極めて
 豐饒なり就中其の重なるものを擧ぐれば木材、椎茸、木炭、紙、茶、米、麥、魚介、海産等とす本郡
 名の由來及び其沿革等は北海部郡の條下に詳述せるを以て姑く之を略すべし

南海部郡

◎佐伯町 是戸數一千四百二十五、人口七千七百五十八を有せる一小都會にして舊藩政の時代より専ら文學を獎勵し其の結果惹て今日尙ほ一般に文學思想の發達を見るもの多く明治の文壇に名聲を博したる矢野文雄故藤田茂吉同奥井清風の諸氏皆當町の出身なり郡役所、佐伯區裁判所、佐伯警察署、佐伯小林區署、佐伯稅務署、佐伯町役場、佐伯郵便電信局、佐伯百九銀行、鶴谷貯金銀行、合抱林式會社、實業俱樂部等あり旅館は梅屋京屋等を戸壁とし料理店は豊海樓、崎陽樓、東京樓等最も有名なり市街の西北に聳ゆるものを城山と稱し即ち

◎佐伯城址 なり佐伯城一に鶴谷城と稱す山麓より巔まで九十間其の周圍二十七丁餘あり老樹森鬱として満山を掩ひ幽致清閑を極む此城は慶長六年毛利高政日田より移封せらるゝに方り地の利を相し新に築きたるものにして毛利氏奕世之に據り明治維新に至りて廢する所となる城山の東麓に梵刹あり

◎養賢寺 と云ふ鼎山と稱し毛利氏世々の菩提所にして市都妙心寺に屬せる臨濟派の禪寺なり慶長十年三關和尚の開基にして安置せる地藏佛は弘法大師の作にかゝり辨才天は佛工春日の作なり境内廣潤にして堂宇壯麗を極め輪奐の美築造の精比を西海に見るもの稀なりといふ什物には吳道玄筆の觀音像、郭忠恕筆の達摩像及び水晶玉(大玉百四十目、小同七十目)等を藏す寺を出て北行二丁餘を進めば

◎陸軍墳墓地 あり西南の役重岡、仁田原の各地に於て戰歿せし官軍の兵士將校を埋葬せし

所にして幾株の櫻樹内外に繁茂し艶陽の候頗る美觀を添ゆ踊を回らして更に東北に向ひ四五丁を經れば老樹森々たる社頭の下に出づ是れ即ち

◎村社住吉神社 なり市街の南端に在る番匠河の流に枕み風光頗る佳なり祭神は底筒男命中簡男命にして本社は舊白濱若宮八幡社内にありしを文化二年九月此處に遷したるなり社頭に大樟樹あり幹枝繁茂して境内を掩ひ盛夏の時納涼に最も適するの勝地なり

◎郷社五所社 市街の東、山の中腹にあり本社は加茂、春日、住吉、梅の宮、稻荷の五神を合祀せるものにして土俗之を五所明神といふ創立は人皇五十一代 平城天皇の御宇大同年中(或は二

年とす)に在りて古來佐伯城市の産土神とする所なり

◎押牟禮城趾 あり土俗稱して城山といふ今尙ほ礎石瓦片を存す山勢險峻にして頗る要害の地なり當城は緒方惟榮の據りし所にして子孫世々居城と爲す天正中陸軍豐後を侵すの時に方り惟榮の後裔佐伯惟定本城に據りて大に島津の兵を惱ませり其の南に方り番匠川あり即ち佐伯惟定陸の使者十

◎尺魔嶽 あり山勢險峻にして奇峰宛然剣を植ゆるが如し怪巖絶壁、危徑絶ゆる處下すに鐵鎖を以てす巔上に達すれば地平夷にして神祠あり祭神は軻遇槌の神を中央にして經津主武甕槌の二

神を配祀す縣下著名の神祠にして遐邇參拜者の登山する者頗る多し又た山上の眺望極めて快潤にして中國の海、四國の山皆一眸の中にあり其の壯觀真に言ふ可らず一たび山巔に登るもの羽化登仙の思ひを爲さざるはなし

佐伯町より東南三里餘青山村字黒澤東光院境内に二株の

◎老櫻樹

あり稱して桐原の櫻といふ樹木の大きは一丈八尺一は一丈三尺にして高さ各十數丈、枝條錯出全苑を蔽ひ花時の候附近の地夜色皎として月明の觀ありといふ其の壯觀想ふべきなり憾むらくは其の境僻遠なるを以て名未だ世間に知らるゝに至らざるを毎年四月十二三日頃を以て觀花の好時季と爲す

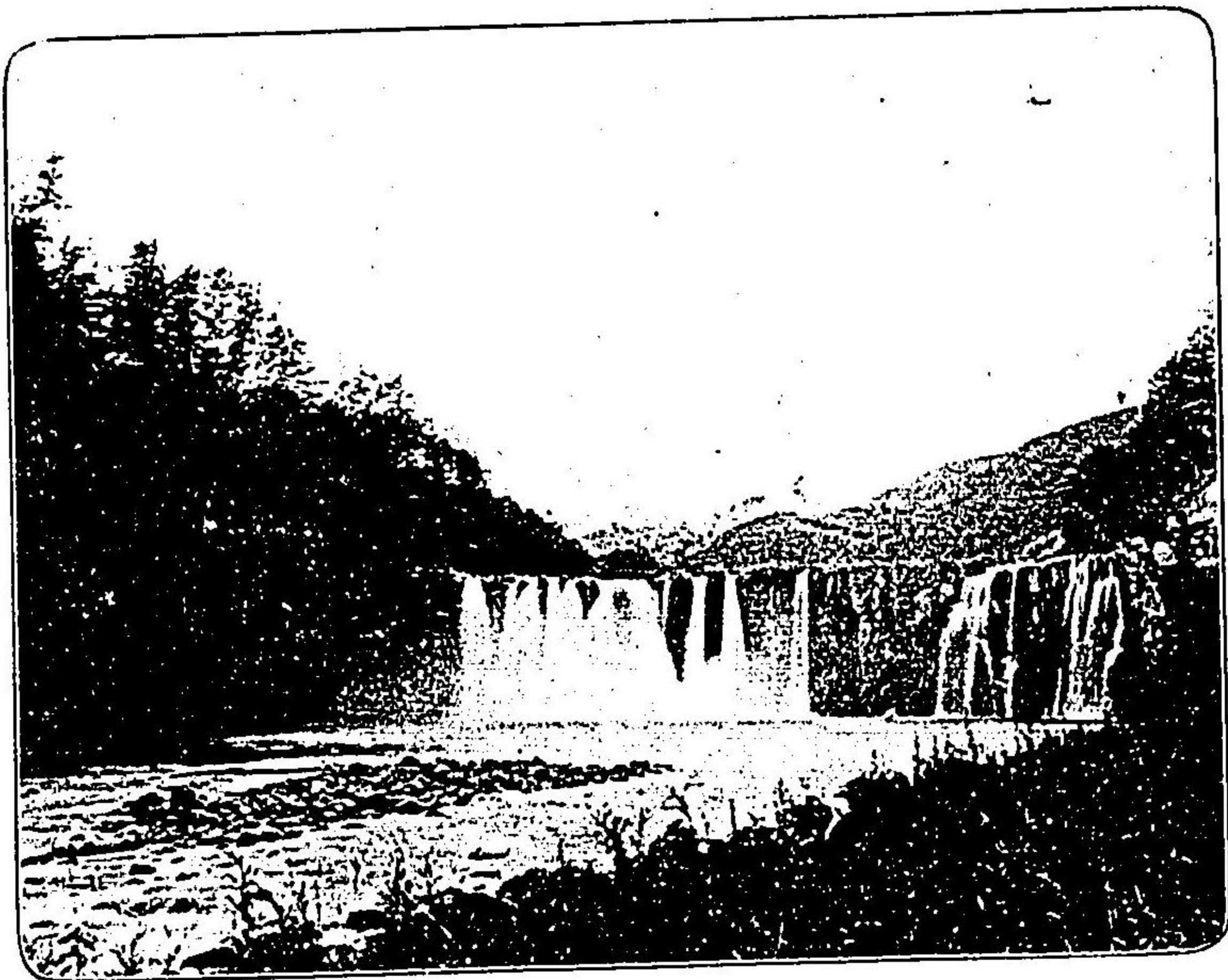
佐伯町より東八合三勺にして

◎佐伯港

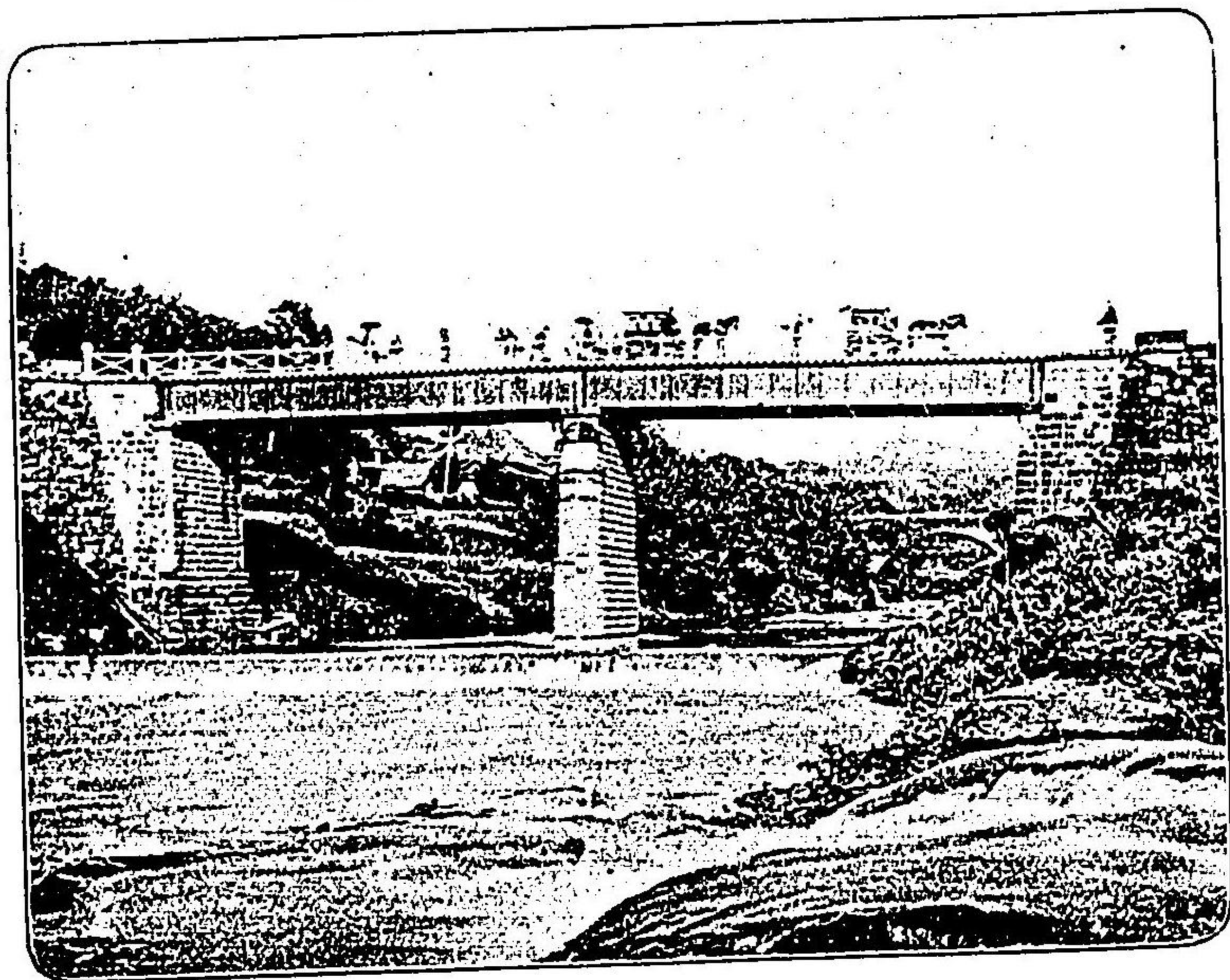
あり一に葛港といふ港内水深く波靜にして碇繋の便頗る好し細島下り大阪上り宇和島上り等の汽船寄航するもの日々兩三回を下らず其の西北は佐伯灣なり大入島東北を劃し環翠湖の如く暴風劇雨の時と雖ども波濤甚だ高からず殊に海水深きを以て巨船大船を碇泊せしむべし灣内に海軍貯炭庫の設けあり聞くが如んば海軍部内に於て夙に要港と爲すの議ありと云ふ。大入島の東北字鹽内の海岸に

◎魚類活洲

あり舊佐伯藩主毛利子爵の計劃に成れるものにして明治三十三年五月を以て始めて



沈 墮 雄 瀑



野 津 市 村 明 治 橋



田代苗野向村枝百



殺捕虫害生學小田代苗在自下村方緒

成功す 面積三反歩にして蓄養の魚類凡六千貫なりと云ふ。夫れより少しく北方に當りて

◎日向泊 と呼べる村あり往古 神武天皇東征の時皇船を繋ぎ玉ひし所なりと傳ふ今尚ほ海岸に

御船繋ぎの石と云へるもの及び當時水を汲み給ひしと云ふ井戸あり。佐伯町より陸路東九里八合舟路六里にして東中浦村大字梶崎に

◎鶴見岬望樓 あり岬角遠く洋上に斗出する所水面幾百尺の巖頭に煉瓦石造りの高樓あり水天渺

茫眼界に映するものは只大島、水の子島及び四國の諸峰のみ眺望雄大にして一たび登臨せば氣宇自ら豁然たるを覺えん

◎水の子島燈臺 望樓を距る十數里の海上に峙立して伊豫の日振島と相對す當今燈臺の建設中なるが其の經費豫算は貳拾餘萬圓の巨額なりと聞く

◎大野郡

三重町 連城寺 木浦嶺山 傾山 黒鷲谷深布 尾平嶺山 郷社御嶽社 郷社大行事八幡社 村社一宮八幡社 村社三宮八幡社 村社三宮八幡社 孤松原 普光寺 楓林 神角寺 醍醐寺 沈院雄深布 大洞市街

地勢縣の南端に位し東は南、北海部二郡に界し西は直入郡に交り北は大分郡に接す南は祖母岳の脈崖伏起して傾、桑原、梓の諸峰となり以て日州の疆を限る面積六十五方里〇二、廣袤東西六里二一、

大野郡

南北十里一五、戸數一萬四千九百十一、人口七萬四千九百九十一を有す山岳四境を圍繞し殊に東南は高
懸層層して人跡未だ及ばざる處あり西北は原野遠く連り氣候温和にして地味又膏腴なるもの多し重
る物産は米穀、材木、葉煙草等なりとす

鎌倉新府の初大友能直二豐の守護職として豊後に入りしより一般其の部下に屬せしが大友氏滅後中川
秀成岡城に移封せらるゝや本郡の内一町三百四村を領し爾餘の百五十八村は臼杵城主福原直高に屬せ
り直高府内に移封せられしより太田重正之れに代る重正亦た亡ぶるの後稻葉貞通の領に歸し世襲して
遂に明治維新に至れり

◎三重町

は郡衙所在の地にして戸數一千七百七十二、人口六千五百零六を有し郡役所、警察署、
稅務署、竹田區裁判所出張所、株式會社大野成業銀行、成業館(俱樂部)等あり旅館には若松屋あ
り又成業館にも宿泊し得るの便あり。市街より南方約七合許にして内山に

◎蓮城寺

あり著名の古刹にして開基は遠く敏達天皇の御宇にあり(今を距る一千三百二十年)
觀世音の像二體を安置す

寺記に云一

寸八歩間浮檀金の眞容は中天竺舍衛國大滿長者の鑄造する所なり百濟の劉伯傳へ來り
て般若姫に授く三尺五寸の赤梅檀像は天竺魯舍國旃陀羅王の皇女皇締夫人の發願にて毘首羯麻の
作る處にして唐土蓮城法師滿の長者(所謂眞名の長者なり)に授くる所なり滿の長者は玉田の里に

生れて早く父母に後れ炭焼を業とせしか京より玉津姫爰に下りて夫婦となりしに家大に富み一人
の女子を生む般若姫と號く其容色甚だ美なり欽明天皇第四の皇子豐日宮聞し召し屢々召し給へ
ども奉らず皇子竊に長者の家に下り其の名を顯はさず長者假に山路と名く御名顯れ妃とし給へり
用明天皇之れなり天皇臨幸の處なるを以て大内山と號すといへり皇子上洛の時姫懷妊なりし故
遺し玉へり後皇女を生み皇女上洛の時周防の大島小田の浦にて船沈没し十九歳にて空しくなり給
ふ故に長者周防國に磐若寺伊豫國に大内寺を建立し蓮城法師開基せりと又姫島は姫の船懸りしよ
り名づく云々

◎木浦鑛山

あり金屬非金屬の諸鑛石に富むこと殆ど全國に比類なしといふ初め銀坑を發見し
たるは慶長十三年にして元和六年又た其の附近各所に發見し坑業一時盛大を極め木浦桑原兩山にて
三千の戸數十萬の人口を有せしことありとを後尾平鑛山と共に開鑛の事業に歸せしが現時は殆ど廢
坑同様の姿となり住民多くは他の地方に出稼し或は製茶製紙の業に就くもの多く現在の戸數は僅々
六十餘戸に過ぎず夫れより西北に向ひて往くこと三里ばかり同村宇木浦内に

◎傾山

あり海面を抜くこと三千八百八十尺にして周圍七里餘に渡り山麓より嶺に至るの里
程四里餘とす滿山老木蒼鬱として頂上に巨石あり其の狀磬の如し傳へいふ 神武天皇東征の時諸皇

大野郡

子と共に此峰に登臨し天神地祇を祭り玉ふ故趾にして一に四皇子峰とも呼ぶと又た山嶺には鶴鳴草
 葺不合尊の山陵あり彼の神代記に日向吾平山上陵に葬ると云へるは即此所なりといふ吾平今は尾平
 に轉訛す蓋し古昔日向に作れるものは其の境界密接せるを以て前人相混せしなるべし尙ほ山陵の事
 に付ては日野資計、加藤賢成の合著なる傾山山陵考に詳論する所あり就て一見すべし。傾山の西長
 谷川村奥嶽の山中に

◎黒葛谷瀑布

あり高さ數十丈、叢樹鬱として四邊を掩ふところ一條の素絹閣を破つて九天よ
 り落下す異に絶觀たりされど其の境幽僻なるが爲め節を曳くの騷客甚だ稀れなり。山下より西南四
 里ばかり宮崎縣に接して

◎尾平鑛山

あり昔時は盛んに銀、銅、錫、鉛を出せしといふ蓋し錫の採掘は天文十八年に始め銀
 は天正年中に始むと就中寛永の頃を以て最盛の時とす維新前には岡藩より奉行を置きて部民に食祿
 を給し藩の事業として採掘せしめしが維新後民業となり漸次衰頽して今や殆んど廢坑の姿となり住
 民僅に十三戸を存するのみ東北に歩を返すこと六里合川村宇田杖に

◎郷社御嶽社

あり彦火を出現尊、國常立尊、少彦名命、大山祇命、大日靈女命、倉稻魂命
 を祭る所にして寶徳元年(紀元二千九百年)大友出羽守親隆、日向國行藤山より勧請せしものなりと
 いふ又た岡藩の時に於ても代々の祈願所とし神領等を寄附して崇敬最も厚かりし所なり今尙ほ大野

直入兩郡よりの參拜者絶ゆることなし但し大山祇命、大日靈女命、倉稻魂命、の三柱は明治十年
 同社に合祀せられしものなり。夫れより西北に向ふこと二里緒方村大字大化に

◎郷社大行事八幡社

あり大化元年(紀元二千三百五十五年)八月の創建にかゝる古社にして往古は
 大野郡緒方郷二十四個村の鎮守とし社坊八個寺を置き(現今の吉祥寺は)毎歳八回の大祭を行ふを例とす
 因て大行事と稱すと云ふ天正年中兵火の爲め社殿舊記を併せて悉く烏有に歸せしむと雖も今尙ほ三
 雙の木造獸を存せり中一雙の背部に大化元年乙丑年十月の文字あり又一雙に記して日豊後國緒方今
 山大行事神前應永三十一年甲辰秋八月大願主以下(文字湮滅讀むべからず)云々一雙は題書なし。夫
 れより西方約七合にして同村大字新に

◎村社一宮八幡社

あり 仲哀天皇、應神天皇、神功皇后、高麗神、猿田彦命を祭り緒方卿三宗
 祠の一にして壽永二年癸卯年十月緒方三郎惟榮の創立する所なり。西北約三合にして同村大字原尻に

◎村社二宮八幡社

あり祭神は 應神天皇にして緒方惟榮、大野泰基を合祀す緒方三宗祠の
 一にして壽永二年緒方惟榮の建立するところなり。し大野川を渡り北に往くこと約半里にして緒方
 村大字上自在に

◎村社三宮八幡社

あり 仲哀天皇を祭る亦た緒方三宗祠の一にして壽永二年緒方惟榮の創
 むるところなり西北一里餘にして小富士村大字片ヶ瀬に

大野郡

◎孤松原 あり岡城と相對峙せる高原にして元と岡藩の騎射場ありし處なり馬場の東側一面には老楓樹あり開花の候美觀を極む竹田の市街は此を距る僅か半里に足らざるを以て毎歲艶陽の候には同地方より觀櫻の容頗る多し。北に進む約一里羽上井田村大字上尾塚に

◎普光寺

あり眞言宗古義派なり敏達天皇十二年(紀元千二百四十二年)日羅の創始する處にして初め普光山眞紫生寺遍照院と稱せしを寛文二年岡城主中川久清、筑紫山普光寺と改稱せしむ寺院

の側に二大法窟あり其の一には大日如來の靈像を安置し窟上に堀南方の書せし筑紫山普光寺の六大字を彫刻す字體彫刻共に頗る靈妙なり巖壁に日羅の刻する所なりといへる佛像あり之れ亦た凡手の企及しがたきものあり。東北約半里にして岡村大字上尾塚字用作に

◎楓林

あり其の數幾千株なるを知らず初冬滿林霜に飽くの頃彩雲簌々として半空に漲り滿目燦爛として宛然錦繡の郷に入るの感あり元岡藩老職田近平右衛門の別業なりしが今は上井田村吉

真元夫の所有に歸す。夫れより北方二里半にして西大野村大字鳥田神角山上に

◎神角寺

あり眞言宗古義派なり傳へ云ふ 欽明帝三十一年(紀元千二百三十年)新羅國の僧某來り靈嶽の秀を愛して此山に隱る嶺上に池あり夜異光を發す乃ち觀音大士の金像を感得し因て一字の草堂を結て之を奉安す後三百餘年を経て聖寶阿闍梨錫を此に駐め大に寶殿堂宇を興し子院廿六區を建立し輪奐壯麗儼然たる名刹にして世間稱するに西海の高野を以てしたるが後屢々兵燹に罹り應

永中大友氏更に六坊を建立せしも復たく荒廢に歸し今は只僅に東北二坊を存するのみ危岨嶽々觀國峰の眺望最も妙なり建久七年緒方惟榮の一族大野九郎泰基北山に據り大友能直に抗し遂に戰死したる古戰場にして山頭に泰基の墳墓あり。東一里半にして養老村大字酒井寺に

◎醍醐寺

あり天平勝寶四年(紀元千四百十四年)釋正覺此地に巡錫して偶々酒泉の出づるを認め是れ靈區なりとて一淨刹を建て名けて酒井寺といひ世々台教を奉す後大友親秀の第八子僧となり此に住す天正以降廢寺となりしを岡藩主中川久清修復して碧雲寺天南老師開闢の地たらしめしより今

の寺號に改め同時に臨濟派の禪門となる 豐日志に日土師氏女有り其母酒を嗜めとも家貧にして得ること能はず其女百方勞苦之を給す適ま

一鹿眉來り致へて曰く其處に醴泉あり以て之に充つべし且善く齡を延べ疾を醫すと遂に山下を走りて之を覓ひれば 則 石罅泉有り之を嘗むれば 味 醇美なり大に喜び日に汲んで之を供す郷里之に頼り其の孝徳を感敬す乃今の酒井なり云々蓋し養老の村名も亦之に起因せるものなるべし

東南凡二里七合にして大野村大字矢田に

◎沈墮雄瀑布

あり大野、緒方の兩川無數の溪流を導き來り故に相合して懸崖より落下す高さ九丈餘にして瀾ざり百歩を超ゆ咆哮怒叫無底の深潭に向つて投ずるところ其の響 恰も萬雷の轟く

が如く飛沫濺々宛から驟雨の至るに似たり壯絶凄絶眞に天下の偉觀なり、一町許を隔て、雌瀑あり

大野郡

り高き十餘丈、幅一丈一渦直下白雲其の下に湧く亦た頗る壯觀なり、

沈 墮 瀧

近衛前關白久前

同 上

石 川 丈 山

峰巒一派掛長虹、亂溜散漫烟霧中、嶺白銀河波底出、白龍倒下碧雲宮、
疎傑巖涯不測淵、驚湍急激眼如眩、高源漲落飛氷雪、萬馬千雷吼淵川、

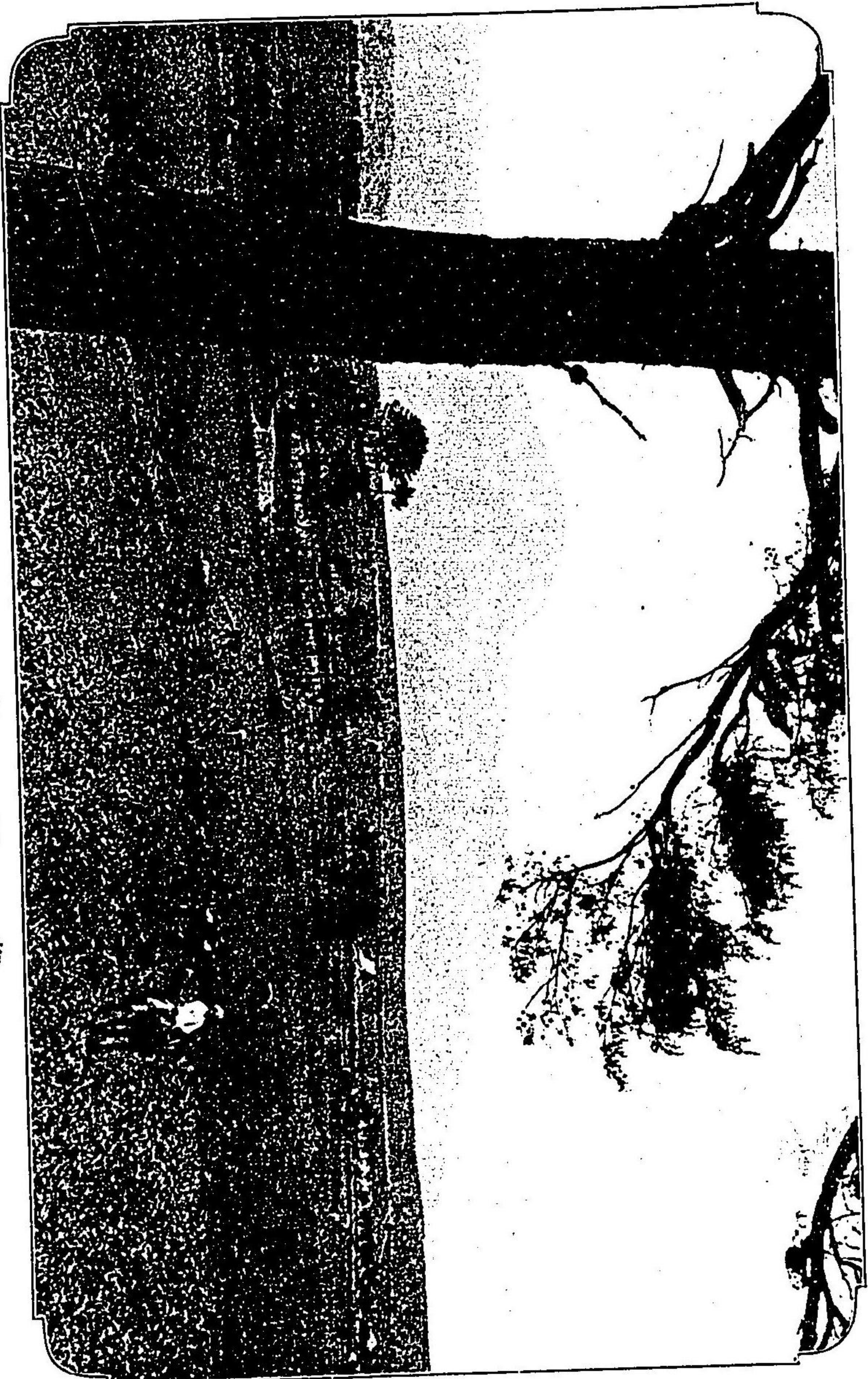
同 上

堀 杏 庵

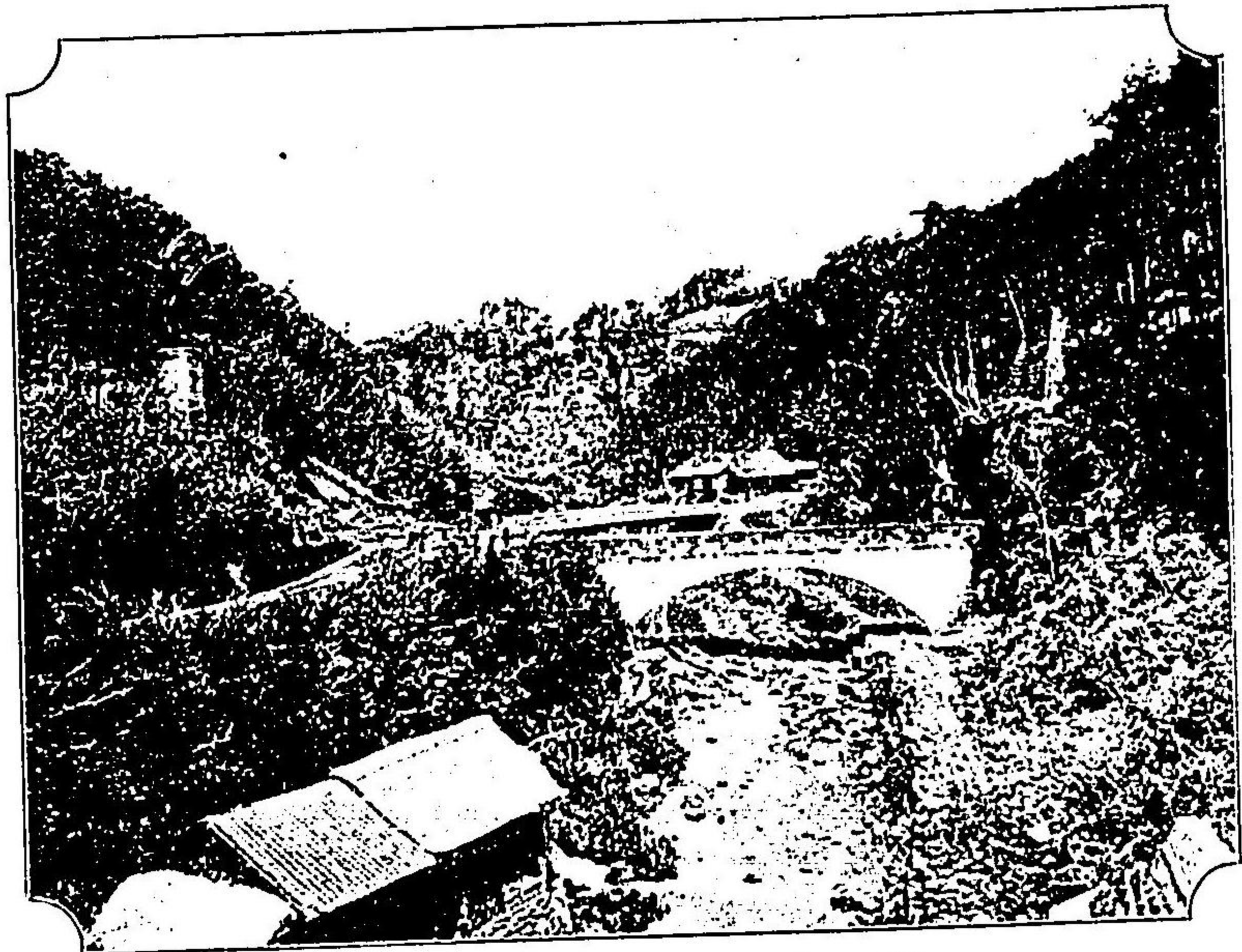
飛流如雪又如虹、人骨清冷一望中、高直明々奇絶處、却疑素練落天宮、
飛瀑落來沈墮淵、淵深巖嶮忽爲眩、古今此處號男女、盟久千年山與川、
流に沿ふて下ること四里大野河畔に

◎大飼市街

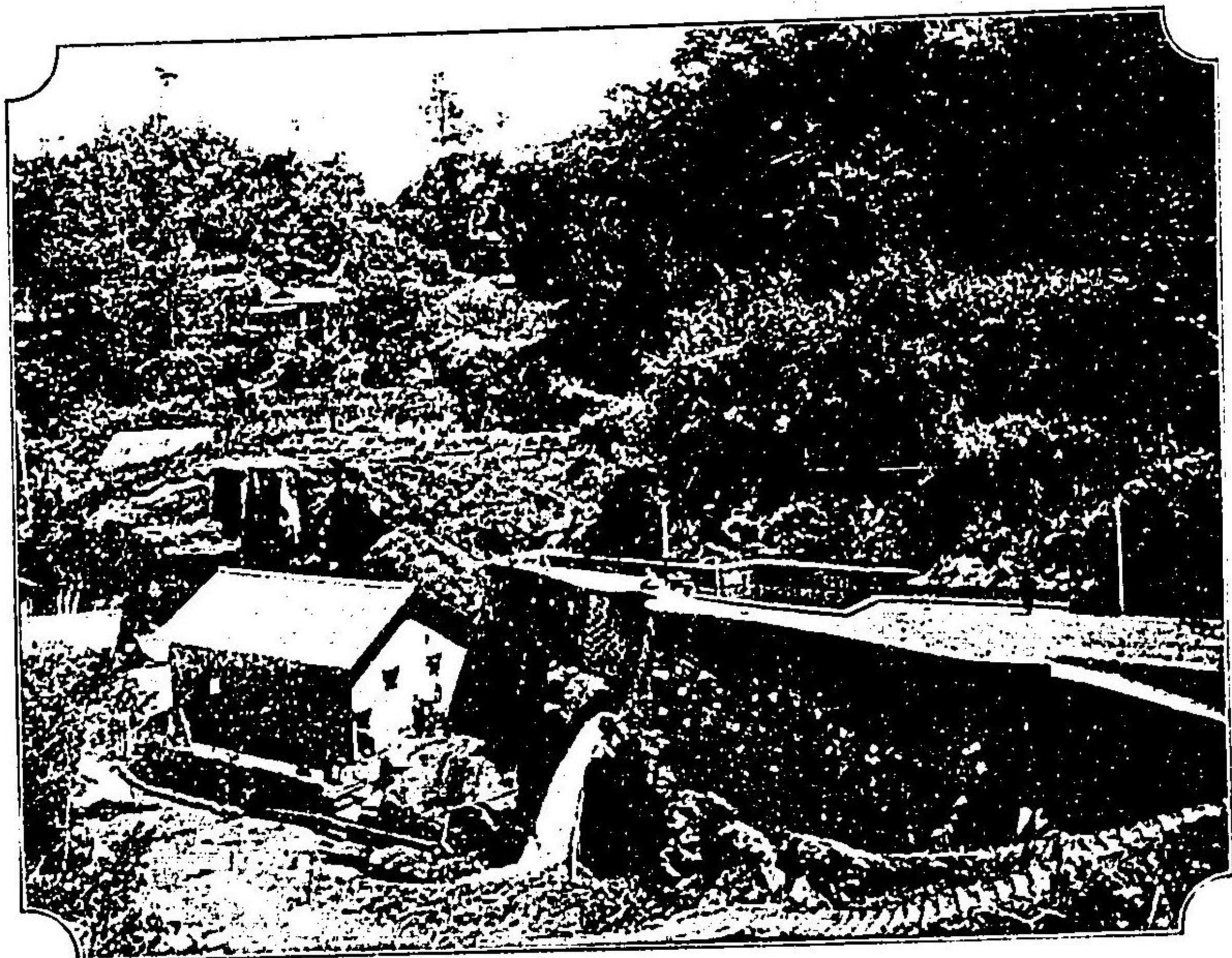
あり郡中三重町に次の繁榮地なり、國道三十六號線に浴び又大野川を控へ水陸の
運輸至便にして郡内北部各村の貨物は皆此地に於て集散す之れより大分郡戸次村を距る三里同郡鶴
崎町を距る五里餘の間船楫の便あり兩岸の風光應接に遑あらず船を叩いて朗吟を放まにすれば餘
韻猶々巖に碎け山に没して幽禽かなたに飛ぶも閑なり



野 村 牧 場

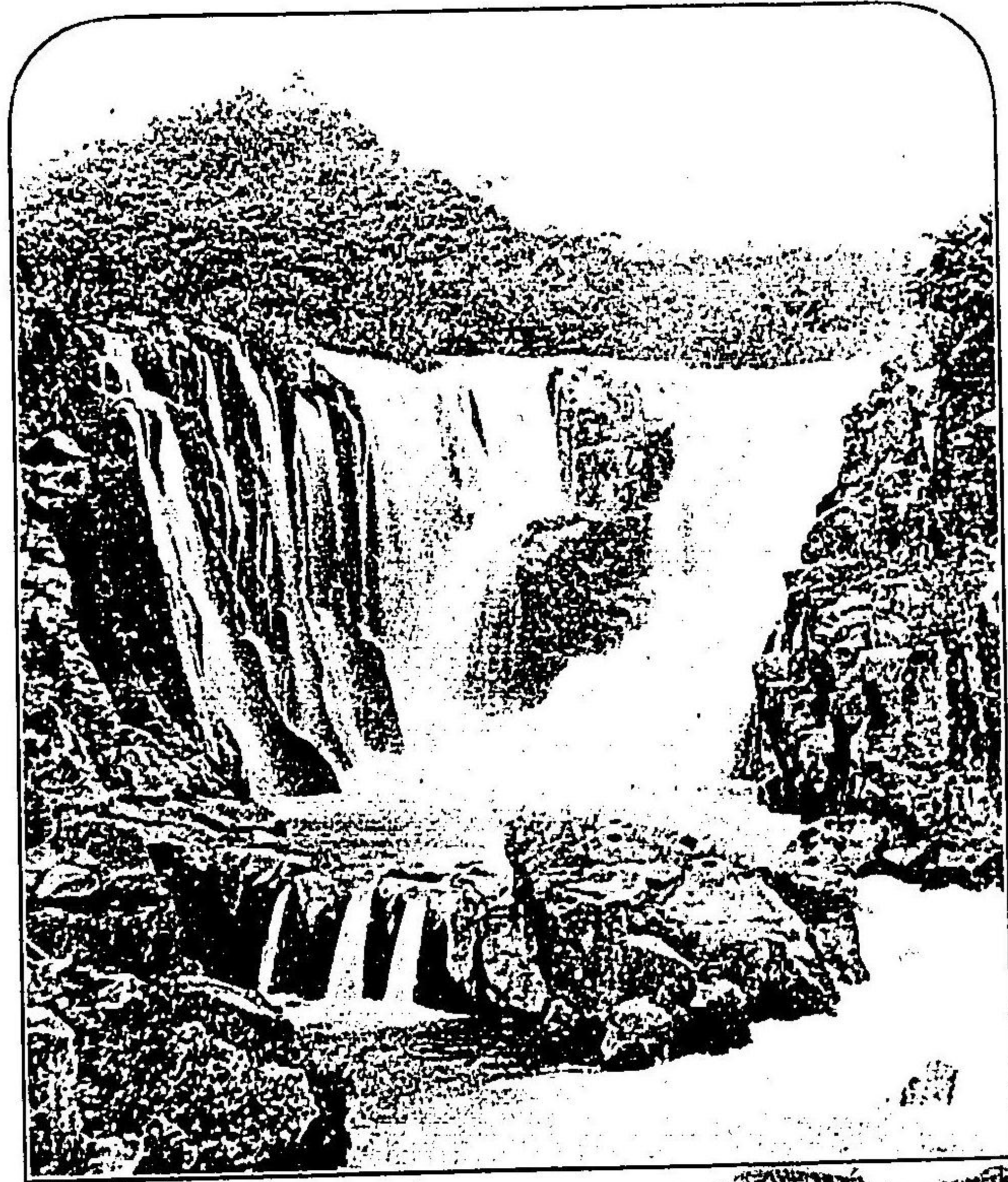


上吹路井宮若



所電發社會電水田竹

魚住ノ雄深



魚住ノ雌深



社 神 原 城 社 縣



園 公 池 納 村 住 久

大分縣案內

◎直入郡

竹田町 岡城趾 鐘樓 願成院 願成園 魚栖澤布 碧雲寺 英雄寺 水電會社發電所 山下公園 郷社中川神社 扇
 森稻荷神社 玉來村市街 縣社建男宿瀨日古神社 村社池田 祖母山(又靈巖) 白水澤布 荻嶽 忠縣屋 郷社福野野
 神社 縣社藤原八幡社 血田 七ツ森 縣社城原八幡社 水原山 久住村 納池公園 南山城址 海石嶺山 九重の曠野 法華
 院 九重山嶺 大船山 黒嶽 七里田温泉 郷社宮庭野神社 湯の原温泉 郷社初山八幡社 蛇生源澤布

地勢縣の西南に位し南は肥日兩國に東は大野郡に西は肥後に西北は玖珠郡に北は大分郡に接し面積三
 十五方里二二廣袤東西三里三〇南北九里二二戸數九千二十九、人口四萬四千六十三を有す土地高峻氣
 候寒冷にして瘠土多し道路は熊本縣道、竹田より臼杵道、同産山道、同森道、同高千穂道、久住より
 大分港道等あれ共概ね險惡なり産物は米、大豆、烟草、繭、紙等なりとす

風土記を案するに昔者郡東垂水村有桑生之其高極凌枝幹直美俗名直桑村後人改曰直入郡也とあり而し
 て萬葉集には名欲に作れり鎌倉朝府の頃より大友氏の旅志賀氏の所領となり文祿二年大友氏國除の日
 志賀親次また城を捨て去る同年九月熊谷半次、直入大野兩郡代官となり翌三年二月中川修理大夫秀
 成、播の三木より岡城に移封せられ奕世相襲ぎ以て廢藩置縣に至る

◎竹田町

直入郡

山間の一小都會にして戸數一千百四十八、人口六千零四十七を有す直入郡役所、竹

田警察署、竹田稅務署、竹田區裁判所、葉煙草專賣支局、郵便電信局、竹田中學校、竹田水電株式會社、竹田登高株式會社、四山株式會社(製糸所)、豐陽俱樂部、開産株式會社等あり旅館は豊前屋國東屋、増田屋を最とし料理屋は一味樓最も好し

◎岡城趾 市街の東南約三合の處に在り其の狀牛の臥するが如し因て臥牛城の稱あり昔時天下無比の要害と稱せられし名城なりしも今は唯だ斷礎を寒烟野草の中に留めて空して狐狸の巢窟となり人をして轉た今昔の感に堪へざらしむ舊天守の地に菅公祠あり中川氏入國の當時より鎮守として祭れる所なりと云ふ今尙ほ此附近を天神山と呼べり

岡城趾之碑

父老相傳曰 岡城者往昔源義經將西下緒方三郎惟業築堡此山以待美經遂不果焉建武中大友氏之族志賀貞朝修其舊堡始致廣大稱岡城天正中薩軍之入豐也諸城或陷或降獨岡城將志賀親次邀戰各所屢敗之敵遂不得近焉後大友義統國際親次乃棄城去文祿癸巳吾先君中川修理大夫秀成移封自播之三木更益修繕以爲治奕世襲之城據山帶谿斷崖屏列其險稱天下無比嗚呼河嶽靈淑之氣鍾而生偉人至今英君志士輩出所以盡於心王事者亦豈偶然哉明治維新中川氏奉還版籍城亦隨廢爾來既經十有餘星霜草木繁茂日爲狐狸所窟唯見嵐氣鬱勃城趾高時白雲之間若夫櫻馬埒之春色與歡月臺之秋光猶有粵孺于當時老也於是乎故封內士庶樹石于牙城之趾勒其梗槩以表甘棠之意併記父老口碑亦如此

明治二十年五月建

市街の東端絶壁の上に

◎鐘樓 あり延寶三年十月藩主中川久恒始めて之を設く全市街を瞰下して祖母、朽網等の諸嶺亦た一瞬の内に落ち眺望絶佳なり、市街の西端八幡山の中腹に

◎願成院 あり眞言宗古義派なり元外城愛宕社地に在りしを明治維新神佛分離の際大隆院趾に移轉し其の廢趾を繼ぐ頗る眺望に富めり境内の愛禮堂は寛永十二年藩主中川久盛の建立にかゝり外部は白木造りにして内部は彩色を施し其の精巧殆ど人目を眩せしむ弘法大師筆佛畫二軸、同自作像一個を藏す、字友見谷清澄氏邸内に

◎躰園 あり老株滿庭を埋め花時の盛觀譽ふるに物なし加ふるに其の境幽邃にして自ら武陵桃源の趣あり因に記す豊臣秀頼の近臣安威八左衛門大阪落城の時其の妻の緣故に依り中川家を頼り來りたるを以て藩主久盛之れを城下下谷に置き合力米六十石を附與す八左衛門後祝髮して友見と號せしより遂に此地を友見谷と呼ぶに至る中川家の寶物たる玄翁正宗の名刀及び今高流寺に秘藏せる豊太閤の像は友見當時携へ來り獻納せしものなりといふ、市街の南西凡二合ばかり字魚栖に

◎魚栖瀑布 あり雌雄相連り高さ各十數間、幅八十間に及ぶ水勢滔々旬然として落下す下流に橋あり魚栖橋と云ふ橋上より雄瀑を望む頗る壯觀なり橋を渡り流れに浴ふて少しく溯れば滾々

直入郡

として清水の湧出する一大岩窟あり清涼窟と云ふ泉味最も甘冽なり加ふるに咫尺の間に雌瀑の響々落下するあり爽快謂ふべからず盛夏探涼の客陸續相踵ぐ、稻葉川の向岸豊岡村字七里に

◎碧雲寺

あり慶長年間創始にして中川家累代の菩提寺なり山門に掲ぐる碧雲寺の額は朝鮮に於て藩祖の分捕せしものなりと云ふ藩主歴代の壁前に池あり燕子花多し又た境内數百株の櫻樹あり年々歳々花相同じく春到れば紅雲全園を霞め芳芬半空に満ちて自ら人の遊情を惹く、碧雲寺の西隣斷崖の上に

◎英雄寺

あり寛永中中川内膳正久盛、母氏の命を奉じ外祖父佐久間玄蕃頭盛政追福の爲め創建せしものなり規模甚だ大ならずと雖も頗る山水の佳趣に富む、又市街より西南に熊本縣道を行く三四町にして字山手に

◎水電會社發電所

あり三十三年二月十一日起工同年七月七日を以て開業す發電機は三相式にして水車馬力一百を有し十二燭光一千零四十個を點燭し得るといふ晝間は電力を工事に使用し夜間は竹田、玉來兩市街及豊岡村字下木に點燭す、尙ほ五六町進めば玉來村大字拜田原常盤山下に

◎山下公園

あり元祿十一年七月藩主中川因幡守久通、此地を開きて別業を營み其の邸前に池塘を設け下段に打毬騎射の馬場を作り四邊植ゆるに松杉檜樹を以てす所謂山下の於茶屋之れなり明治維新後玉來外十三町村組合共有の公園となる、山上に

◎郷社中川神社

あり藩祖中川清秀、秀政、秀成の靈を合祀す松樹鬱蒼として前に玉來川を隔て遙かに祖母、傾の諸峰を望み後に稻葉川を挾んで三宅、騎牟禮、九重、大船、黒嶽等の諸山を眺め風景極めて佳なり藩祖朝鮮の役に用ひし陣太鼓、西曆一千六百十二年鑄造に係る「サンチアゴ」國の釣鐘及舊城内にありし藩制時代の時太鼓等を藏す、園の前より川に沿ふて溯ること約半里程玉來村大字玉來に

◎扇森稻荷神社

あり俗に狐頭稻荷と呼ぶ遐邇の參拜者絡繹として絶ゆる時なく社頭に鬱蒼たる森林あり無数の雞群常に其の梢に棲息す、神社の下より川を渡れば

◎玉來村市街

に出づ人家櫛比商業繁盛なり、南に往くと三里半嶮嶽村字神原に

◎縣社建男霜凝日古神社

あり式内の古祠なり豊玉姬命を以て彦五瀬命に配祀し建男霜凝日子神と稱す 孝徳天皇自維二年(紀元千三百十一年)の創建にして同年代の朽材今尙ほ存せりと云ふ軍旗二旒(緒方惟榮の平家追討に用ひしもの)扁額二面、藤原光長作鏡、吉光、守長、大和守忠行、來行長、伊勢村政、了戒、天國其の他無銘の寶刀十數口、木御、梵鐘、等の寶物を藏す 延喜神祇式日直入郡一座建男霜凝日子神社 續日本後紀日承和十年豊後國無位建男霜凝神授從五位下 三代實祿日元慶七年授從五位下建雄霜起神正五位上 直入郡

祠に傍へる小遷を登れば嫗嶽の頂上に達す一溪を隔て字波來合に叢祠あり

◎村社池社

と云ふ俗に穴森明神と稱せり大蛇の靈を祭る豐後國志に曰く昔林樹鬱蒼白日晦の如し傍に池あり碧浪常に湛へ淺深測るべからず巨蛇あり此潭に潜む民敬畏之を崇めて池明神と稱す毎歲九次の祭あり若し祭禮神意に愜はざる時は俄然風雨晦冥必ず崇有り其他民害常に多し岡の先侯山城守久清嘗て之を聞て曰く夫れ民は神の主民和すれば神之に依る豈之を害するの理あらんや乃其の臣大河原某に命じて功を興し土師、藤北、次倉、九重野の諸村丁をして盡く林木を伐り池水を竭して妖神を驅らしむ興作る三日山林鳴動暴風大雨迅雷飛電日夜昏黑百獸喧叫吏民懼れて功を廢す某乃ち瞑目劔を按じて曰君命に従はざるものは之を斬らん於是乎三旬にして功成民始めて安ん今に至つて其賜を受く蓋是公の力なり池水既に涸る傍に洞穴あり濶二丈高八尺其深さを知らず是其の磔窟なり元祿中因幡守久道家を嗣ぐの後適ま村民三人あり炬を擧げて穴に入る既に入ること三十餘歩物あり路に塞る之を燭せば怪石にして色黄に大なる斗の如し乃ち石を以て之を撃てば裂て兩斷と爲る相昇で出で之を觀れば則獸頭骨にして其の幾百年を経しものなるを知らず形牛より小に犬より大に宛然蛇頭骨なり遂に官に告ぐ寶永二年官命じて其側に於て石崖を鑿ち以て之を收めしむ舊祠を收め改めて穴森神と號す大神の族をして祭事を掌らしむ是世に稱する所の蛇人に化して來り大神氏の女華本なるものに通じて子を産み輝大童と名け緒方黨の祖とする所以のものなり(下略)

山を攀づること三里

◎祖母山嶺(又嫗嶽)

に達す石祠あり建男稻凝日子神を祭る里人之を上宮と稱し山麓の神祠を下宮と稱す九州第一の高山にして山脚肥後、日向に延ぶ嶺上常に雪あり四五兩月の交を登山の時期とす頂上に達すれば群山悉く脚下に雌伏し千里一色茫茫平野の如く雄壯言ふべからず山中「コマ」「ルリ」等の諸鳥及び虎斑竹其の他珍卉異禽甚だ多し。山麓より四里強西に當りて柏原村字陽目に

◎白水瀑布

あり又陽日深いづみの瀑等の名あり蓋しいづみの名は千種有功卿の豊國のくにのたからといはまよりわきていづみのたきのしら玉

と詠せられしに起る白水の二字を一字にあやまりよまれしか將た故らにみやびならざるよりあらためられたるにや今知るに由なき兩岸碧嶺屏の如く無數の石罅より千條の水鳥籠を吐出す眞に天下の奇觀なり其の域殆んど二町許に渉り瀑布の數九十九あり故人の詩「百泉中只缺一」の句あり宇都宮達山曾て此地に遊び絶賞措かず宇宙間三大奇瀑の一と爲す近來白水井路開鑿の舉あり石罅の下に渠を穿ち中途より水を他に導き去りて大に舊觀を失へるは千秋の恨事と云ふべく下流に川海苔を産す陽目海苔と稱へて味頗る美なり。北凡四里萩村大字藤渡に

◎萩嶽

あり山甚だ高峻ならずと雖も茫々なる原野の中に崛起し四望豁然晩春の頃山上より四方の菜花を望めば一面の黄雲野を掩ふが如く頗る壯觀なり肥の萩嶽を距る僅に半里、山容酷似せるを以

直入郡

て豊後萩嶽の稱あり。山麓より北一里半菅生村、大字小塚字朝鍋に

◎鬼巖屋 あり懸崖絶壁高さ百尺餘巖穴の廣さ百人を容るゝに足る是れ古昔皇軍に抗したる土蜘蛛、打獲、八田、國麿等の礫居せし遺趾なり。東南凡七合同村大字今字栗木に

◎郷社爾野神社 あり 景行天皇を祭る即ち 天皇土蜘蛛八田を滅ぼし玉ひし處にして後人行在所の附近に祠を建て 天皇を祭りしものなり社殿の東凡一町の處に行宮址の碑あり

日本紀景行紀曰 便勒兵先擊八田於爾野而破 豊日志曰 此境悉誅其衆類處後人立祠爾野及萩嶽祠並奉祭景行天皇 少しく東に方り同村大字菅生字塚原に

◎蜘蛛塚 あり塚上に小篠篠生唐橋君山が豊後風土記箋釋曰血田北有古塚一曰蜘蛛塚一殺賊所埋又曰昔者殺土蜘蛛之爲レ墳故曰蜘蛛塚一皆是なり

◎血田 蜘蛛塚の東一丁餘の凹所に在り(豊後風土記に海石榴市、血田を大野郡とせるは誤れり) 日本書紀曰 則採海石榴樹作推爲兵因簡猛卒授兵推以穿山排草巖石室土蜘蛛而被于稻葉川上悉殺

其黨血流至蹀故時人其作海石榴椎之處號曰海石榴市亦血流之處曰血田也風土紀記載する所亦同文 なる 東南凡三合大字戸の上字國方に

◎七ツ森 あり古木鬱鬱林中に七個の小阜聳立す豊後國志に曰荒墳七あり柏原郷戸上村に在り皆封して樹ゆ接列するもの七舊大塚村と云ふ呼ぶ七塚と云ふ又一處菅生村塚原に在り一處小塚村に在り

景行天皇滅し玉ふ所の土蜘蛛の墳なりと云ふ一説に其の墳墓の甚だ壯嚴なるより考ふるに是れ或は賊墳にあらざして官軍戰歿者の遺骸を葬りたるものには非ざるか此地を國方と稱するも恐らくは御國方即ち官軍方と云ふの言ならんと云へり暫く記して疑を存す夫れより。北東三里城原村大字城原に

◎縣社城原八幡社 あり殿宇壯麗郡中の宗祠なり 景行帝土蜘蛛征討の時風雲を駐め給ひし地にして事は日本紀に詳なり後人祠を立て、天皇を祭り其の地を宮園又御園等と稱す 文徳天皇天安二年(紀元千五百十八年)八幡大神降臨の驗あり國司以聞して祠を建て日野某をして祭事を掌らし

む後 景行祠を合して之に配祀す仁平中源爲朝騎卒禮(豊岡村大字飛田川に在り今古城と稱す)に居りし時大に修葺を加へ建久九年大友能直重ねて修補を施し國中七祠の一と爲す天正中隆兵亂入の時兵燹に罹り鳥有に歸せしを文祿三年中川氏封に就くの日神影を城西勝田に移して祠を造營す又神託に依り慶長の初年舊地に復す其の主なる寶物左の如し

- 縁起書 四通 貞和年間祈禱沙汰文 神領寄附狀 八幡宮縁起繪詞 二 八幡宇佐宮本縁
- 木原神社八勝詩歌 張良秘術卷 近衛信尹卿色紙 扁額 四 棟札 九個 銀圓鏡 二
- 直入郡

爲朝の簇 神通鎗矢 軍旗 劔 十數口 長柄楯 拾本 唐金神饌鉢 二 鰐口 一
 鈴臺 一 曲玉 一 丸珠 一 馬の角 一本 長尺竹 一 土玉 一 牛玉 一
 顯 月日貝 一組 鳩杖 一本
 北凡七合にして

◎木原山

あり蒼翠鬱鬱其の形覆蓋の如し俗に鉢山と呼ぶ日本紀城原に作り萬葉名欲に作る有賀長伯著、秋の寢覺に播磨とせるは誤れり萬葉名欲山の和歌の作者藤井連は廣成といひし人にて天平中豐後介となり直入郡我鹿屯倉に居りし人なり

萬葉

あすよりは我は戀なん名欲山石をふみちらし君かこえなは

名欲娘子

西に行くこと一里強にして

藤井 連

◎久住村

あり山間の小市街にして養蠶製糸業頗る盛なり。市街より西北凡二十五丁字青柳に

◎納池公園

あり池の面積二反餘歩、清水池底より湧出じ極めて清冽なり池の周圍に數十本の老杉あり彬々として香淡を凌ぐ又池中に大小の島嶼數個あり其の大なるものを辨天、妙見と云ひ周圍各數十歩奇石異草多し若夫れ三伏溽暑の候に當り半日の清遊を試みんか爽快固より肥の水前寺に譲らざるべきなり。夫れより西南一里半にして白丹村字大知庵に

◎南山城趾

あり大友氏の族志賀氏の居城にして竹田岡城の志角を北志角と唱へ此城を南志賀と稱す版圖強大威勢鎮西に振ひしが天正十四年薩軍の侵す處となり戦ひ敗れて終に亡ぶ。西北一里強同村大字白丹字稻葉に

◎海石榴山

あり今椿山に作る 景行天皇土蜘蛛征討の時兵権を作り給ひし古跡なり。北溪を渡り凡七合程往けば

◎九重の曠野

あり廣袤數方里牛馬數千頭を放牧す原野を横ぎり鋤破り木録の二峠を越ゆれば凡一里餘にして

◎法華院

あり天台宗の古靈場なり 傍に温泉場三所冷泉場二箇所あり温泉一は硫黄泉他は明礬泉にして春夏の洗浴客甚だ多し冷泉は俗に寒の地獄と唱へ寒冽研るか如く人若し手足を浸せば瞬時に知覺を喪ふ。之より山に登ること一里

◎九重山嶺

に達す大船山と駢立し高さ伯仲の間に在り山脚周廻六七里玖珠郡及び肥後に跨る高峰九あり其の狀九山の重疊するに似たり仍て九重の名あり南面第一峰の上に二大池あり一を空池といふ水無く深さ三百餘仞一を猪鹿狼寺と云ふ深々湖の如く深さ測るべからず後峰に祠あり綏靖天皇を祭る俗に九重山明神といふ西北に硫黄山あり常に硫黄を噴出す其の質良好なり西南の半腹に梵宇あり猪鹿狼寺と云ふ建久五年源頼朝富士野に狩するや先づ梶原景季、仁田忠常をして田獵

直入郡

の故法を阿蘇大宮司に問はしむ乃ち九重山の裾野に於て其の獵法を講じ獲る所の禽獸を埽め一字の寺を其の上にて建て名けて猪鹿狼寺と稱すと今裾野に仁田原と稱する地あり

◎大船山 九重山の東に在り一に前岳と云ふ山嶺に池あり澄潭一碧其の深さを知らず大早と雖も曾て減水せし事なし池畔石楠木、躑躅、燕子花等多し皆倭假宛然錦を舖くが如く頗る美觀なり絶頂に一峰あり國觀と云ふ平坦砥の如く四顧空濶一眸千里を窮め豐後灣上の白帆歴々として數かべし山を下ること一里石華表窪に藩侯中川山城守久清の廟あり山麓に一大石あり殺生石と云ふ昆蟲之れに觸るれば即ち死す

◎黑嶽 大船山の東北に在り樹木蒼鬱遠望常に黒し故に此名あり又た其の形人面に似たるより俗に於多福山と呼ぶ四面絶壁傑づべからず九重大船の二山と共に球單郷に蟠踞し肥豐兩國を睥睨す、故に古來三山を併せ稱して救民山と呼べり

萬葉 玖多美やまたなる雲のうすろかは我はこひんな君かあたりを
夫木 くだみ山くちたてりとや思ふらんしられぬ谷の松の布留えを
山麓より南凡そ二里都野村大字有氏に

◎七里田温泉 あり上の湯下の湯の二池あり分拆表及び醫治効用左の如し
泉質 炭酸泉 (上の湯)

本泉の形状は無色透明にして性は酸性を反應し之を煮沸すれば白濁して亞見加里性に變じ本泉
一「リートル」中に含有せる固形成分の總量は二、五七七六瓦馬にして之を熾灼すれば其重量〇、
三四九六を熾失し其檢出せる泉中所含の各成分は左の如し

石灰	多量	苦土	稍多量	礬土	少量	鐵	著明
曹達	稍多量	加里	僅微	硫酸	稍多量	鹽酸	著明
硝酸	著明	硼酸	痕跡	硅酸	著明	炭酸	多量

有機物 僅微
醫治効用 慢性筋及關節痠痛、痛風、炎症後の慘出物、神經機能の亢進、神經痲痺、婦
人生殖器の慢性諸病、貧血重病後の回復期、腺病、膀胱及腎臟性炎症痛、頑癬等に適應す
泉質 炭酸泉 (下の湯)

本泉の形状は無色透明にして性は酸性を反應し之を煮沸すれば白濁して亞見加里性に變じ本泉
一「リートル」中に含有せる固形成分の總量は二、四五四瓦馬にして之を熾灼すれば其重量〇、三
五四四を熾失し其檢出せる泉中所含の各成分は左の如し

石灰	多量	苦土	稍多量	礬土	著明	鐵	稍著明
曹達	多量	加里	僅微	硫酸	著明	鹽酸	著明

直入郡

硼酸 痕路 硅酸 稍多量 炭酸 多量 有機物 僅微

醫治効用 上の湯に同じ

東方凡五合都野村大字佛原字市に

◎郷社宮處野神社

あり 景行天皇嵯峨天皇日本武尊を合祀す素と 景行祠嵯峨各別なりしを何時の頃よりか相混じて單に嵯峨宮と稱するに至り明治維新後更に宮處野神社と改稱せしなり 每歲陰曆十月盛んなる祭典あり神保會と云ふ

日本紀に云天皇即留于來田見邑、權興宮室居之、豐日志曰、 景行天皇次于朽網、作行宮居焉議討賊之事、其地名宮園、後人立祠奉祭、

風土記曰 起行宮於此野、名曰宮處野、蓋宮處野宮園方音相通、按嵯峨祠在其近、故後世相混、惟餘一祠、單稱嵯峨、而景行祠遂廢、今詳舊趾即宮園南有一頃田、土人皆曰天皇警蹕之處不敢蕪穢觸其田、其側有湧泉極清潔、名御供水、衆皆畏敬、即此也、

豐日志曰、直入郡擬大領膳臣廣雄有女弘仁中、爲采女有寵、上皇崩後、還鄉爲尼、當有所賜、葬諸屋側而事之、後稱嵯峨宮、是也、建久以來來大友氏世奉祭每歲十月供神馬一疋、使朽網氏掌其事名曰神保會(中略)此祠舊高宇壯麗天正中爲兵燹、凡豐南問寺祠之故、即里人皆憤恨拭淚曰、赫赫高堂巨宇、隆賦何慘悉燒爲灰、

東に向ふこと一里弱長湯村大字長湯に

◎湯の原温泉

あり上、中、下の三池に分つ成分醫治効用左の如し但し三湯共成分大同小異にして醫治効用悉く同一なるを以て單に上の湯のみの分析表を掲ぐ

泉質 炭酸泉 (上の湯)

本泉の形状は無色透明にして姓は酸性を反應し之を煮沸すれば白濁して亞見加里性に變じ本泉「リートル」中に含有せる固形成分の總量は二、八六八瓦馬にして之を燥灼すれば其重量〇、四二六八瓦馬を焼失し其檢出せる泉中所含の各成分は左の如し

石灰	多量	苦土	多量	礬土	多量	鐵	僅微
曹達	多量	加里	僅微	硫酸	多量	鹽酸	著明
硼酸	僅微	硅酸	多量	炭酸	最多量	有機物	僅微

醫治効用 七里田の湯に同じ

◎郷社初山八幡社

あり本郡阿蘇野村鎮座の村社直入中臣社とともに 景行天皇土蜘蛛征討の時勝利を祈り玉ひし古社なり。北東に向ふこと凡四里にして下竹田村大字下田北大分郡界に

◎蛇生瀬瀑布

あり高九丈濶七丈、銀河直瀉巨聲轟轟山谷を震撼して白日猶ほ溟溟見る者慄

直入郡

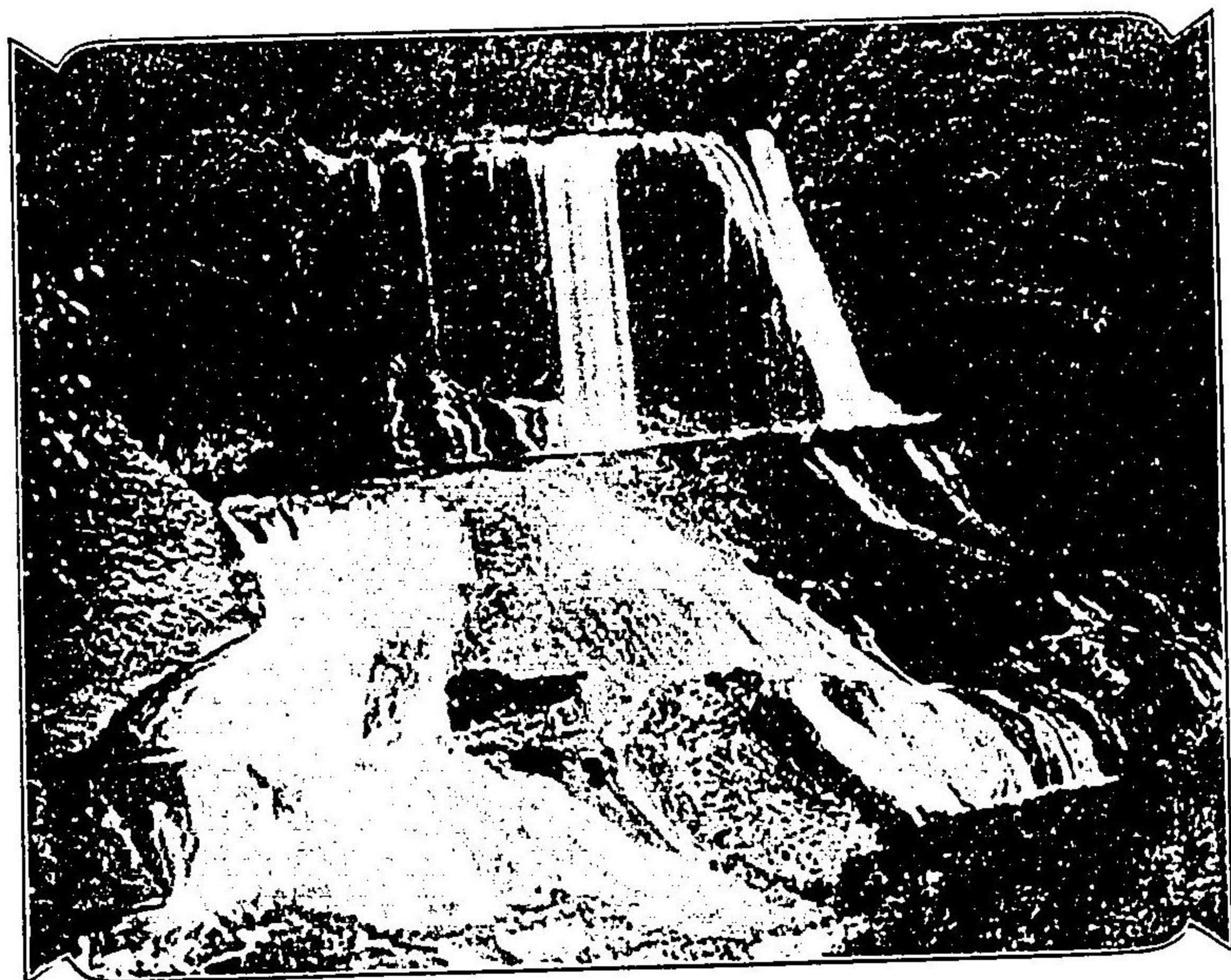
然として膽を寒くす

◎ 玖 珠 郡

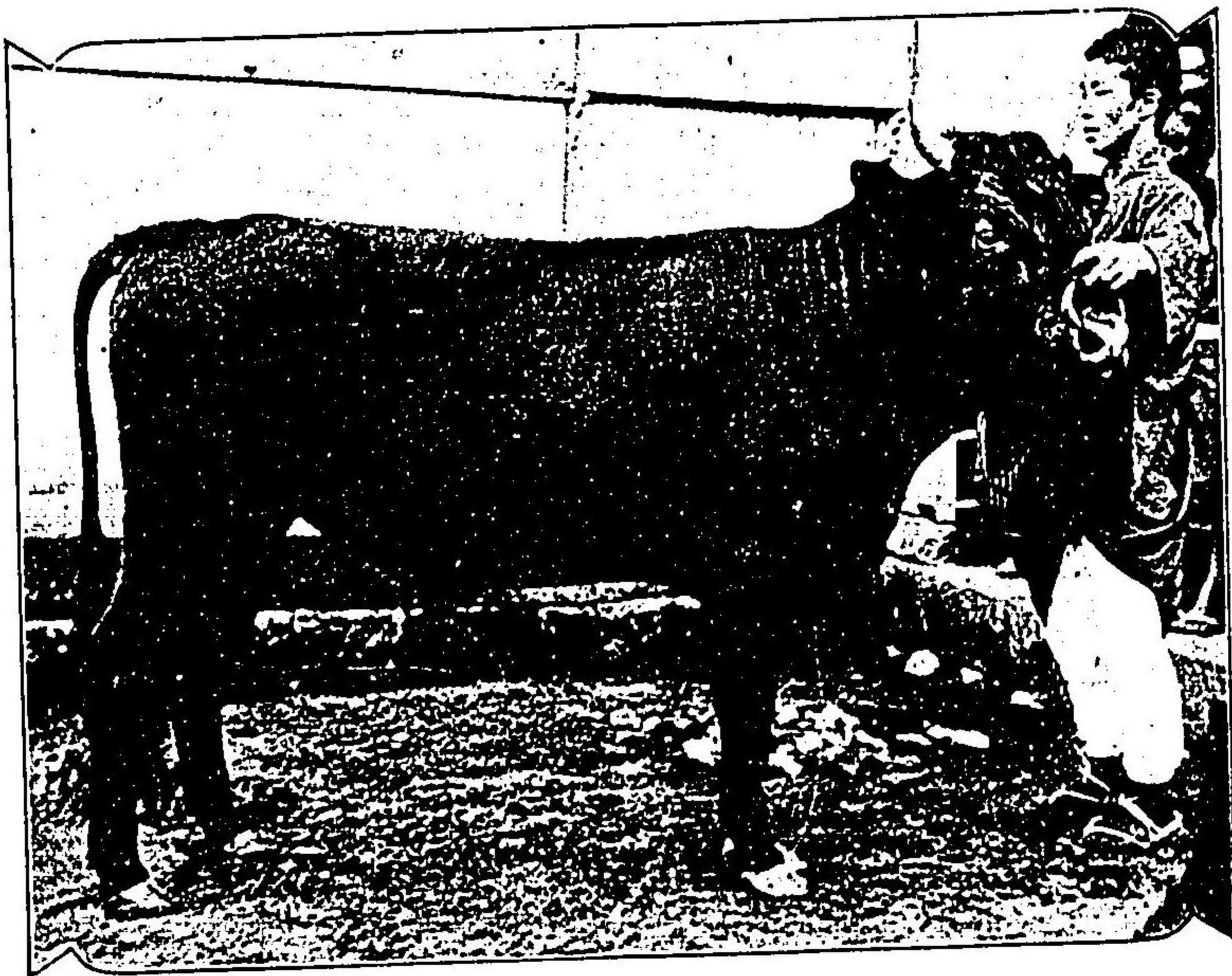
森町 三月月深川 郷社 龍神社 断株山 萬年山 金坑 寶泉寺 温泉 川底温泉 湯坪温泉 寒地獄 硫黄山 震動深川 石 龍門深川 小河内の深布 臥地梅 垣埋城趾 郷社 末廣神社

地勢縣の西北に位し東は速見大分の二郡に堺し西は日田郡に連り南は直入郡に接し西南肥後の疆を限り北下毛宇佐の三郡に堺し面積三十七方里七三、廣袤東西五里一六、南北六里三三戸數五千五百四十四人口二萬九千零九十八を有す群山四面を圍繞し川流中央を縈廻し氣候頗る寒冷なり昔時は大友氏の配下に屬し大友氏滅後久留島氏の領有に歸す、維新前は郡を四郷八十一村に分ちしが今は一町七村とせり山勢峻峭にして平地少く交通の便極めて少し、されど佐賀縣道及び森より都府道の二線には人力車及び馬車の通行あり其の他直入郡竹田町に通ずる道路。下毛郡下郷村に通ずる道路等ありと雖とも概ね險惡にして車馬の通行頗る困難なり郡中の重要物産には米、清酒、木材、硫黄等あり

◎ 森 町 は郡の首府にして戸數一千八百八十一、人口五千五百十七を有し山間の一小都會なり玖珠郡役所、森警察署、森稅務署、豆田區裁判所 森出張所、郵便電信局、株式會社玖珠銀行、株式殖産會社、株式森昌會社、株式會社万田銀行(万年村)、廿三銀行出張所等あり旅館には大有軒、四自館あり料理屋は吉野屋、角左を優とす

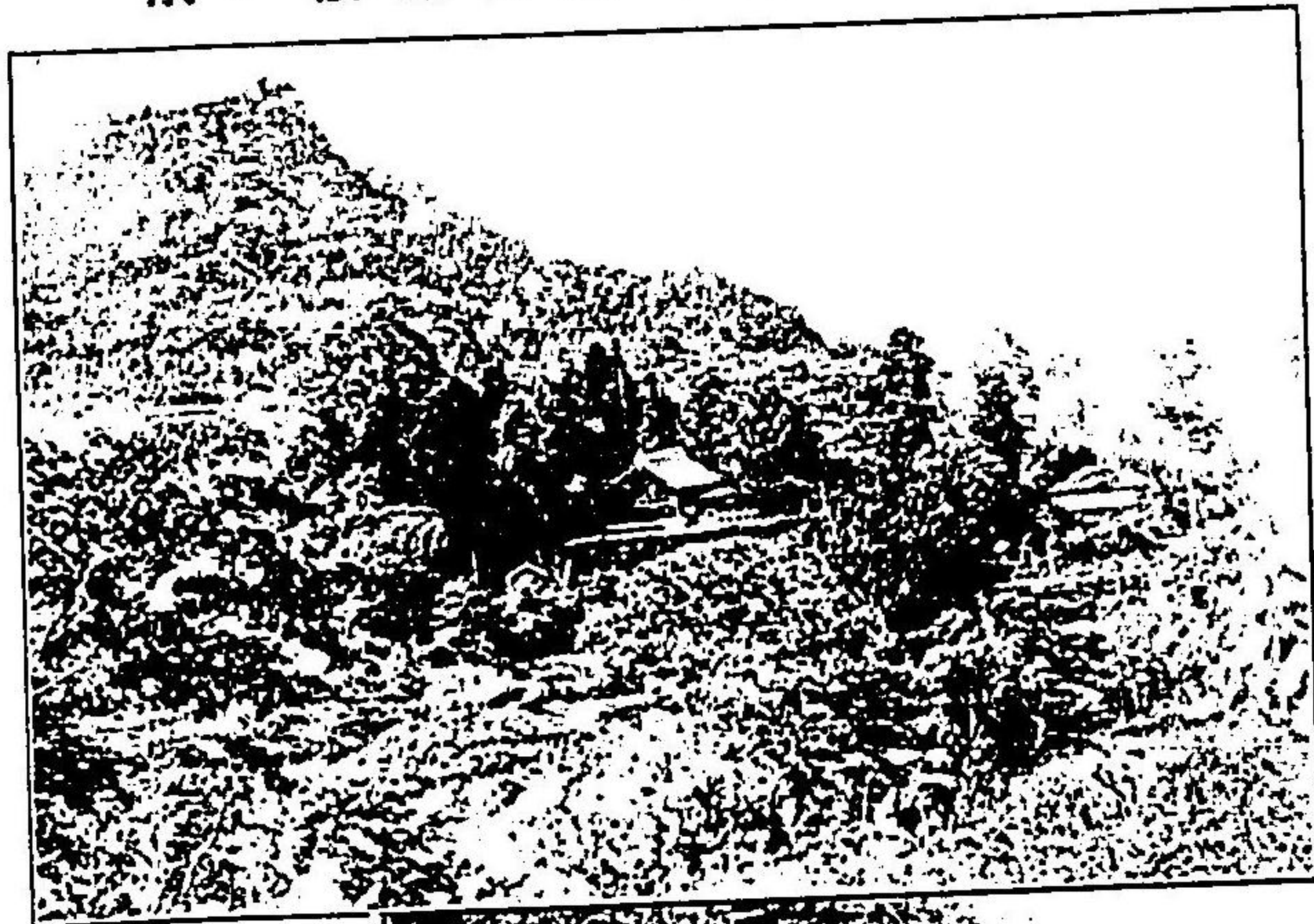


東飯田村竜門ノ瀑



玖珠郡優等牡牛

森町三島神社及棲鳳樓ノ景



舞出橋ノ景(陸橋)



魚返ノ瀧ヨリ對岸森林ヲ望ム景

佐賀縣道を西に進むと二里弱北山田村大字魚返に
あり高と二三丈、淵三十丈素練翠崖に懸り白馬碧潭に跳る頗る壯觀なり瀑畔の叢

◎三ヶ月瀑

林中に

◎郷社瀧神社

あり由緒は万年村塚脇勅稱新宮八幡宮縁起に詳かなり因て左に之を抄出す

八皇四十四代

天武帝第三の皇子一品舍人親王四代の苗裔少納言備後守清原道雄卿嫡男二位少納言

正高卿は性質艶麗優美にして殊更横笛の妙手たり其比小松女院と申す八皇六十代 醍醐帝の一の

宮章明親王の姫君なり然に正高卿の笛の音を戀慕し玉ひし事寂聞に達し逆鱗ましくて女院を因

幡國北野の里に配せられ又正高卿は豊國の歌枕見て参れと勅し給ひ解官ありて但馬介と改め豊後

國玖珠郡へ左遷なり于時天延元癸酉(紀元千六百二十三年)三月十八日に豊後北浦邊の庄に着船

あり(中略)楠郡山田郷に矢野檢校藤原兼久といふ者あり世々所の地頭なり此の節正高卿の御飯内

と成により己が館に招き入参らせ御饗應善盡くし美盡せり尙最愛の娘ありけるを御伽に参らせ長

野の庄に御館を營移し奉る(中略)又女院の御供穴井四郎張次荏隈次郎利勢は先達て楠郡へ遣はさ

れ女院侍女跡より赴給ふて尋給ふにそるにしれず矢野の館に志し急ぎ給ふに戸畑村瀧の邊にて

樵夫に問ひ給ひしに正高卿は矢野氏の聲にならせ給ひ長野といへる在所に住給ふと語りしを聞玉

ひ今は尋ねても證なしとて旅の調度も松が枝に掛玉ひ御泪ながら

玖珠郡

笛竹のひとよのふしと知るならはふくとも風になひかざらまし
と詠し給ひ瀧津瀬に身を投げ給ふとき梅前と云へる侍女

笛の音は紅葉をふくか嵐山枝も木葉も残らざりけり

と詠し十一人の侍女諸共に手を組相携へて水底に沈み給ふ樵夫もよしなき事を語りて多くの人の命を失ひたるを悔ひ續て瀧坪に飛込けり樵夫の友とち此體を見長野の御館に告にければ正高卿は驚かせ玉ひ淵瀬を探し女院侍女の御骸を引揚しに見もやらせ給はでかなし給ひ正觀世音と崇作善供養を營みて天台宗志見堂福田寺に葬り奉る于時天延三乙亥九月二十九日なり後七年を経て社壇を建て瀧權現と追號し給ふは天正四辛巳九月なり入水の月日を祭る日に用ゐ給ふ樵夫は筑後國生葉郡大石村に流れ止り不思議あるによりて里人正高卿の御聞に達しければ則樵夫大明神と其所に鎮め給ふ祭日は同日なり(以下略)

瀧宮權現より東一里にして

○斷株山

あり山容恰も大木の切株に似たり高さ里許周回殆んど二里餘あり頂上は平坦砥の如し傳へ云ふ古昔一大樟樹あり高さ幾千尺なるを知らず其の樹自ら倒れ斷根化して石となりたるもの即ち之れなりと豐後風土記に云昔此の村に洪樟樹あり因て玖珠郡と云ふと蓋し之れ其の謂ひなるべし夫れより西南半里にして

○萬年山

あり高さ二里周圍八里、四面の絶壁削れるが如く頂上里餘平坦の處あり満山躑躅樹を以て掩はれ花色殷紅宛然緋霞を舖くが如し山中四十餘の洞穴あり常に雲霧を吞吐して自然の大觀を極む。山を下りて東に進む三里ばかり南山田村引治に

○金坑

あり獲る所の鍬質純良にして一月中の純益參千圓を超過すと云。南に向て進くと一里半

○寶泉寺温泉

あり浴場二箇所は疥癬諸瘡に効を奏し一は儂麻質斯の類に特効ありと云ふ此地また客舎數戸あり。夫れより西南に向ひ行くこと半里にして

○川底温泉

あり硫黄泉にて硫黄盛に蒸發す疥癬諸瘡に適すといふ。又南東に進むこと四里

○湯坪温泉

あり春秋の候浴客最も多し旅館八戸あり。更に東二里餘にして

○寒地獄

あり泉水極めて寒冽なり泉底湧激發すること恰も熱湯の沸騰するが如し人若し手足を浸せば滿身戰慄倏忽ち知覺を失ふに至る。南に進むこと十丁にして

○硫黄山

あり直入郡九重山と接近し山頂常に硫黄を噴出す大畝の商賈某嘗今硫黄採收に従事す聞くが如くんば一個年の産額二十四萬四千貫餘にして其價格六千七拾餘圓に及ぶと云ふ。硫黄山の北凡一里の處に東西二里に餘る渺茫たる曠野あり

○千町燕田

といふ麓薄一面に生ひ茂りて水氣滋く仲秋の頃に至れば出穂恰も萬頃の田園を望むが如く且つ其の色に區劃ありて早晚稻種の一様ならざるが如き觀あり土俗傳へて往昔朝日長者

玖珠郡

の住みし遺趾なりといふ當今三十有餘戸の移住民ありて専ら開墾に従事し居れり又た千町蕪田と相接して無數の牛馬を放牧せる處あり大分牧場と呼ぶ。夫れより北東に向ふこと一里強にして

◎震動瀑布

あり直下數十丈岩角に激するところ水聲轟轟として地軸爲めに裂くるかと怪しまれその響き遠く數里の外に達すと云ふ。更に北すること三里與双石川に

◎魚石

出づ其の色黃褐色にして之を割れば兩片となり中に枯魚の如き狀あり土人呼んで魚石と云ふ遂に里の名を負ふに至る。夫れより三里半北西に進めば

◎龍門瀑布

あり傍に一梵宇あり龍門寺と號す瀑布の稱蓋し此に出づ高さ五丈、淵二丈餘中斷して二段となり下て深潭に入る東岸を吐月峰といひ西岸を歸雲洞と呼ぶ中段瀑流の湛あるところを白雲庭と名け下流巖角に碎けて碧淵に注ぐところを金珠淵と稱し傍の一小望亭を普證閣と命ず世に瀑布多しと雖どもその優美なる斯の如きは多く比を見る能はざる處なりとす更に北東三里強にして

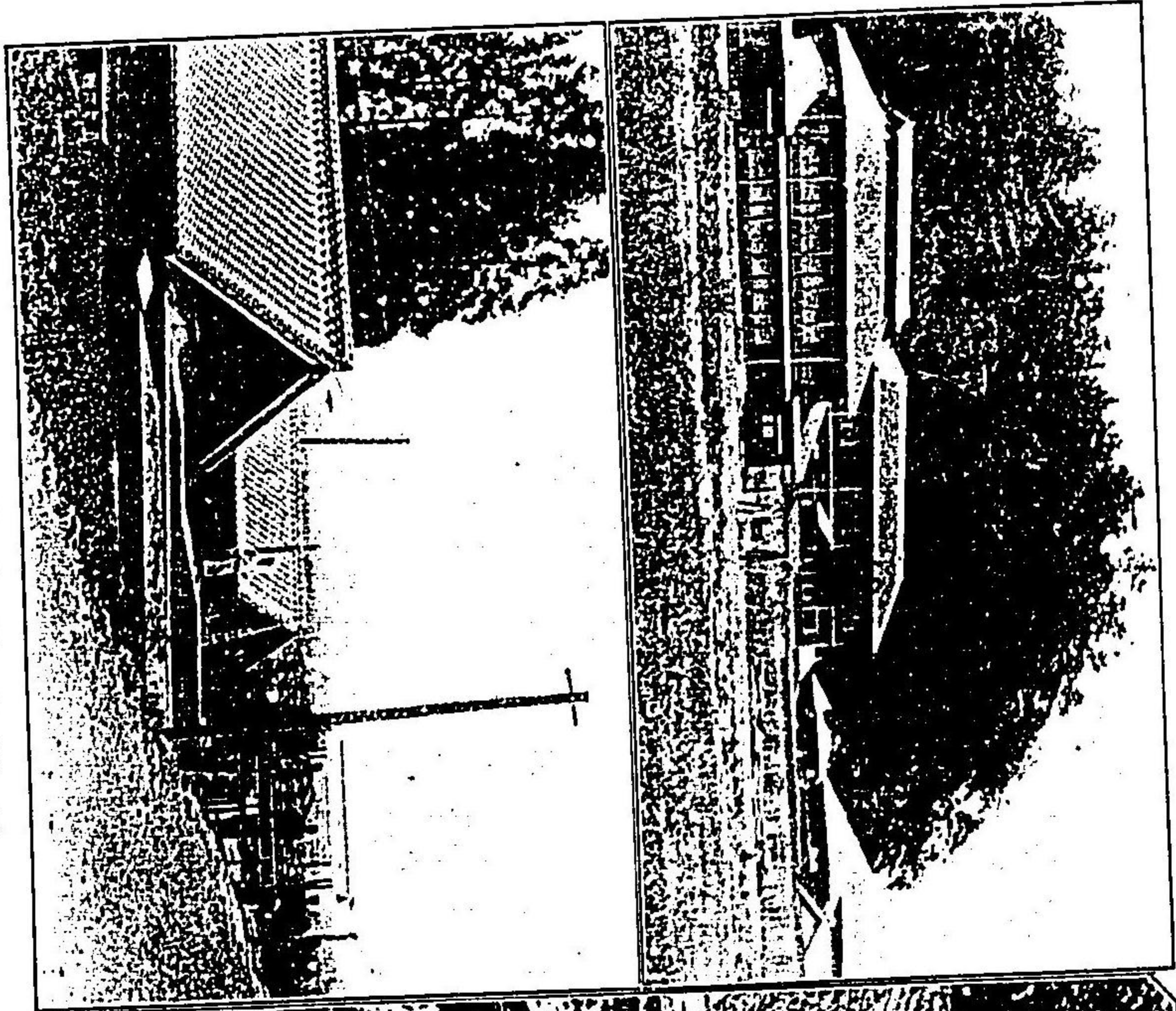
◎小河内の瀑布

あり宇佐郡西椎屋に接近せるを以て又た西椎屋の瀑と云ふ宇佐郡の條下に詳説すべし。夫れよ西方に向ふて進むこと三里餘字谷河内に

◎臥龍梅

あり一幹の老樹根脚蟠屈して其狀獅獸の起伏するか如く石枝鐵梢橫斜錯出恰も兵戰の交るに似たり東風一到萬葉統ふるの朝、異香馥郁として天地爲に馨り人をして羅浮山下に遊ぶの思ひあらしむ。西南に向ひ行く二里にして森市街の北端に

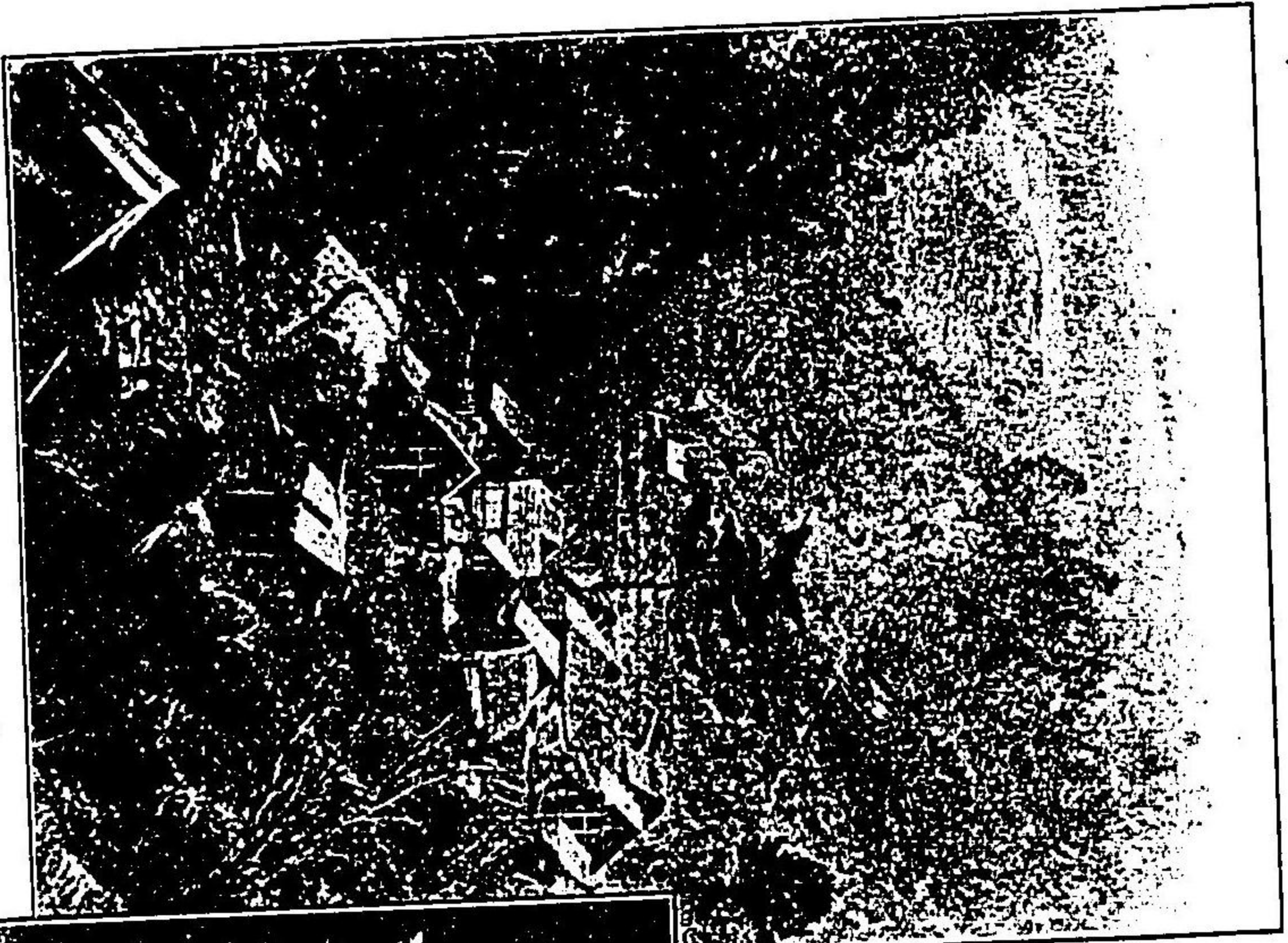
縣立農林學校



三水電會社發電所



三水電會社發水路



山金生銅江津中



園庭行銀業實田川

場工社會式株草煙田川

◎角埋城趾

あり傳へ云ふ鎮西八郎爲朝城塞を築きたる跡なりと要書頗る堅固にして天正十四年

島津兵豊後亂入の際大友氏の臣森五郎左衛門古後攝津守、如法寺内藏之進、同信濃守、太田八郎、

長野安藝、平井彈正等上下合せて千餘人此の山に據り大に敵兵を惱ませし所なり。之れより南東に

向ひ下ること十數丁にして

◎郷社末廣神社

あり天御中主神、大山祇神を祭る、郡中の宗祠にして社殿宏壯に且つ善美を

盡せる庭園あり眺望も亦た極めて佳なり一たび森城市に足を入るゝの征客は必ず一遊を試むべきの勝

地なり

◎日田郡

日田町 慈眼山 月曜 縣立農林學校 緑林寺、星隈 三隈川 日隈 會處宮 縣社大波羅社、感宣園 天ヶ瀬温泉 傳

來寺 金坑

地勢縣の西端に位し東は玖珠郡に接す西は福岡縣浮羽朝倉二郡に南は熊本縣菊池、阿蘇、鹿本の諸郡

に交り北は下毛郡及び福岡縣田川郡に界す、面積四十五方里二八廣袤東西三里三〇、南北八里〇三、

戸數一萬七百八十三、人口六萬四千八百九十二あり群峰四境を繞り三隈川の長流郡中を横斷す氣候寒

冷にして沃野少なく日田町に接近せるの地僅かに一帶の平夷を見る道路は佐賀縣道、福岡縣道、小國

道等郡内を貫通すと雖とも概ね險惡なり單り日田町より福岡縣久留米市に通ずるの往還のみは坦々と

日田郡

して車馬の交通大に便なり重なる物産は材木、薪炭、米穀、椎茸、茶、竹材、下駄、煙草、紙、楮皮、麻苧等なり、三十三年の調査によれば各産物の輸出額八拾壹萬八千七百六拾七圓にして内木材の價格は實に五拾餘萬圓の多きを占むるといふ

豊後風土記に曰く昔者纏向日代宮御宇大足彦天皇球磨贈を征伐し凱旋の時筑後國生葉行宮を發し此の郡に幸す神あり久津媛と云ふ化して人となり参り迎へて國の消息を辨申す斯國瀟荒の世、衆山四面を環り中に大湖あり湖さ千餘頃百餘之れに注ぐ洋々として水湛ふ適才大鵬あり東より飛來りて湖上を翔翔し北に向ふて去る俄然地震鳴動し白日晦の如く西崖崩裂水傾き湖濁して平野となる餘す處三岡鼎立す水痕只一帶の川を留む其の南岡を日隈とし北を月隈とし西を星隈とす其川流を名けて三隈と稱し國を日隈と名く又其の飛去るの國を名けて鷹羽と云ふ蓋豊前國高羽郡是なりと。此郡承和より永享の頃までは大藏氏の領有に屬し大藏氏滅後大友氏の配下となり後幕府に隸す

◎日田町 元豆田、隈の二町なりしが昨三十四年十一月一日を以て合併し日田町と改稱す人口一萬零六百、戸數一千八百餘を有し商業繁盛人民富饒にして生活の程度大に進み器具割烹等の善美なる比を九州各縣に見るものなし又貴重の書畫類を藏するもの多きこと尾の半田、讃の香川と並び稱せらる、日田郡役所、足田稅務署、日田警察署、豆田小林區署、葉煙草專賣所出張所、郵便電信局、縣立農林學校、豆田區裁判所、大分地方裁判所支部、株式會社日田銀行、株式會社貯金銀行、株式會

社日田實業銀行、日田水電株式會社、日田煙草株式會社等あり旅館の重なるものは松榮館、龍理泊、旭館、綿吉(以上豆田)流芳軒(隈)等にして料理屋は市山亭最も好し之に亞ぐものを萬青樓、大浦、四時亭、紙桂等とす。豆田より東北八丁許の處に高丘あり

◎慈眼山 と云ふ松樹鬱生して山容極めて古雅なり加ふるに日田市街を下瞰し風景頗る佳なり林中小ヶ瀬井路を開鑿し宇佐、國東地方へ夥多の新田を拓きたる故日田代官鹽谷大四郎氏の碑石あり碑文前編に出づ。

山麓より八丁を西に進めば
◎月隈 あり丸山又永山と呼ぶ樹木鬱葱として蒼翠擲すべし慶長六年小川壹岐守光氏古城を改築して之に居りしが後荒廢に歸す大友氏の亡後山前に布政所を置き以て國內の公領を管治す世に之を永山布政所と云ふ今の豆田區裁判所廳舎は即ち布政所の跡に改築せしものなり裁判所の西隣に
◎縣立農林學校 あり本年四月の開校にして規模甚だ廣大ならずと雖も諸般の設備能く整へり。夫れより西南凡そ十丁
◎嶽林寺 あり 後醍醐天皇勅願の靈場にして鎮西の名刹なり元徳二年(紀元千九百九十年)郡司大藏永貞勅命を奉じ元の僧明極禪師を請じ建立せしものなりと云ふ今尙ほ 後醍醐天皇の宸翰及び繪旨御草履其の他古文書等を藏す

日田郡

大分縣案內

天皇宸翰

松陽山岳林永昌禪寺者直指單傳之淨場也禪苑之規範可相並南禪第一之上利者必矣

元弘元年三月廿七日

繪旨

豐後國松陽山岳林永昌禪寺當寺早為勅願靈地可奉祈 聖運長久故降 宸翰仰當寺之法岐披王道之太平者 天氣如是

元弘元年三月廿七日

式部大輔判

鎮西岳林精舍依為開發已降法基之子細令重建畢

應永二年八月廿二日

源 尊氏

松陽山岳林永昌彈利任前規之旨且理大井之兩鄉五拾貳箇所領令寄附畢

文明五年四月

大友修理大夫印

同文

天正七年二月十八日

義 統 花押

豐後國日田郡友田村之內三拾石事寬文十二年被寄附之訖岳林寺全收納永不可有相違者也

貞享二年六月十一日

綱 吉 朱印

豐後國日田郡友田村之內三十石事依當家先判之例岳林寺收納永不可有相違者也

享保三年七月十一日

吉 宗 朱印

同文

延享四年八月十一日

家 重 朱印

同文

寶曆十二年八月十一日

家 治 朱印

同文

天明八年九月十一日

家 齊 朱印

同文

天保十年九月十一日

家 慶 朱印

同文

安政二年九月十一日

家 定 朱印

同文

萬延元年九月十一日

家 茂 朱印

南カサカサに向ふこと十丁

日田郡

大分縣案內

◎星隈 あり濃碧蔚秀瀟灑愛すべし。東南に向つて往くこと三十丁

◎三隈川 に出づ巨流滔々西下して筑後に入る日本三大川の一なる筑後川即ち是れなり山水映發風光畫の如し此の河流に産する香魚は味頗る美にして長柄川の香魚も之に比すれば適に遜色ありと云ふ。川の中央に崛起せる翠巒を

◎日隈 と云ひ一に龜翁山と呼べり蒼翠鬱々として四顧の風景頗る佳なり豊西記に曰く初め山上に寺あり眞光寺と云ふ文祿三年豊太閤宮木長次郎をして日田郡令と爲す寺を竹田に移し初めて焉に城く慶長元年毛利伊勢守高政封を佐伯に受け日田、玖珠二郡を攝治し其の臣隼人佐をして樓櫓を修造せしめ此に居ること五年黒田家臣栗山備後之に代る寛永中城竟に廢す云々。轉じて東北に十五丁

◎會處宮 の古蹟あり豊日志に曰 成務天皇五年(紀元七百九十五年)乃鳥羽宿禰に命じて日田の國造を爲す朝負に居り常に民庶を會して耕作の事を教ふ遂に其の居を名けて會處宮と云ふ云々。更に北すること凡そ八丁にして

◎縣社大波羅社 あり古松鬱鬱として自ら神々しく幽内境遶なり殿堂の壯麗なる縣下屈指の大社なり祭神は息長足姬命、魯田別命、比咩大神の三柱にして略由緒左の如し
貞觀元年(紀元千五百十九年)大字求來里に出現延喜十八年(紀元千五百七十八年)改めて社殿を建築し天和十年紀元二千二百八十四年郡令石川主殿頭現社地に移し奉れり仍て舊趾を元宮又は元

大原と呼び現社地を新大原と稱す八幡宮の額字は菅公の裔正二位胤長卿の筆にて寛政十二年の揮毫なり又別に「大波羅野御屋新呂」と書せる權中納言大江匡房卿揮毫の額其他種々の寶物を藏せり西に往くこと七八町日田郡役所の前に故廣瀨淡窓翁の私塾にして前後四千の門生を養ひ一世文明の中心たりし

◎感宜園 の趾あり翁名は建、字は子恭、荅陽又遠志樓主人、淡窓等と號す若くして龜井道載の門に遊び夙に詩名あり後樂舍を此處に開き育英を以て任と爲し老に至るまで孜孜として倦まず幕府特に苗字佩刀を許して其の功績を表彰すと詳しきは後篇にあり。豆田より東南凡そ三里中川村大字湯山に

◎天ヶ瀬溫泉 あり硫黃及び鐵氣を含み能く疥癬、切瘡、癩癧、癩癧質斯等を治す。豆田より南凡八里半中津江村大字栃野に

◎傳來寺 あり山を負ひ川に臨み頗る幽趣あり庭園は建久年間梶原景季、仁田忠常等頼朝の命を受け卷狩の故實を阿蘇大官司に向ひ歸途此地を過りて築きたるものなりと傳ふ寺記に曰く延元三年二月(紀元千九百九十八年)長谷部信雄、兜卒、傳來二寺を津江莊に建て大智禪師を迎へて開山と爲す大永中津江山城守、傳來寺をして眞宗に改宗せしむ云々當寺の主僧は長谷部姓にして信雄の末葉なりと云ふ。更に西方四里同村鯛生に

◎金坑

あり其の質純良産額甚だ多く海内無比の良坑なり詳細は載せて前編鑛山の部に在り

◎下毛郡

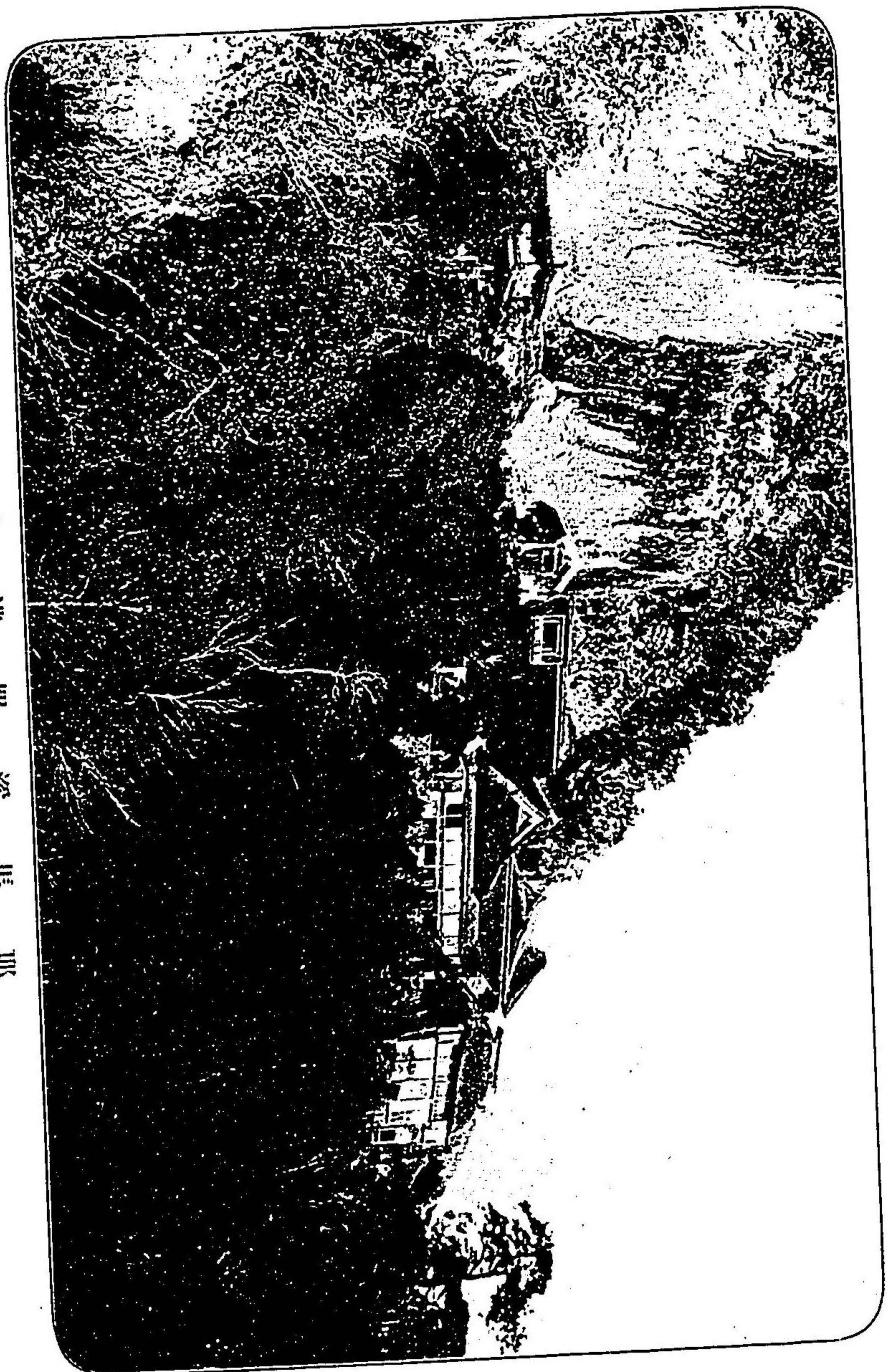
中津町二郷社八幡大江神社一自性寺二中津公園一郷社閻魔神社二間々の濱一雲雀浜二團子石一縣社廻神社二正行寺一八幡神社二郷社富山神社一郷社相原神社二耶馬溪

地勢縣の西北端に位し東南は宇佐、玖珠、日田三郡に西南は福岡縣田川郡に接し西は山國川を隔て、福岡縣築上郡と相對し北は一帶周防灘に瀕す面積三十三方里三分四厘、廣袤東西三里二七南北七里三一、戸數一萬三千三百七十二、人口七萬四千二百七十七を有し土地膏腴民産豐饒なり豐前志に曰く昔時は下毛、上毛は一郡にして美毛郡と稱せしならん 景行天皇紀に上毛、下毛の郡界を流る、川を御木川(今山國川)と云ふとあるにて知らる何となれば此川美毛郡にて最大なるを以て其郡名を取りしなり又御木川とは此川の上流なる山中に良木多くして年々此川に流す故斯く名くるなり又上毛下毛をば昔時加牟豆美介『志毛豆美介』と云ひしなり渡邊明が所藏せる正安二年(紀元千九百六十年)の田地賣渡證文に斯く記せるを以て知るべし』と明德の頃より一般に大友氏の部下に屬せしが後大友氏の武威漸く衰へ島津氏の侵掠を被るに及び豐太閤黒田孝高を軍目附として中津に遣はし大友氏を助けて島津氏を討たしむ、事夷ぎて豐太閤黒田氏の効を賞し豐前二郡(京都、仲津、築城、上毛、下毛、宇佐、十



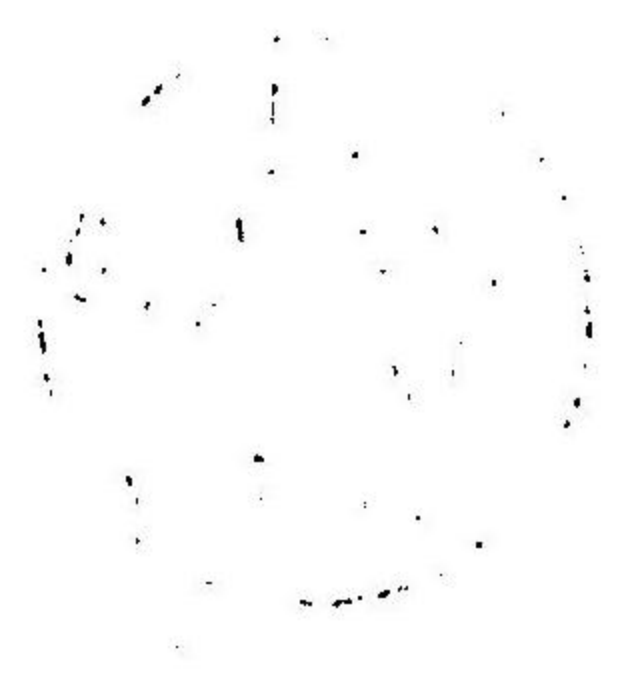
門 洞 / 青 漆 馬 耶

耶馬溪羅漢寺





ム 望ヲ口民津ヲヨ阪柚



渡羅古溪馬耶



返魚年溪馬耶



瀬飛溪馬耶

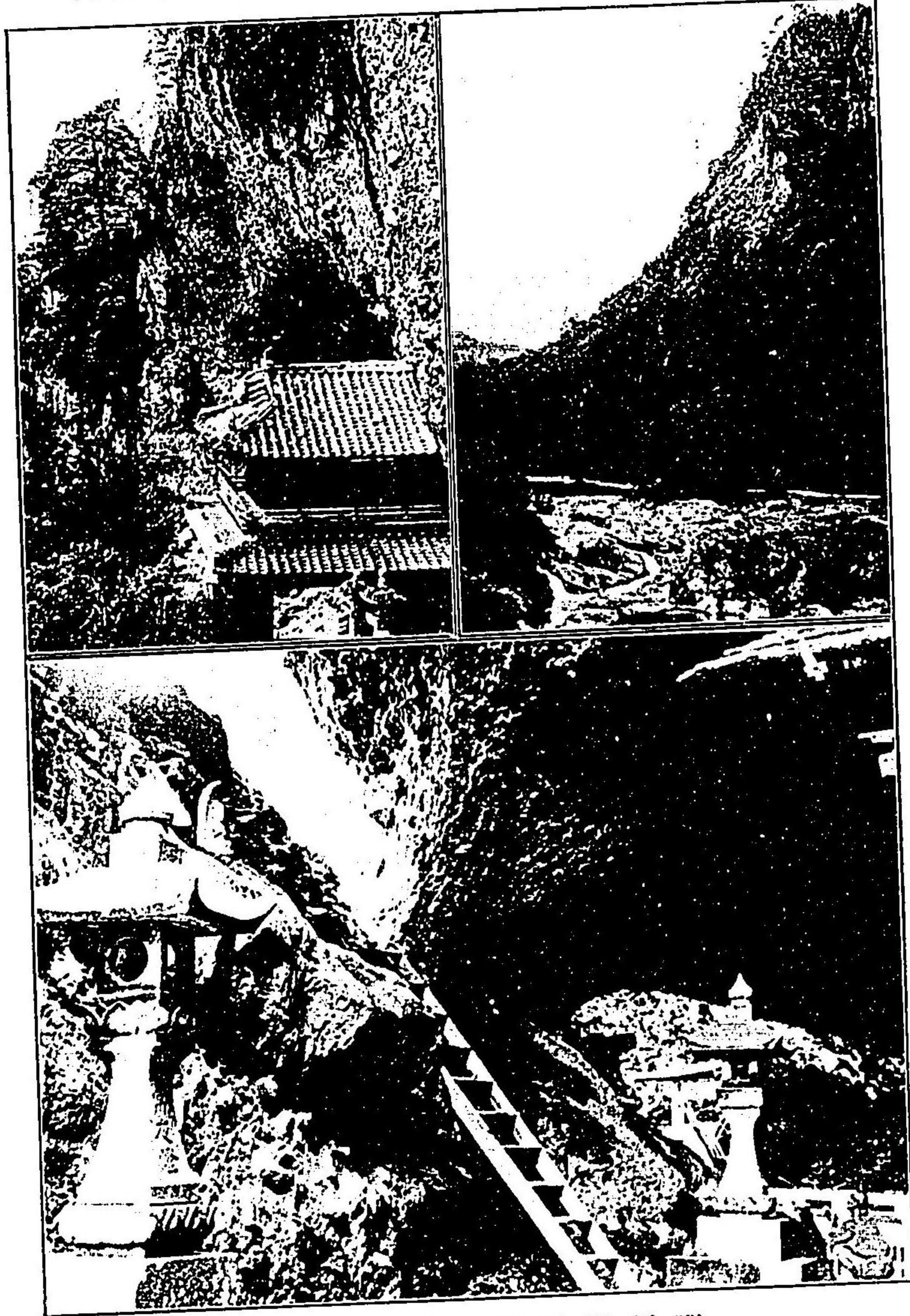


門洞ノ青溪馬耶

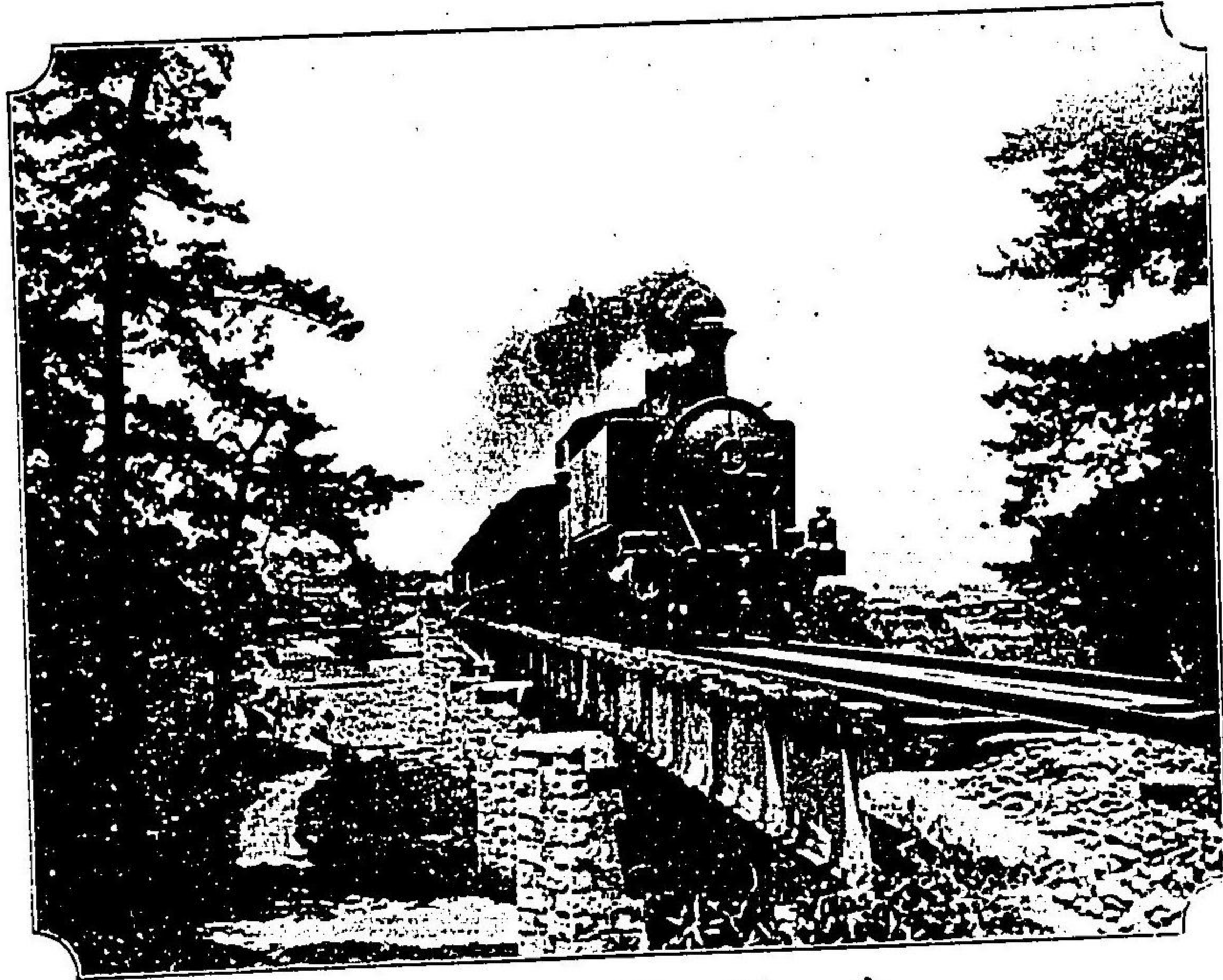


門山寺漢羅溪馬耶

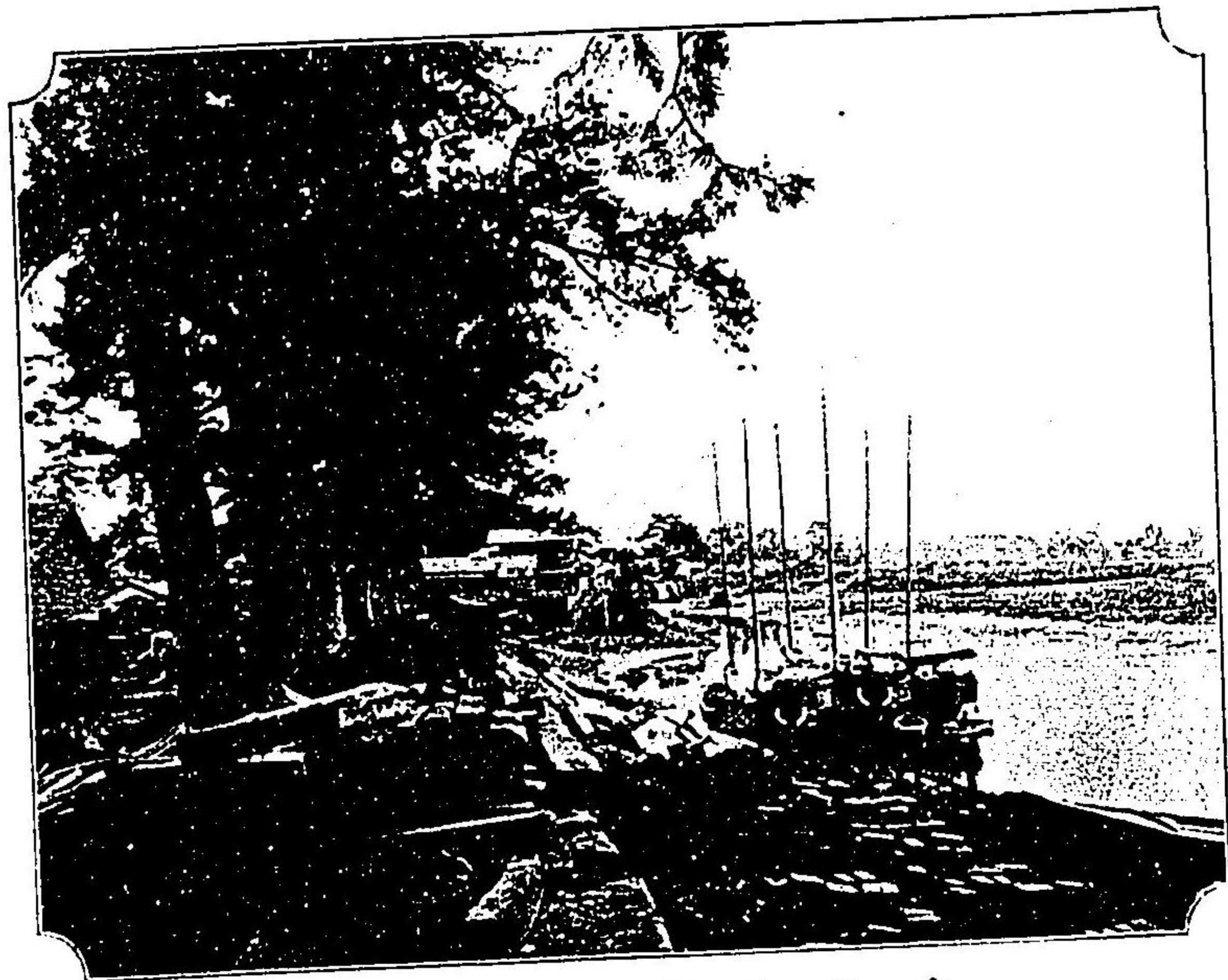
瀧ノ鳴洞溪馬耶



景ノ内門寺漢羅溪馬耶



山國川鉄橋



中津北門通リ河岸

六萬石)に封せしより天正十六年(紀元二千二百四十八年)初めて城を此に築く爾來幾多の變遷を経て享保二年(紀元二千三百七十七年)奥平大膳太夫昌春、丹後國宮津より移封(領知十萬石)せられ代々相襲ぎ以て廢藩置縣に至る明治四年十一月十四日豐前一圓小倉縣の管轄となり同九年四月十八日小倉縣の廢せらるゝや福岡縣の管轄に歸し同年八月三十一日更に下毛宇佐の二郡を割きて我大分縣の管轄區域に編入せらる

◎中津町

郡の西北端に在り東南は豐田、大江の二村に接し西は山國川を挾んで、福岡縣築上郡に界し、北は周防洋に臨む戸數二千七百二十一、人口一萬五千八十九を有し人家鱗次商業の繁盛なること縣下第一位に居る玖珠、日田、宇佐、下毛、築上(福岡縣)各郡より中津港及び九鐵會社中津停車場を経て縣の内外に輸出せらるゝ産物中米穀のみにても三十萬石を下らず材木薪炭等の取引額亦た各數十萬圓を超過すといふ以て貨物集散の一斑を推知するに足らん市街の最も繁華なる部分を擧ぐれば新博多町、古博多町、京町、等にして豊後町、上博多町、船町、魚町、江三竹町等之に亞ぐ明治の偉人故福澤諭吉翁は當地留守居町福澤百助の二男にして舊藩主奥平昌滿伯の旨を承け明治四年市學校を組織して舊藩子弟に泰西究理の學を授け、同地文化の度今日他に特絶せるは全くこの市學校の創建に胚胎せるなり市内及び市街に接近せる官衙公署會社等の重なるものを擧ぐれば左の如し

- 下毛郡役所 殿町
- 中津稅務署 殿町
- 中津警察署 三ノ丁

大分地方裁判所 二ノ丁 中津監獄支署 鷹部屋 中津中學校 高畑丁
 中津支部 三ノ丁 商業補習學校 殿町 中津紡績株式會社 豐田村
 扇城女學校 三ノ丁 中津病院 櫻町 中津新報社 京町
 蓬萊觀(劇場) 三ノ丁 中津停車場 豐田村 二豊日々新聞社 京町
 常春觀(劇場) 寺町 中津織物株式會社 豐後町 井上博多織工場 大江村蠟燭
 株式會社中津米穀取引所米町 中津魚市株式會社 米町 菊池麥稈工場 諸町
 豐中製絲株式會社 下宮永 中津共立銀行 古博多町 株式會社中津貯金銀行古博多町
 株式會社中津銀行 古博多町 鹽田銀行 鹽田 中津酒造株式會社 鹽田
 株式會社交融銀行 船町 和田商店 鹽田
 株式會社廿三銀行支店 諸町 和和商店 鹽田
 料理屋の最も名あるは中武(偉齋亭といふ京町に在り) 茗荷屋(忠言亭といふ古博多町に在り)水門
 樓(三ノ町)等にて旅館の重なるものは松風軒(京町)大同館(博多町)三原屋(魚町)中津館(京町)
 大黒屋(船町)等なり陸上の交通機關は玖珠、日田二郡に通ずる縣道宇佐郡を経て大分町に築上郡
 を經て福岡縣小倉市に通ずるの國道(三十五號)線なり宇佐郡柳ヶ浦迄は九鐵線路の開通せるあり
 四通八達毫も遺憾なしと雖も聊か不便を感ずるは海路の交通機關なりとす然れども一週二回は必ず
 大阪航海の汽船中津港に寄航し且つ又た大分馬關間の航海船風波甚だしきに非ざるよりは毎日一回

必ず寄港す大分行は概ね午後十時乃至十一時解纜長洲、高田、眞玉、富來、竹田津、鶴川守江等に
 寄港し翌午前十時の頃大分港に達す運賃は上等貳圓下等壹圓貳拾錢下等八拾錢なり又た馬關行きは
 多く午前八時乃至九時解纜宇の島に寄港するのみにて午後三時頃には馬關に着し運賃は上等九拾錢
 中等六拾錢下等四拾錢なり此地は實に本土及び九州大部の旅客我二豊の地に入るの關門にして九鐵
 小倉驛より汽車に乗じ南東に進めば城野、智根、刈田、行橋、新田原、椎田、松江、宇の島の各驛
 を經僅かに二時間餘にて中津驛に達するを得一度我縣に足を容れし旅客の必ず節を曳かざるべから
 ざる天下の奇勝耶馬溪口は實に此の驛を距る西南三里の地にあり今探勝旅客の爲め先づ中津附近
 の名區舊蹟の方位順路を案内し順次耶馬溪に及ぼさんとす
 中津停車場より上博多町を経て三四丁西南に向へば字萱津に
 ◎郷社八幡大江神社 あり境内狹隘、且つ樹木少く稍風致に乏しきの感なきにあらざるも、
 極めて由緒正しき古社にして四方の尊崇甚だ篤し
 緣起に云 豊前國下毛郡大家郷萱津八幡宮者 應神天皇、仁德天皇、菟道皇子之御靈也、昔 聖
 武天皇天平十二年(紀元千四百年)自三宮家進三封田於宇佐宮、是三國七郡十鄉等也、稱三國者、
 豊前、豊後、日向也、稱十鄉者封戸、向野、辛島、高家、葛原、來繩、安岐、武藏、大家、野
 仲也、後孝謙天皇天平勝寶年中(紀元千四百年)依三宇佐宮御託宣一每鄉奉三勸請、奉申萱津八
 下毛郡

幡宮二別而由緒正敷靈社也云々

又云大家宮者、太玉命之御孫、天富命之御靈也、昔神武天皇之東征也、建都橿原、仍、天富命奉牛置帆負、彦佐知二神之孫、以齋鉏齋斧、伐與山之大木小木、底津磐根、宮柱太敷立高天原、千木高知、瑞乃御殿奉仕支、今豊前國御木、紀伊國御木之二所者是探宮材、齋部之所住之故、謂之御木也、又天富命、奉齋部、作鏡玉木綿、麻等神寶、獻之、遂天富命、周覽天下、求豊饒地、殖穀麻種、筑紫豊國、因斯曰麻殖、今謂大江者、訛也、今更に大江に詛る、人王五十四代嘉祥三年、(紀元千五百十年五月庚辰、神託、我是天富命也、昔從天皇、降伏凶賊、崇祭我、則鎮護朝廷、宜以木綿麻備吾社之驗者、云々、豊前守常道常道真人兄守、奏之公家、同年九月甲申、以勅定、令造殿舍、號麻殖天宮神社、仁壽元年(紀元千五百十一年)正月庚子、從朝廷、奉正六位上、貞觀二年(紀元千五百二十年)十月乙卯、奉從五位下元慶六年(紀元千五百四十二年)十月戊申、奉從四位上、後鳥羽院元曆元年(紀元千八百四十四年)豐後國緒方三郎維業等破壞當宮、押取神寶、自爾以來合祭八幡宮而奉稱、大家八幡宮、又奉申八幡大家宮云々

同社より西北數丁(所經金谷中の上本丁)にして新魚町に

◎自性寺

あり臨濟派の禪寺にて興書除十懸三室襖板戸の類總て池大雅堂の書畫を貼付す超凡脱俗筆々神あるを覺ゆ蓋し當寺隨一の珍什にして亦中津町の一名物なり聞く今より百二十五年前の住職提州大和尚は頗る博識高德の僧にて智て自隱を師とし易經を修む時に池大雅自隱と善し偶々來

◎中津公園

あり規模大ならず園内の風致深く賞するに足らずと雖も試に北岸を築きて陣を放てば遙かに周防洋を隔て、防長の雲山を水天漂渺の間に望み築上郡古表社の勝景亦た近く指呼の間に在り山國川の清流は二派に岐れて小祝を抱き深々として海に朝し一帯の沿岸白砂青松の間より孤帆の隱映するを見る等其の景色又以て俗腸を洗ふに足るべきものあり

園内伊勢大神宮奉齋會中津支部、三所宮(興平侯中興の祖美作守定昌、同信昌、大膳太夫家昌を祭る)中津神社(應神天皇、仁德天皇、宇治若郎子命、素戔鳴命、大山昨命、別雷之男神、高靈神、少名彦名命、宇迦之御魂神二桂、積羽八言代主命、征西將軍懷良親王、足利左馬頭源義氏、新田上野介源義氏を合祀す)等あり元中津城趾にして天正十四年(紀元二千二百四十六年)島津大友兩家對陣の時黒田孝高(如水軒)豊太閤より軍目附を命せられて中津に來り京都、仲津、築城、上毛、下毛、宇佐六郡十六万石を領知し始めて城を築く後慶長五年細川忠興黒田家に代り丹後國田邊より來り領し(豊後速見國崎を併)元和六年に至り城郭修造全く成る寛永九年小笠原信濃守長次細川家に替りて播磨下毛郡

國龍野より來り領し(領知十五萬石)元祿十一年家名斷絶同年小笠原長圓四萬石を領して當城に居りしが享保元年卒去の後幕命に依りて領邑を沒收せられ同二年與平大膳太夫昌春丹後國宮津より移封(十萬石)され世々相繼ぎ以て廢藩置縣に至る城地の形も扇に似たるより扇城又は要城と云ひ郷名によりて大家城(今は大江と稱す)云ひ尙古く城地を丸山と唱へしより丸山城とも呼べり。中津城より東此十丁許(所謂二ノ丁、姫路町、北門通、船場町、下正路)にして

◎郷社闇無濱神社

なり豊日別命、豊玉彦、安曇磯良を祭る末社に祇園社、住吉社、殿島社、惠比壽社、稻荷社、合拜星辰社等なり社地を龍王濱又た闇無濱と稱し白砂遠く連りて一點の塵を留めず老松枝を交えて長へに琴聲を弄す眼を周防洋上に放てば防長の雲山迫かに一髪の青を送り漁家蛋戸の間より點々白帆の隠見するを見る、古くより世に顯はれたる勝地にして近古有名の吟詠少ながらず

萬 葉

吾妹兒之赤裳泥塗而植田乎劫手收武闇無之濱

同

來留海子之某等劫置海松乎波何國積武闇無之濱

夫木集

來る海人のそこらかりおく海松をばかりておさめん闇無の濱

幽齋九州

米舟は國々よりもつけにけりあけてもつまん倉無の濱

道之記

宇佐八幡宮縁起に云 皇后將征異國于時、白髮老人來奉導曰、磯鹿島有安曇磯良者、宜召

之借千珠滿珠於海神一と見たる即ち是にて此は住吉大神の權りに磯良と顯れ給へるなりと傳ふ又同社由緒に云 崇神天皇御宇(御治世紀元五百六十四年より六百三十一年迄)奉鎮せし神社なり 聖武天皇太平十二庚辰年(紀元千四百四年)太宰大貳藤原廣嗣謀反す時に大將佐伯常人、阿部西丸、義隆十三世之祖神主富曆をして朝敵退治の事を祈らし藤原藤原純友同權亮純素謀反す大將小野好古副將神の靈職を表し奏して富曆を六位に叙し玉ふ又 光仁天皇寶龜二年(紀元千四百三十二年)豐前守阿部朝臣御縣三十世の祖壹岐守高彦に命じて疫癘鎮滅の事を祭しめ又屢々天變のあるを以て下毛郡の内三個所の地を本社に寄附あり 桓武天皇延暦九年(紀元千四百五十年)諸民困窮遂に神祭をも廢止せんとするに至りしかば豐國の大領數個所の米穀を發し民を賑はし祭祀を中興す 朱雀院天慶四年(紀元千三百一年)辛丑六月伊豫藤原純友同權亮純素謀反す大將小野好古副將六孫王經基九州に下向し征討の際復た義隆二十七世祖守次へ朝敵退治の祈願を勵す兩將大に感じ中津河原在城の時當社に參籠す守次宇佐の宮成氏と謀り菱形山之城主由理氏を降す其後兩將軍中之地四箇所を選み守次宮成氏に賜ひ神劍奉納あり 後宇多院御宇弘安四年(紀元千九百四十四年)蒙古の賊兵我國を襲はんとす同五月豐前前司へ院宣あり急に大神の社に祈らし義隆十八世之祖大和守義繁神興三殿を澳に行幸し蠻賊降伏を祈る滿日の夜龍燈海上に輝き西天に飛去す忽ち大風起り賊船數萬悉く海底に沈む翌壬午年豐前守へ勅命を下し本社末社修理なり五月五日

下毛郡

遷宮式を執行す流簡馬あり永く例とす爾後三月三日之を行ふ神官社家神子各職を奉じ神役を掌る
 但右院宣其他寶器等大友の兵火に罹り焼失す亦右神領七個所の地も自然皆無となれり亦先年黒田
 家細川家小笠原家等領主たりし時社領五十石寄附なりたり與平家よりは年々銀十五枚宛寄附あり
 しが其後追々相減じ現今銀三枚宛寄附せらる修營の義も往古 仁明天皇御宇承知元甲寅年(紀元
 千四百九十四年)豊國の看番長神宮を修造又 後宇多院御宇弘安五年(元豐前守へ勅命あり其後
 は代々の領主より之れを修造せられしが廢藩後總て氏子より之れを爲せり云々
 夫れより一里餘(所經船場、鹽町、豐後町、大江村、蟬瀬、下濱通、小楠村、大新田)東すれば和
 田村に

◎問々の濱 あり古くより世に知られたる名所なれども今は左まで賞するに足らず蓋し滄桑の
 變遂に其の風致を喪ふに至りたるものならんか

萬葉 衣手のまわかの浦のまなこ地の間はく時なくわかてからは

豊國の間々の濱邊の眞砂地のまなほしあらばなにかなげかん
 問々の濱より西南に向ひ往くこと里許(所謂如水村大字全徳合馬)如水村大字下池字鍾矢堂に茶臼
 山と呼べる小丘あり中央に石垣を築き立て上に石柵を廻らし生ひ茂れる茶梅の中に小やかなる祠あり

◎雲雀床

又將軍塚と云ふ土俗征西將軍懷良親王の墳なりと云ひ傳ふ惟ふに親王の肥後國八代郡
 小野郷に薨じ玉へることは歴史の明示すると所にて此地に墳墓のあるべき理なし豊前志に

鎮西文書編年録に按延元二年 後醍醐帝遣五辻宮三位中將某於九州、爲其大將軍、而左兵衛某
 出納其令旨、蓋其後薨於豐前、豐後之地、乎未詳、士人傳云、豐前國中津、流川上雲雀床、具征西將軍
 住處、有歌曰「雲井にものほるへき身のさはなくて(一本地に落ちて作る)雲雀の床に音をのみ
 ぞなく」蓋し五辻宮乎と云へり今日日本史に據るに 龜山天皇第五の皇子兵部守良を稱五辻宮と
 見ゆ此の宮元弘の初近江の伊吹山の下に竄れさせ給ひしが同三年五月土兵を率ひて北條仲時等を
 番場の峰に要し 光嚴帝を獲奉り賜ひし由太平記に見えたるが其後鎮西下向の事ありけるにや然
 らば懷良親王の下り賜ひし延元四年より二年前の事なり日本史には後不知其所終と見ゆと書
 けり五辻宮といふこと詳には言ひ難けれど然ることなしとも云ひ難し往にし年此墳墓自然毀れぬ
 とて行きて拜み見たるもの、物語に石棺に朱以て納めたるが骸骨猶崩れずと容貌など儼然に坐ま
 す如く髣髴に窺ひ奉られきといへり數百年を経たれと甚よく納めたる故なるべし如何にも貴人
 のなるべければ五辻宮に座む計り難くなん

◎團子石

下毛郡

と云へるは稍信憑するに足るが如し。將軍塚より南三七丁大幡村大字上池永の古城趾の土中に
 を産す石にあらず又土にあらず其の色淡赤淡黒一様ならず之れを割れば其の内部紫

◎縣社薦神社

あり祭神は 應神天皇比呼大神仲哀天皇神功皇后にて承和年間（初年紀元千四百九十四年）の鎮座なり境内二萬五千五百三十四坪殿堂の壯麗なるは謂ふまでもなく境内古木蒼鬱天を蔽ひて蒼翠瀟らんと欲し樹間に囀づる幽禽の聲は神慮を慰むる天樂かと怪まれ三角の池には清水湛満曇るを知らぬ鏡かと疑はる池中に三藪あり玉澤、鏡澤、鏡澤と稱ふ三種の神器に擬せしものなりとぞ、眞に多く見難きの靈境にして古來靈驗著しく四民の尊崇甚だ厚し

社記に云 後鳥羽院元暦元甲辰年（紀元千八百四十四年）源平争ニ雌雄ニ之時豊後國賊士惟榮惟隆破ニ却神殿ニ因之、往昔之神記、神寶等悉紛失、繼而大友宗麟、放火神宮、其神官等、家々之傳記過半燒失云々、

宇佐八幡託宣集に云 元正天皇養老三年（紀元千三百七十九年）大隅日向國隼人等、襲來、同四年公家被レ祈ニ申當宮ニ之時神託、我行而可ニ降伏者云々諸男朝臣、情以、以何物ニ爲ニ御驗ニ可ニ奉レ乘ニ神輿ニ哉、豊前國下毛郡野仲之勝境、林間之寶池、大菩薩之昔、令湧出ニ之水也、參訴彼處、件勝境東西四五餘町南北一十有町、卯酉三餘町、子午七八有町歟、只眼界所及非ニ丈尺可數也、靈木森然、而不能入レ道、藥艸幽深不可運歩、又菓實雖多、不觸手禽獸雖集、不恐人、欲ニ

◎正行寺

あり天正七年（紀元二千二百三十七年）野仲兵庫頭多勢を催ふし末弘城に押寄せ來れる時城主末弘對馬守正行剃髮して名を妙玄と改め嫡子四郎妙秀と改め降て城を渡し其の跡に一寺を建立して先祖の名を取り正行寺と名づけたるものなりと云ふ碩學高德且つ書蘭を以て其の名天下に噴々たりし末弘雲華は當寺の住職なり雲華名は大舍別號を鴻雲染香人、早作佛文中、王之臣、甲午講師等と稱す、豐後國の滿徳寺に生る正行寺の住職風嶺一見之を奇とし携へ歸つて寺職を襲がしむ後出で、京都本山の學頭となり賴山陽、田能村竹田、篠崎小竹、貫名海屋等と善し習て 仁孝帝の勅命を蒙り十幅の蘭を畫き淑感を蒙りし事あり雲華人と爲り眉目俊秀軀幹偉大儀容神の如し賴山陽其畫像に賛して曰く

下毛郡

喚如海日之昇春帆、爽如峽嶺之度曉松、
田能村竹田亦た賛して曰く

濯々如白蓮出綠波、烟々如明月灑秋蘋、
南豐の詩豪廣瀨淡窓の上人に寄せたる詩に曰く

龍天圍繞日營々、難奈歸依渴仰情、君自耽詩又耽書、無人知道避聲名、

正行寺より東南凡一里二三合八面山の麓大字田口の猪山平に

◎八幡神社

あり和氣清磨卿の配流せられし時多くの猪顯れ卿を負ひて宇佐宮に詣で夫れより猪は皆八面山の麓に入る里人因と社を建て猪山八幡宮と稱すと云へり

日本紀に云清磨與病即路、及至豐前國宇佐郡稻田村有野猪三百許、挾路而列徐步、前駟十許里、走入山中、見人共異之云々

山を登ること一里弱山麓權現嶽の北端樹林の中に

◎郷社箭山神社

あり又は八面山權現と云ふ 神功皇后應神天皇比賣神を祭る此山に箭谷と云ふ處ありて矢筈竹を多く産するより箭山の稱ある

豐前神跡圖考に云、

世傳平相國攝政時豐前爲內府封國、上風偃下風、當安徳天皇狩于豐前、源廷尉置平族席三卷九國而謀恢復、遣伊勢義盛、候伺地利與軍實、義盛微服間行發一奇計、使

平宗盛愕然膽落焉、加之、復令九國精兵跋離反而後、源廷尉率船軍、直入下毛郡、良説而博諱

曰、平族弗憑八面山之天險、而都于柳浦四面受敵、我知其無能爲一也、新築于野仲郷勇山莊、

號大旗城、陽爲屯田之謀、以威敵、軍勢大振、輒苦九國群雄、以擊平軍、大捷壇浦矣、延元元

年(紀元千九百九十六年)大將軍尊氏、幽於九國、入宇佐大宮司館、而後軍八面山、以禱再舉于神

功皇后廟、以創建二百有餘年鴻業也(中略)天正戊子年(紀元二千二百四十八年)黒田侯城于中津

川原、八面山兀而府城成焉、以黒田侯武勇、而不伐、襟橫、蓋以有奇怪也、故存于今、豈可誣哉

東南凡二十餘丁の處に池あり周回一里に及び寒色一碧深淺測るべからず如何なる早魃にも曾て減水

せしことなしと云ふ又た現權岳の南十丁許りの處に一小池あり土俗兩池を併稱して御池と呼べり、

山麓より西北一里二三合鶴居村大字藍原字逆手隈山河畔に

◎郷社相原神社

あり元鶴居八幡宮と稱し宇佐八幡を勸請せしものなるが後秋津彦、秋津姫の

二柱を合祀す保延元年(紀元千七百九十五年)湯屋彈正基信の家臣古野源兵衛重定の娘つる及び其の

子市太郎八柱に立つの事あり里人母子を鶴市神と崇め更に此社に合祀せり

縁起に云下毛郡逆手隈御神は秋津彦、秋津姫の二神を祭り其の後宇佐神領の内沖代千餘町の田地

を湯屋彈正基信、相原内記有之、一松六郎兵衛清氏、萬田左京盛堯、小畑四郎右衛門宗重、中殿

八郎兵衛國直、宮永左兵衛義成等七人にて支配せしが暇を築きて高瀬川の水を沖代に引きしかど

下毛郡

耶馬溪之圖



も洪水の出づる毎に流潰して塞ぎ得ず爰に七人の地頭相議りけるに湯屋彈正申けるは昔よる人柱を立てざれば必ず堰を築き止めずと云へり(中略)各橋を水に入れて其橋の先に沈みたる人を入柱とすべしと云ふ(中略)湯屋彈正の袴水底に沈みけり其家臣古野源兵衛重定の娘に鶴といふものあり云へるやう家臣ありながら君を人柱に立てまゐらす事有るべからずわらはこそ女なれども君の恩澤を蒙り奉り成長候へば御身代致すべしと云ひぬ其の子市太郎十三歳になりけるが又申けるは私こそ幼年なれ共男子なれば御身代仕うまつらめと云ふ斯くて母子共に八月十五日人柱に立ちにけり即て母子の名を合せ取りて鶴市と號し水道守護の神とぞ祭りける

今以上の各地を悉く巡遊するを欲せず一二を選択して遊覽せんとするの旅客に便せんが爲め重複を厭はず更に中津停車場より各地に於ける距離及び方位を左に掲げむ

自性寺	西 數丁	公 園	西北七八丁
龍王濱	北凡十丁	大江八幡宮	西凡七八丁
問々の濱	東凡一里餘	雲雀床	東一里弱
薦社八幡宮	南東一里五合	猪山八幡宮	南凡一里半
箭山神社	南凡二里半	正行寺	東南凡一里
相原神社	南 一 里	耶馬溪口	西南凡三里

下毛郡

山國川に沿ひたる一帯の巖谷をいふなり往古は山國溪と唱へしを賴山陽一たび其の詩文に『耶馬』の字を用ゐたるより忽地其の勝景の天下に喧傳せらるゝと共に自ら稱呼も改まりて今は山國を口にすもなきに至れり溪の長さ十有五里之れに支溪を合すれば殆ど百里に垂んとす然れども道路坦夷老幼婦女といへども尙ほ能く遊覽を縦にするを得べし殊に近年中津より玖珠日田兩郡に通ずる縣道開鑿せられしを以て行歩一層の便利を見るに至れり而かも又三十五年度より縣費十五萬圓を投じて更に完全なる道路を開鑿せんとす成功の曉旅客の享くる便利知るべきなり然り而して世人動もすれば青生羅漢附近を以て耶馬溪の景色竭くるものとなし其の全景を探らすして歩を返すものあり青生羅漢の景佳は即ち佳然れども之れ素と溪中の一支景たるに過ぎずその百里の全景を探らんと欲せば少くとも一句の日子を費さざるべからざるなり而して又其の觀望の位置を得ざるが爲め態々口の林高城附近まで歩を進めながら最好景色の一斑をだも看取すること能はずして耶馬溪山深く賞するに足らずと速斷するものあり之れ畢竟適當の案内者及完全なる案内志(豐前名所案内あれ其稱前に失し又三ヶ月神社を毛羅野神社とす平田八幡宮を範岡八幡とし手斧立八幡宮の後に眞坂の洞ありと記せる如きは大に事實に)の乏しきに原由せずんばあらず豈遺憾の至りにあらずや此の備未だ以て完全の案内志と爲すに足らずといへども編者自ら實地を踏査し努めて誤なからんことを期せり庶幾くは旅客探勝の契と爲すに足らんか若し夫れ景勝の眞面目に至つては左に掲ぐる諸大家の詩文を一讀せば略ぼ其の梗概を想像

◎耶馬溪

耶馬溪圖



するを得ん佛頭敷を加へて山靈の怒りに觸るゝは編者の忍ぶ能はざる所なり探勝の時季に至りては楓葉霜に飽き満溪紅霞漲る晚秋若くば葉々枝を謝して山骨見はれ枯木花さく窮冬の頭を最も好とす

頼山陽

歲戊寅、遊鎮西、過海、南望彦山於雲際、已覺其有異矣、既經二肥薩隅、還寓豐後隈邑、臘月五日入豐前、遇一水北來、蓋發源彦山者、沿而東數十里、昏黑左右峰巒皆非凡、山溪相迫處、鑿山腹爲道、又穿窟取明、余買炬以入、遇窟窺見月在溪水、朗然、宿民家、翌大霧、待霧乃發、復沿溪東、愈東愈奇、群峰夾水、水掛練如、春笋巖出、有土載石者、石挾土者、全石者、全石破裂成洞穴者、兩石相闢其一欲倒者、石數層累成夏雲狀者、而樹自石罅、橫生縱生倒生而上指蒼生蔽石、如與石爭勢而欲勝之、石又自樹中、奮躍而出、而石陰皆苔、紫綠相間或沒石半面、或沒全身、又如援樹攻石者、大抵峰勢石皴如畫、巨刻意圖、時窮冬多老木葉脫、牙瘦古、皆倪黃筆法、而苔枯盛蒼渴者王叔明也、古人筆墨不吾欺也、至柿阪、憩孤店、店面石壁、數丈飛泉懸焉、仰則更有高峰、不知其幾千丈、余急釋所佩酒瓢、命燐之、窺突蕭然、會一獵師新獵、豪豬、割而表之、肋脆如水、連引數丈、又行、溪又數曲、隨峰勢上下、或激雷噴雪、或淳膏凝碧、峰影爲之或碎或全、似水妬山而難其影也、至屈智林、溪稍開、有小村、過一橋、自此行溪北、開者益開、數十里、詣古城正行寺、寺主合公余故人、談余既久、余先詫曰、君州山水太奇、合公

曰、更有奇者、便子目之、居二日與合公南行、行田隈間、至仙人巖、巖石突立山頂、合公指示余々甚不賞、其明又徑田隈、至羅漢寺、寺踞山鑿、山作洞壑、橋梁狀、安五百像、余復不甚賞、宿寺前、遊挑燈而談、余曰、山不得水不生動、石不得樹不蒼潤、所以余賞馬溪而不賞仙人巖、至於羅漢、則人工耳、然皆馬溪之支裔矣、且馬溪々山相迫無田隈礙、目而其路坦夷真可遊也、然爲二豐道道過者、慣看況公等生、成此土、宜不覺其奇也、余則再遊不可、期將復溯之以諦觀之、合公奮袂與俱、早發、過一水、北出馬溪口、峰容樹色、忽覺迥別、自淺入深、自平入奇、泝前數曲、者一曲、奇於一曲、比諸前遊、更可喜也、復至絕壁下孤店、々主識余面、驚曰、是前喚、猶客也、有何幹、爾來此耶、余曰、欲看山耳、曰、山有何好看、吾不禁、子看山、遂席溪畔、與合公傾瓢一醉、宿山寺、明雨、借橋西還、山峰得雨、變幻作態、或前以爲一山者、分成數峰、如群仙駢肩露其半身、萬松振鬣、鼓濤於雲中、又如廿五菩薩奏樂而至也、還至屈智林、合公慮吾酒盡、豫戒家僮、馱於馬來、取醉宿阿保村、翌歸寺、又三日辭去、踰海東歸、自海雲中、顧望鎮西山、岳屬其豐前者、皆有別態、彦山其尤大者、耶馬山脈水理、蓋皆自彦山發、故獨絕耳、余足跡幾半海內、弱冠東遊、得妙義山、以爲無雙、今馬溪百里、如妙義者、不知幾十峰、謂之海內第一、或不誣也、己卯之臘、朕得爾時寫山粉本數紙、戲以意接、屬之爲橫長一卷、又記其由、併錄所得詩九首、余詩文筆拙、不足狀其髣髴、況畫乎、後有能者如畫巨倪黃之流者、賜其境、而補成之、庶

下毛郡

幾不負此山水、然目此山水為海內第一者、乃自賴子成始、圖為舍公所取去、備後故友橋元吉、亦好山水、請為寫一本、諾而未果、今茲已丑、護母至尾路、留旬日、乃踐前約、而舊圖不在、尋諸胸臆、冥搜點運、覺山靈水神或來助我、遂能成此、屈指已十二年矣、憶當時歸帆外、豐山依々如相送者、今猶在目中、也

西遊日錄

小野寺 鳳谷

日田投逆旅、廿一日、爛晴晨發、二里餘、一嶺、自此而前、二里一村、曰森實、乃耶馬溪、發源彥山、水聲琮然、清徹見底、渡溪一轉、三巨巖、對峙刺天、蒼苔皴駁、翠蔓搖綴、宛如拱立迎客、余命曰拱立巖、作一圖、自此每得佳境、一一作圖名、群峰記、石盆怪水益奇、一勝如群仙游戲、名群仙峰、得雙巖、矗立十丈、直探霄霄、曰瓊樓巖、渡溪北顧、崖壁峭立、一洞通蹊、水聲激越、琤然可聽、曰佩環洞、抵柿阪、飛湍澎湃、石益峻、水益咽、奇峰截竅、古松橫生、如與石相抗者、遙望雲霞映發、詢為絕勝、曰飛動峯、東崖巖巖錯立、奇不可言、曰山陽再觀至此、日曛不能去、乃投窟知林、呼酒助興、山影水色、恍覺在目、廿二日晨食而發、見一崖窟狀如盆、石秀潤可玩、窟安大悲佛、溪流環之、峭壁數十丈、麗進曲折、老樹亂生、苔蘚濃沫、山色澗光、互相映發、穿壁下、疊石、作溝通流、遠望如瓊琨、而川水為懸泉、宛如行屏障間、曰曲屏崖、々盡巨石砥礪、架危橋、狂瀾怒激、瑞湯噴雪、曰噴雪橋、一翁乘筏、後下灘、迅疾如矢、操棹又妙、右折十數町、

雙峰巖絕、抵羅漢寺、松杉交柯、仰不見天、日刻岩作、過數百級、有一險處、鑿坎受趾、躋石梁、臨之如半月、一窟倚崖、腹置五百佛像、據洞設樓門、過之則佛殿、怪壁下垂、如大鵬張翼、踞階下、敵山溪、恍然有仙山樓閣之想、取前路、岸上奇峰嶙峋、峭拔者凡十三、如秋雲變幻、曰幻雲峰、路而窮得洞門、凡五、巖壁穿窓取明、最後一洞長七八十步、可騎過、洞盡碧波巖、巖巖為蟠龍狀、曰享保年間、出羽僧禪海所鑿、羅漢寺記、中、禪海是越後の人と云、セリ又江戸、越前、の僧とも云、リ村驛曰榎田、巖巨突起、村家落々、倚巖而住、曰手斧、建宇佐廟時、取材于此云、至此山圍稍解、眼界淵然、凡溪之勝、七里十三村、呈秀獻奇、皆天地神秀清淑之氣、凝結所成、抑亦洪水拆嶽、洗肉存骨者也耶、山陽目為天下絕奇、真不誣也、寫為十三圖、記概略、附圖後、未牌、抵中津新濱、訪橫井正卿、客歲新會此地、填海開田、凡廿五町、正卿開數頃、構一宅、西望連山、東臨茶海、浮嵐暖翠、排闥而來、風色頗佳、正卿論經濟、妮々可聽、廿三日、同正卿訪文學白石伯年

入豐前、過耶馬溪、遂訪雲華師、共再遊焉、遇雨有記、又得八絕句、峰容面々趁看殊、耶馬溪山天下無、安得彩毫如董巨、生練一丈作橫圖、純石為峰勢欲飛、峰頭更戴幾塵埃、西州索畫無多夢、獲此天然黃太癡、群仙願貯各多姿、石作肌膚樹作衣、平昔評山如品色、唯憐清瘦不憐肥、

下毛郡

簇出奇巖勢接連、插天碧笋茁春烟、一峰別起形相類、山脈知如竹進鞭、一瞥展顏未飽情、今遊眉目始分明、賞心不貨平生履、耶馬溪頭兩度行、山屐何辭泥路新、天將變套待遊人、群峰得雨如龍鬪、隱躍雲間見爪鱗、寫山不厭雨傾盆、植杖探囊筆屢援、却情同行扶掣紙、笠檐餘滴草生痕、萬巖影碎碧層溪、慣看行人渾等閑、從古喧傳羅漢寺、何知剩水與殘山、

耶馬溪絕句九首

梁川星巖

從日田到中津、一路山水靈秀、賴子成嘗評為無双、有耶馬溪山天下無之句、但其在荒僻、人多不知、而聞者亦不能深信、今日親自絕險究勝、方知子成之不我欺、遂效擊成九絕句、恐未足

粵三將什一、終取一嘲於山靈水神也、

荒驛人家簇午煙、人家忽盡水潺溪、隔溪一望先明眼、玉筍瑤簫森刺天、漸聞活々佩環鳴、翠蓋青旗透日明、報愧書生寒乞面、群仙抗手儼相迎、人遭知己死亦足、木遇良工為異材、怪箇溪山帶矜色、曾經名士品題來、石約峯頭山東溪、煙雲錯落樹低迷、畫人要圖黃家秘、何不漸糧到鎮西、山靈盤薄意區測、欲出變機誇與人、青倒碧奔欄不住、峰々忽作亂柴皴、溪山勢逼路斗絕、行客無緣相往還、巖腹鑽來通一線、居然小有洞中天、

經險處往往穿山腹作空道 蓋潭海道人所創云

日車紅閃曉風曲、樹々晴煙次第開、青壓馬頭驚欲倒、萬峰飛舞自天來、雲吐霧吞峰出沒、故人曾說雨中奇、吾行遺恨君知否、不見群龍隱躍時、曾讀黃溪諸勝記、恨無畫卷併傳之、異哉吾黨山陽子、双筆能將一手持、

耶馬溪

齋藤竹堂

掛巒疊嶂盡奇鏡、造物應嫌着一凡、爭得雲梯三百丈、乘風飛上萬巖巖、溪光玲瓏水亂鳴、丹青有手寫難成、奇巖且欲詩中絕、又恨傍人不知名、世間多少石崢嶸、果與此溪誰弟兄、金洞從前稱最勝、恨無一派水琮瑋、

從耶馬溪赴日田途上口占

田能村竹田

羅漢巖前日欲低、飛狐峰外暮煙迷、今宵投宿知何處、燈火依微古驛西、

耶馬溪途上口占

原古處

石立泉奔盡不凡、奇非靈壁是神剏、南人始入雲山國、先拜烏巢第一巖、

羅漢寺偶作

西秋谷

丹崖自着披麻皴、翠壁如描荷葉皴、堪笑大悲貪好景、一巖奇處一分身、

耶馬溪

宇都宮遠山

欲將行硯寫山容、膚寸雲霞雨意濃、無是岳神慳勝景、溪煙忽抹最高峰、

下毛郡

耶馬溪

青帝往々賣新醪、杜宇花紅夏已回、一百里唯隨湖轉、十三村總背山開、危峯拔地尖於箭、瘦樹纏巖短似苔、怪得旅窓嗜昔夢、劍門關下策驢來、

同

廣瀬淡窓

范緩倪迂黃太癡、諸家風趣趁看移、南宗畫訣君休說、耶馬溪山是我師、

自日田赴中津途上之作

平野五岳

奇峰豔々嶺斜橫、尖若浮屠兀若城、一百里程溪曲折、千萬巖岫石峻峰、老湍瀉落激流急、

疊嶂穿通隧道平、烟樹高低山畫匿、此中妙景本天成、

中津町より南に向つて進めば一里にして、山國川の末流字三口に出づ相原神社を左に見、川流に沿

ふて上ること十數丁、眞阪村字佐知より右折して川を渡り、唐原梅林の南端に出で更に流に沿

溯れば、凡そ一里にして原井妙見山下に出づ、河岸に出で、山水を併せ見るべし、景實に奇なり

歩を進むること一里にして、有野弘法窟あり、亦奇景なり、岡鹿門の詩あり

宛是石屏風、修長還屈曲、丹青不可描、苔色天然綠、

前川を渡れば榎田驛(中津町より三里旅宿郵便局等あり)に出で本道に合す

又佐知より右折せずして直に本道を進めば凡一里にして眞坂村大字臼木に出づ、路傍に手斧立八幡

宮あり、宇佐宮第三殿造營の時、此社内の樟の本に於て杣始めの式を行ひたるより、此地を手斧立

と稱すと云ふ此の社の山嶺きに洞穴ありしと傳ふれど、今は痕だも留めず、細川家々臣某の

豊國の眞阪の洞の朝嵐心してこけ沖の舟人

日野大納言資枝卿の

御薪木にそなる妻木れひつれて眞阪の洞を出づる山かつ

と詠せる歌のみぞ残れる、阪を下ること十餘丁にして年魚返りの小瀑あり、河原に出で、見るを宜

しとす進むこと五六丁奇岩怪石累々として頭上に聳ゆ之れ即ち佛坂の勝にして形田橋より回眺する

を最も好しとす

ほとけさかてえつゝ見れば名にも似ず鬼の住むらん岩屋なりけり

此の形田橋を架せる溪流に沿ふて二里餘溯れば、好景色あり、之れを屋形支溪の中の迫と稱す、形

田橋を渡りて本道を進めば間もなく榎田の驛に出づ、驛の外づれより向岸智木を望む、頗る好し、

少しく歩を進むれば峭立せる斷崖の胸腹を穿つて、路を通ずるあり、延長三百歩、處々に崖を穿つ

て、明を取る有石なる青生の隘道は即ち是なり寛永三年(紀元二千四百年)八月の頃、初めて成

功せしものにて、江戸淺草の僧禪海が三十餘年間の苦辛經營に成りしものなりと云ふ、洞門の前に

渡舟あり向岸に渡りて見るべし大に看を異にす第一洞門を過ぎ三十三歩巖腰を攀ぢれば、洞窟の中

下毛郡

本田親雄

本

田

親

雄

下

毛

郡

本

田

親

雄

下

毛

郡

本

田

親

雄

下

毛

郡

本

に禪海の石像を安置す、禪海曾て人を殺し奔竄して、此地に來り、行旅艱難の状を目撃し岩を穿つて庶人に便し、其の功德を以て前罪を贖はんとの誓を立て、錐鑿年あり、偶々殺されし者の子某物色し來りて、刃を禪海に擬す、禪海道の未だ成らざるを以て、功を卒るまで、猶豫せんことを乞ふ某其の至誠に感じ協力工事に従ふ、將に成るに垂んとして、禪海死す、某海泣厚く葬ると云ふ、禪海の墓は羅漢寺の山中、智剛寺の上方に在り釋教雄が山陰鑿道の碑に曰く

跡田之山、嶺焉千峰、跡田之水、衆潤所鐘、山水之美、會稽維同、有石當路、高聳碧空、絡繹行旅、乃哭途窮、索鎖踰棧、寒粟徹躬、若失一步、定墮水中、鑿哉禪海、能動其攻、鐘鑿巖壁、人威其衷、財施力施、協心茲從、經三十載、克遂其功、長三百步、並騎而通、豁開鑿道、勝彼鬼工、持地平道、此績芳蹤、盛功勒石、永劫無終、洞門を過ぐれば、無數の石峰左方に林立す瑰奇百態土佐の神筆も加ふるに地なし蓋し溪中屈指の景勝なり

曾聽溪中第一名、秀靈鐘處是青生、今宵來宿探奇客、衆崎濯冕入夢清、(依田百川)
少しく歩を進むれば耶馬橋に出づ橋畔に旅舎あり山國屋と云ふ樓上座して青生の勝を望見するを得又耶馬溪名物卷柿等を販賣す耶馬橋より左折すれば、東谷川の支溪にして、玖珠郡舊道なり、行くこと凡一里、洞鳴橋あり、河原に出で、瀑と山とを併せ見るべし、宛然一幅の畫圖なり、橋を渡り

内廿四勝あり曰く
飛來峰、天人橋、伏虎巖、達磨瀑、寒山巖、從容館、石梁、普齋樓、微妙花(今無し)香雲閣
無漏窟、蟠龍洞、高原水、鳳臨亭(今無し)摩尼殿、石爛室、華鯨樓、鷄足塔、指月庵、仙掌巖
拈華頂、翠壁巖、金剛關、降龍川、
所謂案內路より峻坂を登れば知らずく石橋の上に達す、古羅漢、飛來峰、天人橋、降龍川等の佳景悉く眼下に集つて眺望絶佳なりといへども、若し一步を失はば忽ち千仞の巖谷に顛落するを免れざるべし膽掉ひ足慄き久しく留まるべからず石橋を下り掌返を廻れば千體地藏を安置せる洞窟あり、普齋樓と云ふ山門(香雲閣と稱し普關囉の額字は即非禪師の筆)を入れれば又大洞窟あり、榜して無漏窟と云ふ、釋尊、文殊、普賢、五百羅漢等の石像を安置す、威容殊別、個々生けるが如く人工の妙を極む、窟中清水を湧出す、甘露水と云ふ大早に涸れず、汲ども盡きずと云ふ眞に靈水なり、窟前洞狀を爲せる所を蟠龍洞と呼ぶ、左方に洞穴あり鍼耳洞と云ふ、梯子を懸けて、洞を潜れば華鯨樓(鐘樓)あり、左側の岩面に白色の阿彌陀佛の尊像を自然に孕出するあり之れを吹出しの彌

下毛郡

陀と唱へ、又之れに依つて往古は此山を阿彌陀が峰とも呼ぶしとぞ、白晝は僅に模糊たる體軀を彷彿するに過ぎずと雖も味爽若くば黄昏の頃、之れを見れば彌陀及左右侍衛の像を現出すと云ふ奇と云ふべし又た雨後若くば雨中に山門上邊の岩壁を望めば、入山の二字判然と顯はると云ふ是れ亦た頗る奇なり、本堂即摩尼殿の左方懸崖の上より、點々落下する水を高原水と云ひ、摩尼殿の右方の應接室を石爛室と呼ぶ、摩尼殿の後方なる岩の半腹に地獄極樂を假設す着想頗る妙なり屋上に三品の彌陀を安置す東照宮、説夢堂、指月庵等は、皆庫裏の後方、絶壁の上に在りて、孰れも眺望絶佳なり、因に記す備後櫻山の人小野櫻山深く耶馬の溪山を愛し十七年前より溪中に居住し今現に指月庵に在り豫ねて此名山を汎く天下に紹介し併せて文庫を設置し關西文學界に貢獻する處あらんとの志望にて時々諸國を遊歴し平素嗜む處の丹青の妙技を揮ひ獲る處の報酬を以て古書を購入しつゝあるが既に其蒐集する處三萬餘卷の多きに及べりといふ而して又氏は耶馬溪沿道の有志者等と謀り耶馬溪保勝會を組織し大に景勝の擁護に力むる筈なりと他縣の人猶且つ此美舉あり本縣人たるもの豈碌々此名山に辜負して可ならんや

和漢三才圖會に云ふ、耆闍崛山羅漢寺、在宇佐之西北五里、曹洞 寺領百石、釋迦 五百羅漢、及千體地藏、總三千七百體、皆石像也、開山圓徑禪師、彫刻之、仙人名三逆流健順、者、忽然馳來合、力、一夜中全成、其靈囑本堂、皆希有精舍也、

貝原益軒豐前紀行に云、羅漢寺は古は五山派の禪寺なり今より六代以前傳宿と云ひし住持より、曹洞宗に改む、慶長の頃の事也、此寺數區あり、下にも末寺一區あり云々、猶登り行けば大岩の下に十六羅漢あり、千體地藏左右一所に連れり、此地藏は皆こまやかなる石佛なり、是は慶長の頃、羅漢寺の住持傳宿初めて彫刻せり、なほ登り行きて、大岩のさしかゝれる所其廣方九間、内の高さ四間餘あり、其奥に五百羅漢あり、皆一軀宛に作れる石佛なり、石佛皆窟の下に在り、云々、五百羅漢は石佛と雖も、或人は練物と云へり、其工誠に奇妙を極めたり、一佛毎に其容各異なり、一様ならず、又其内に焦れ煤けて、聊か大なる佛あり、水にて洗へども、常に焦れたるが如し、是亦ねりたる故にかく見ゆるにや、窟は人力にて穿てるにあらず、自然の天工なり、窟前に欄干ありて向ひの山間近く見ゆ、扱て古羅漢と云ふ所、是れ亦大岩數多峙てるあり、天然の石橋あり、そのさま甚だ奇なり、予諸國を遊覽せしかとも、かばかり奇絶なる所は、未だ見ず云々

山崎美成提醒紀談に云、予西遊せし時に、豐前國下毛郡、迹田村なる、石像の五百羅漢を拜せんと、その地に至る、耆闍崛山羅漢寺と云ふ、精舎あり「老の坂」といふ峻しき坂を登る又「手掌がへし」と云ふ所あり、石橋を渡る、此橋天造にていと危ふしさて巖のまゝにて五百羅漢を彫みたり、外に四天王、八大龍王、日天子、月天子、梵天、帝釋、普賢、文殊、など皆石像なり、本堂も巖をきり開きて造りそへたり、天井も壁も皆巖のまゝをきりたてたるものなり、奇といふべ

下毛郡

し、僧絶海が曰く、豊前州羅漢寺、鎮西勝地、而鍾三台鷹之秀、延文五年春、釋照覺始入三石室而居、遂成寶坊、未幾、有僧健順、跡三山石起伏環奇、手彫羅漢像五百軀、儀貌魁悟、靈神峯顯矣、

題羅漢寺瀑布

田能村 竹田

懸水三十仞、疾雷聞數里、盛夏涼生秋、倚杖夫誰子、

病中贈別家弟遊羅漢寺

村上 佛山

羅漢山中寺、奇工役鬼神、危橋架片石、大洞容千人、雲白埋僧座、苔青蝕佛身、病狀殘夜夢、趁

爾上嶼响

當寺重なる寶物は閻浮檀金の觀世音、及佛舍利にして由緒縁起は左の如し

大化年間法道仙人有縁の衆生をして天然巖石の面に孕出せる白色阿彌阿佛の尊像を拜せしめんが爲めに開闢せらる仙人は天竺靈鷲山五百持明仙の一員なり釋尊の教を受けて金剛摩尼法を修し支那百濟を過ぎ我日本に來り播州印南郡法華山一乘寺を建立し其後諸國に巡化し許多の精舎を造立す當山亦其一に居れり其頃天竺より携へ來りたる守本尊閻浮檀金の觀世音を當山に遺されたり云々

北朝永和二年(紀元二千三十六年)長州赤間關の者なりとて五男二婦來り自ら錦囊を探り舍利一顆

を奉呈す衆僧蟻蝨かと疑ひ以て師に告げず師一夕夢に神入り來り告て曰く此佛舍利は利己育王塔中の舊物なりと師大に驚畏し翌旦衆僧に問ふて實を知る覺師自ら赤間に往て物色して之を尋ぬるに其人を得ず以爲く神授なりと感泣頂戴す云々(舍利塔銘)

問道を下る三三十歩右方に小丘あり鷄足塔と云ふ照覺禪師入定の地なりと云ふ二王門即ち金剛關の前を過ぎ隘道を下れば智光寺の前に出づ寒山巖禪海の墓、從容館(元道達關に作る)達磨瀑布伏虎巖等は皆此後方の林中に在り再び耶馬橋に出で山國屋の下より自然橋を渡り流れに沿ふて溯れば即ち日田に通ずるの舊道にして其の昔山陽の通過せし道なり長淵を過ぎ河原に出で曾木の景勝を回顧し少しく進んで再び河岸に出で賢女が嶽を望むべし頗る好景なり冠石野山下を過ぐれば岩洞山の奇勝あり一に補陀落山と云ふ山下に八福寺と呼べる小坊なり千年已上の古刹にて天長年間(初年紀元千四百八十四年)勝宮守の創建なりと傳ふ元真言宗なりしも今は曹洞宗に改め羅漢寺の末寺となれり仁開の作正觀世音の坐像を安置し又子刀自賣の鏡宮守の鍔など傳はれるも眞物とは認めがたし右に平田城趾の勝景を觀又た川を隔て、立留の奇景を遠望しつゝ、歩を進むれば路傍に寺あり西淨寺といふ山門の額三惠山の字は太宰大貳大内義隆の筆なり行く事少かにして宮の馬場に出づ傍に八幡宮あり祭神は 應神天皇、比咩大神、神功皇后、仁徳天皇、高麗神にて建久六年(紀元千八百五十五年)成恒近江守頼俊の勸請(一説に建久九年野中二郎重房の勸請と云へり)なりと云ふ宮の馬場の端づれに小

下毛郡

溪あり福土支溪と云ふ奇景多し溪口に小瀑あり城門の瀑と云ふ又此邊より對岸口の林を望む頗る好景色なり依田百川詩あり

溪轉路廻峰復峰、彼迎此送巧相逢、忽從雲外飛奇嶂、看目巖間咄怪松、猶歩を進めて鶴坂の下り松を過ぎ飛瀨の五瀨を左方に見小友田に出づ百川また語て曰く

孤株綠掛鶴岩松、數派白奔飛瀨淙、溪左又看城門瀑、落和雲確響聲々、

醉仙峯内洞等の景勝は皆對岸になり机淵の岸下を廻り津民川を渡る此溪流に沿ふて溯れば正木の瀑河原口の長岩、落合の瀑等希有の景勝あり津民川の渡頭を長藪と云ひ大洞、高城等の景勝を望むの好位置なりとす琵琶淵河畔に出で鳴瀨山を廻り柿坂(中津より六里)に出で本道に合するなり

又耶馬橋より此舊道に依らずして直に新道を往き智木の景勝を彼岸に望みて進むこと凡そ十餘丁にして蔵野の溪瀑あり夫れより二三丁にして路の左方に三ヶ月池あり形繼月に似たるを以て名く往昔節婦子刃自賣の住居せし地なりと云ふ子刃自賣の歌なりとて人口に膾炙するものなり其調固より古代のものに非ず恐らくは後人の作なるべし

松の枝の緑にやとる葉の蔭の錦をあらふ三ヶ月の池

三ヶ月の池の邊にみそきして君か千歳を神にいのらん

忘れすは頼みし人の面影を一夜はうつせ三ヶ月の池

節婦子刃自賣は勝宮守の妻にして東城井村大字智木の毛蔵野大明神は此宮守夫妻を祭りたるものなりと云ふ猶子刃自賣の事蹟に就ては日本後紀に詳なるを以て左に抄出す

天長四歳(紀元千四百八十七年)春正月丁亥、節婦豐前國人難波部首、子刀自賣、免其戸課役田租一終身勿事、子刀自賣、年十有八歳、適下毛郡擬大領蔵野勝宮守、二十箇年、夫宮守死去、子刀自賣獨守空室、十二歳于茲、遠近庶士求之不少、而有諒同穴、無心再醮、愛亡夫之遺衣、置獨守之牀、上朝夕毎見、追慕不止、亦得甘珍、必供亡靈、隣里無不稱嘆、仍表門闕、以旌貞操也、

二三丁にして賢女か嶽の麓に出づ川に渡舟あり一棹水を研りて對岸に渡れば大に趣あり

賢女峰頭尖似錐、微瀧亦有玉簾垂、最奇南北山泉影、落在中間新月池(依田百川)

更に十二三丁にして立留の岩下に出づ此奇石の間に産する竹を以て尺八を製すれば清韻無比なりと云ふ川を隔て、冠石野、岩洞山、平田城趾を望むも亦好風景なり

岩洞之形如佛像、衝雲直立三千丈、晚鐘聲裡有僧歸、福屋自然秋氣爽(依田百川)

之れより數丁にして口の林(中津より五里)に至る旅舎、平野屋、中屋等は耶馬溪中最良の旅舎なり郵便局、小林區署等あり之れより柿坂に至るの間絶えず内洞、小屋敷、高城等の奇勝の下を過ぐれ共餘り接近せるが故に僅に其一斑を仰見るに過ぎず必ず向岸に渡りて見るべし尤も城井村、烏帽子山、長藪、鶴岩、鯛掛岩等、向岸の勝は充分に望見するを得べし柿坂驛の少し手前より對岸を望め

下毛郡

ば群峰の左角に一空洞を認む小河内の天橋と云ふ、夫れより少しく歩を進むれば路傍に旅舎あり傍して喫猪亭と云ふ山陽の豪格を表たるは此家なりとぞ屋角を廻りて河岸に出づれば擁筆峰の勝景あり尙進むこと四五丁にして玖珠道路と岐る此玖珠道路を深瀬溪又は新耶馬溪と唱へ本溪に次ぎての好景なり玖珠道に入りてより凡そ二里山移村あり景色甚だ好し猶少しく進んで鴨良附近に至れば數百萬の石柱集りて一大岩を造れるが如きもの相環抱して高く碧空に聳へ怪松盤屈峰頭に亂生し淵水涘々岸脚を廻つて清冽掬すべく景趣の妙なること溪中罕に見る所なりとす之れより溪漸く窮し規模甚だ秋きに失するの憾なきにあらずと雖兩岸山として石ならざるはなく石として樹ならざるなく危ふして墜れんと欲するもの怒つて飛んと欲するもの奔るもの座するもの躍るもの嘯くもの變幻極りなく殆ど應接に遑あらず淵水曲折其の間を流れて奔湍雪花を蹴へし山谷深遠實に仙境に遊ぶの感あり水源に橋あり舞出橋と云ふ道路屈曲螺旋狀を爲し橋下を通過して更に橋上を渡る設計頗る奇なり此橋より鹿倉峠を經凡そ一里半にして玖珠郡森町に達す又橋を渡り隧道を過ぎて左折半里進めば同町宇谷の河内の臥梅龍あり

柿坂より玖珠道に入らずして直に本道を進めば凡そ半里許にて路傍に田社神社あり路下河畔の社は同神社の故址にして榎山路淨眞寺の僧山陽并に雲華師を送り來つて訣別せし處なりと云ふ夫れより鹿隈山麓を廻り大久保大神宮社の下に出づ同社の祭神は天照皇大神にして大久保、金吉、島、宮

園、榎山路の五大字にて祭れり古松翁鬱鬱四望豁然實に得がたきの勝地なり此麓の手前二軒家の傍りより左折凡半里許り進めば下郷村大字金吉字行廣に出づ此附近の景色亦秀絶なり進むに従ひ溪漸く迫り規模狭少なりと雖も岩石の奇なること寧ろ本溪に過ぐるものあり行廣より一里半字伊福に後藤又兵衛基次の墳墓あり墓の正面に義智光居士と記し上に梵字あり銘に曰く

居士俗名又兵衛、不知何所之人、往昔此邑而、寓居三年、其於爲人、志氣英威、武德俊高而、眼光射人、于憶諸侯太夫者之逆於世、而適居者乎、承應三甲午年(紀元二千三百十四年)正月廿九日夜、自殺劒刃、嘗往歲久石碑關落、因玆里人墓、右、新立石碑、資助冥福一者、寶曆十三癸未歲(紀元二千四百二十三年)六月日、願主金吉村伊福茂助、

蓋徳川家を憚りて故らに其文辭を曖昧にせしもの歟口碑の傳ふる處によれば基次の此地に潛みしは曾て黒田侯中津在城の時基次も之れに仕へて中津に居り金吉村より妾を迎へたることあり大阪落城の際即ち其縁故に由りて此處に遁れ來り傍かに時の到るを待ち居りしに秀頼死の報に接せしを以つて全く再舉の望を失ひ一夜感狀寶器の類を悉く火に投じて燈下に自殺すと又菅茶山筆のすゝびにも後藤又兵衛死すとは偽りにて潜かに落ち失せて豊後日田の近側山中村に住す筑前の野村新右衛門と云ふは又兵衛が御なり此に形見に遺せし槍ありと書せり(史家の考究を要すべきものなり)之れより三丁ばかりにして字下河内より凡七合の處に高十間入八間許りの洞窟あり窟中小祠あり窟八

幡宮と云ふ曾て基次の籠居せし處なりとぞ立羽多の奇岩は此奥なり基次の墓所より凡そ一里にして
 玖珠郡八幡村に達す更に進むこと二里にして北山田村大字四日市に出づ
 金吉溪に入らずして本進を往き大久保神社の麓を廻ること一二丁にして妙見橋あり橋上より斜に川
 向を望めば榎山路の村落を見、又竹林に浴へる一山寺を見る之れ即ち山陽雲華と共に宿せし淨真寺
 なり妙見橋より少しく進めば下瀬村宇大島の部落に出づ雲興橋の側に旅宿あり伏見屋と云ふ橋を渡
 り往くこと數丁宮園驛(中津より七里)の路傍に瀟蒼たる森林あり正三位知家卿の

村雨の今朝もゆき、の雲の杜いくたひ秋の木末をむらん

と詠せし雲の杜にて林中郷社雲八幡大神社あり祭神は 應神天皇なり大寶三年(紀元千三百六十三
 年)出現村民柴祠を建て、祭り居りしを 圓融天皇の御宇天延元年(紀元千六百三十二年)一品舍人
 親王の御孫肥後守道推卿の嫡男少納言清原政高朝臣清淨の靈地を選び此地を相し遷し奉りたるもの
 なりとぞ、尙ほ少しく進めば溪流に架せる小橋あり、山の神橋と云ふ、橋西の深谷を望む頗る雅致
 あり一戸の驛に出づれば、峩々たる巖石の高く雲中に颯起するを見る、妙見岳と呼び亦た一佳景な
 り慶長の頃細川家の臣荒川少兵衛和光、之れに城きて居りしより、城山とも呼べり、是れより半里
 許りにして、三郷村大字中摩に出づ支溪あり羽高溪と呼び、京巖岩伏等の奇景は、此溪流の奥二里
 許りの處に在り中摩より半里許り右方に奇岩の春筍の如く簇立するを見るべし、宇曾の筍岩(中津

より八里)と云ふ

尖石參差巖又踞、 莓苔添色綠漪々、 想看陰雨初晴曉、 雲起每峰別樣奇 (清國王治本)

少しく進めば、川を隔て、左方の對岸に奇岩の颯起するを見るべし、岩の中間に空洞あり土俗箭間
 岩と呼ぶ鎖西八郎爲朝の射洞せしものなりと傳ふ、三郷村役場前より百歩許り進めて回廊するを好
 しとす

白石溪南嶺幾雙、 參差若筍又如杠、 何人一箭穿巖腹、 痕跡依然石有窓、 (清國王治本)

猶數丁進めば守實驛に出づ橋あり、朝陽橋と云ふ、橋上の眺颯甚だ好し、橋東に奇岩對峙し、恰
 も手を拱ひて立つが如し、小野寺鳳谷の拱立巖と命せるもの即ち之れなり

君子相逢互敬崇、 双岩拱手立橋東、 應知造化非爲賦、 萬古傳來禮狀隆 (清國王治本)

驛中旅舎(熊谷伍三)郵便局等あり日田道の景勝は此にて終る之れより日田町まで道程四里強なり
 橋東より溪流に沿ふて北進すれば、凡そ一里にして、溝部村大字草本教順寺の下に出づ、念佛橋あ
 り、削れるが如き百尺崖上に架せる危橋にして、字小屋川へ通ず下は溪流巖に激して、白駒を躍ら
 せ、無底の深潭に奔下するの狀、實に、物凄く渡るもの皆戰慄慄えず佛を念ず依て此名あり橋を渡
 らずして流れに浴び、哇畔を上ること凡そ三四丁にして猿飛の奇勝あり、深潭の中央に屏障の如き、
 奇石聳立し、左右兩岸の石、皆青白磨けるが如く、激流跳つて深潭に投ず、其光景筆舌の能く形容

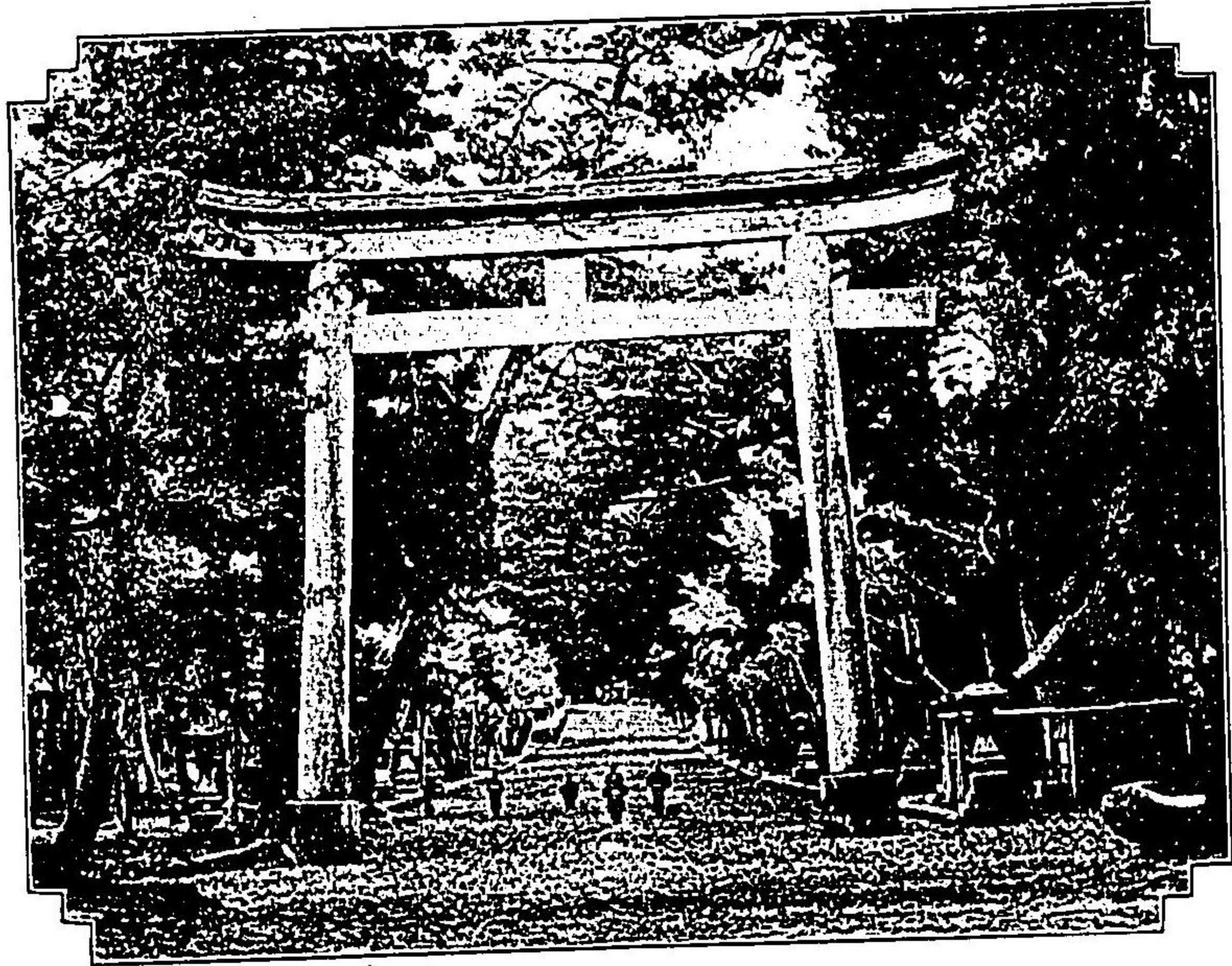
下毛郡

し得る處にあらざるなり、少しく歩を返してもとの道に出で五六丁進み、多良川を渡る溪流頗る趣あり、猶二三丁進み、尾曲橋を渡りて深林の中を往くこと十丁許瀑布あり幽趣愛すべし、深林を離れば椶木村となり四五丁にして明鹿野に出づ之れより右方の川流に沿ふて十丁程進めば毛谷村六助の墳墓あり往時の墓石は土中に埋められ今は其の上に四五尺許の石標新に建てられ刻するに木田孫兵衛之墓なる七字を以てし四邊に石柵を廻らせり春雨蕭々、秋風浙瀝の夕、就て古勇士の英魂を弔ぶもまた可ならずや、明鹿野より左の川流に沿て進めば凡二里にして耶馬溪の本源英彦山に達す

◎宇佐郡

九州別院二郷社二安樂院二善光寺二郷社大根川神社二清水寺二小倉池二郷社泉神社二郷社郡海神社二縣社徳居八幡神社二村社小山田神社二孝女市之墓二古表社眞名井及古妻社眞名井、兎子塚二百太夫社二宇佐町二官幣大社宇佐神宮二高濱川二御食川二宇佐十隣二椋樂寺二大尾神社二大樂寺二圓通寺二地藏院二馬城峠二長洲町二郷社和開神社二西権屋瀑布二福貴野瀑布二仙岩寺二縣社妻垣神社二東権屋瀑布

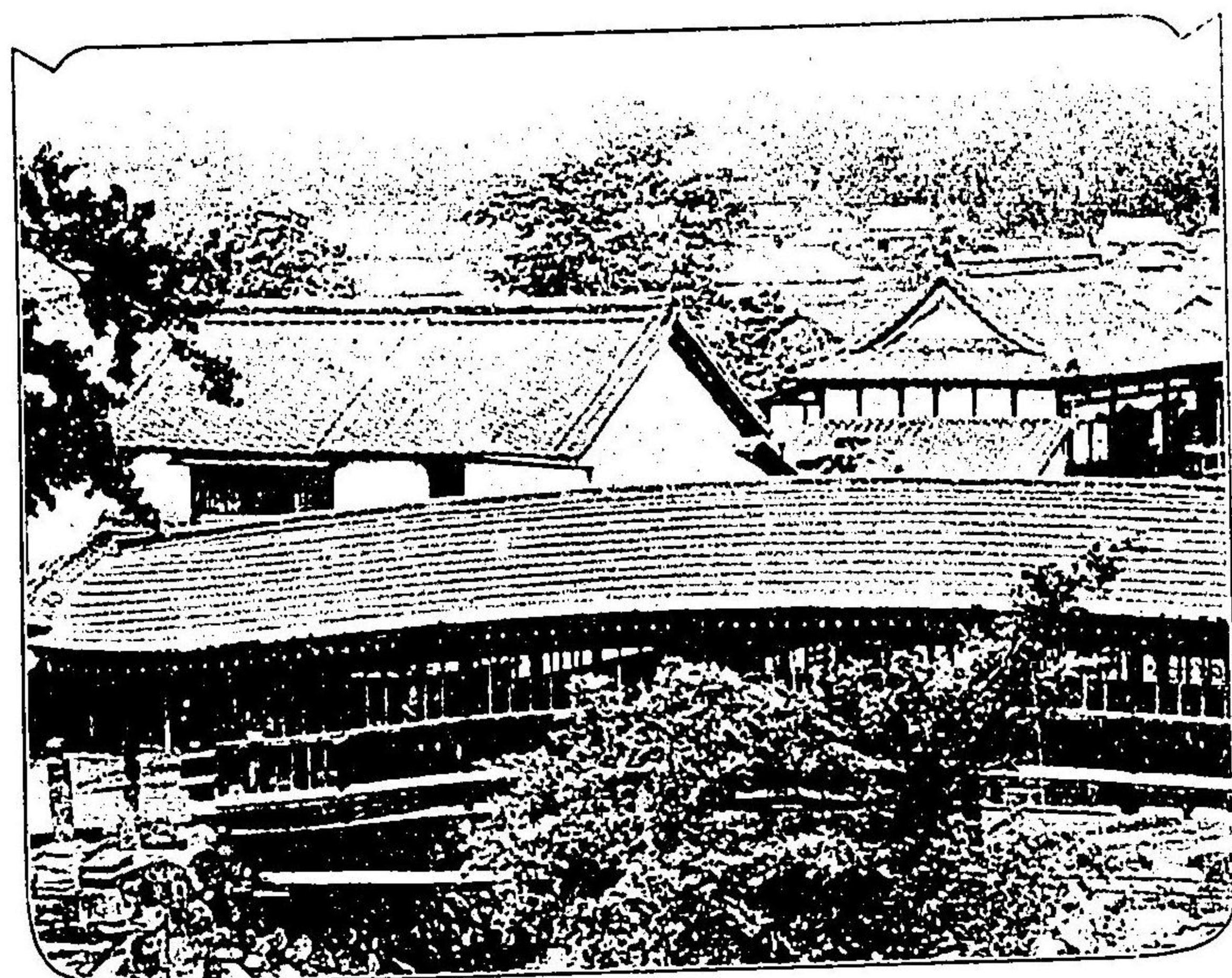
地勢縣の北端に位し東南は西國東、速見、玖珠の各郡に接し西は一帶下毛郡と堺を交へ北は周防洋に瀕す面積二十七方里四分三厘廣袤東西三里三〇、南北七里一〇、戸數一萬三千五百十一、人口七萬五千二百九十九を有し地肥へ民富み大地主の多きこと縣下其の比を見ず陸上の交通は北馬城、宇佐、驛館、豐川、四日市、横山、天津、長峰、各町村を貫通せる坦々たる國道(三十五號線)あり郡の北端柳ヶ



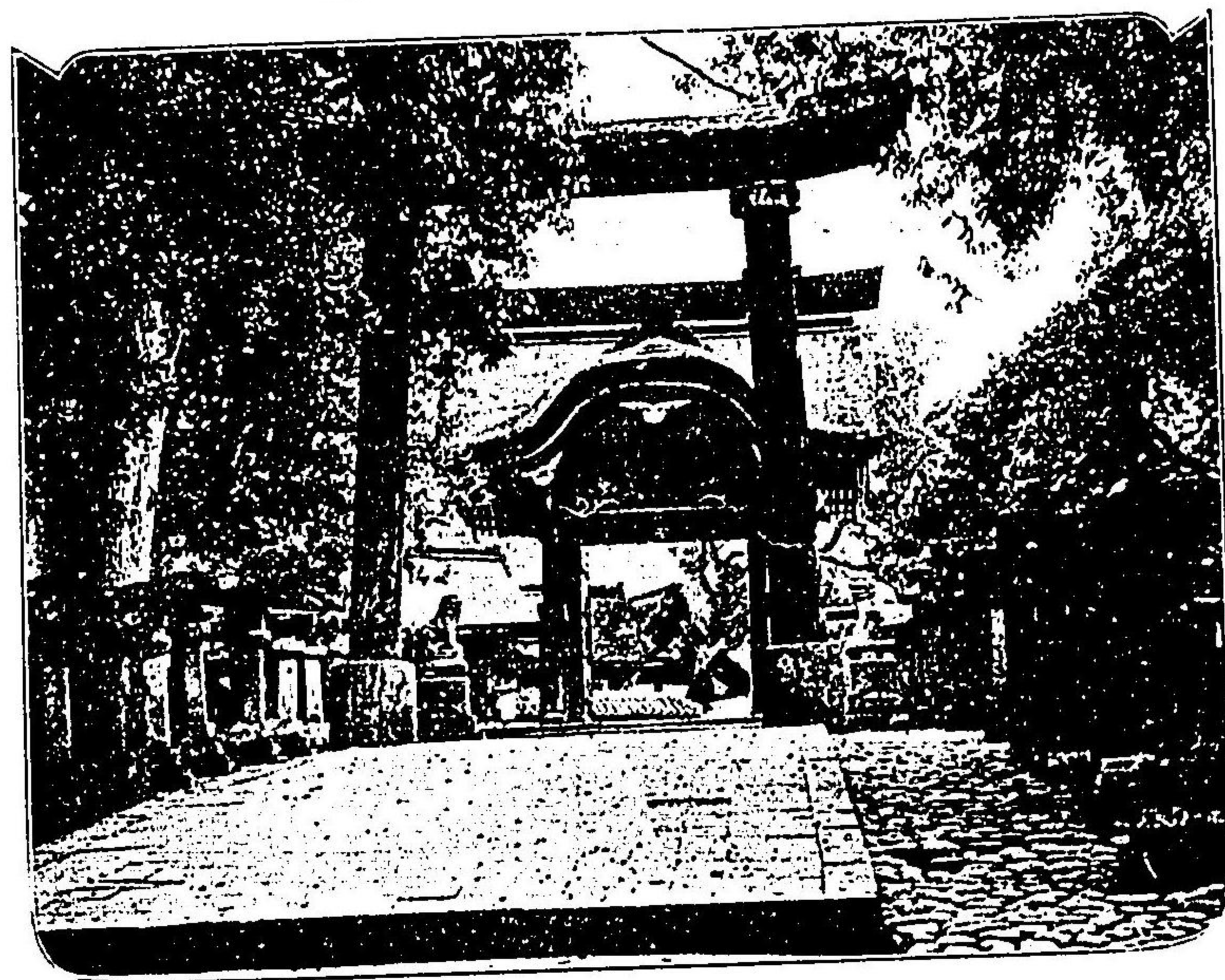
宇 佐 神 宮 馬 場



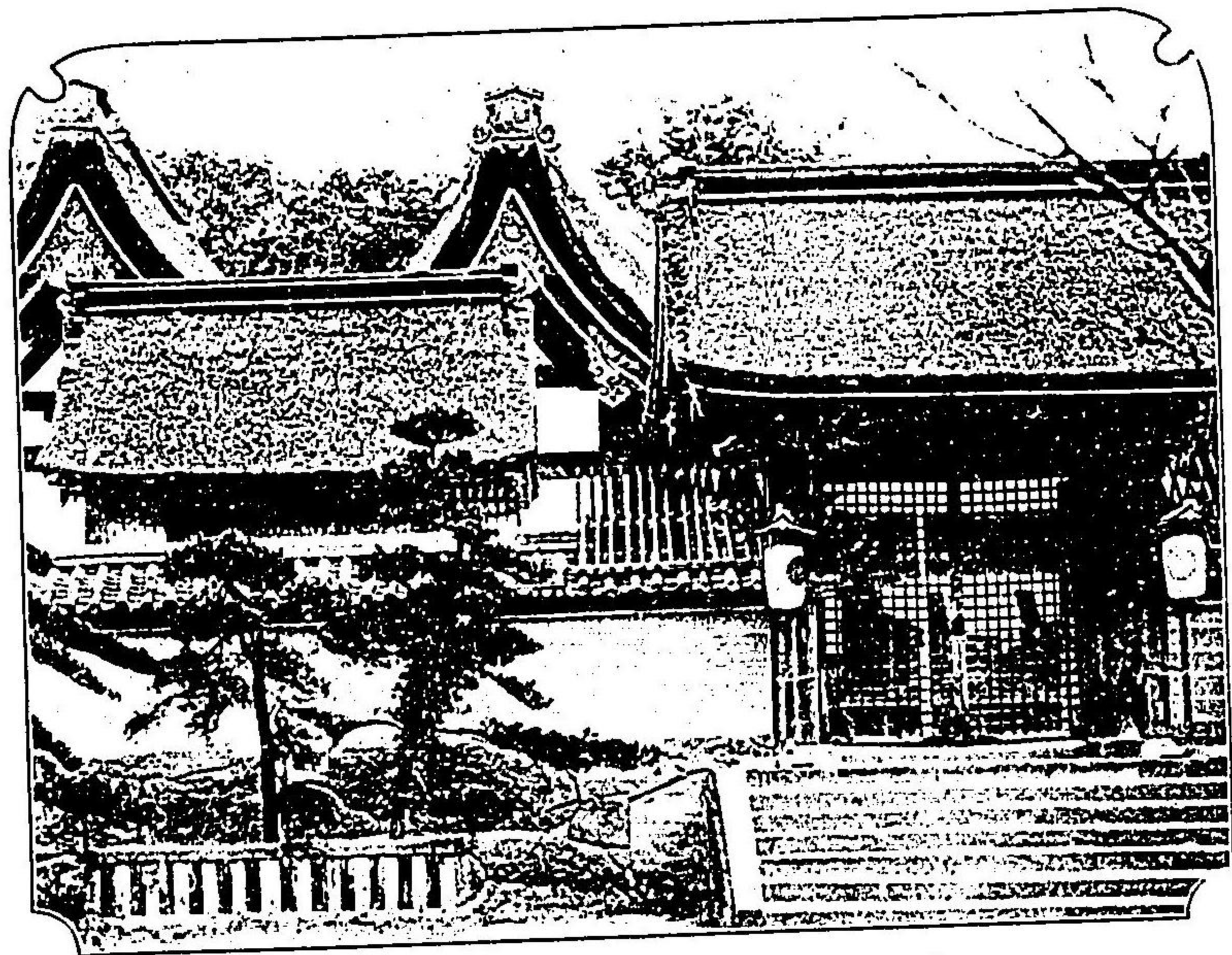
宇 佐 神 宮 苑



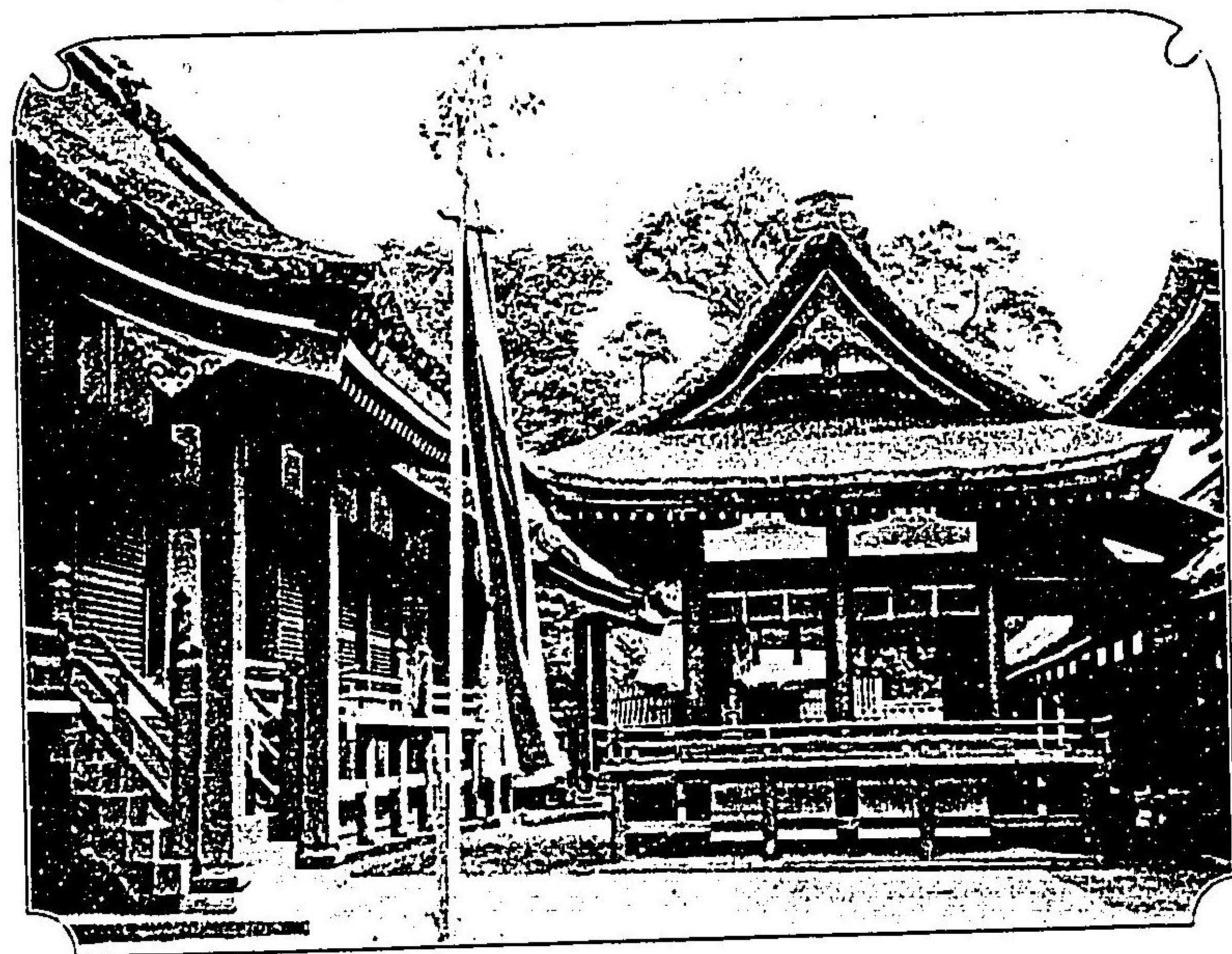
宇 佐 神 宮 吳 橋



宇 佐 神 宮 西 大 門

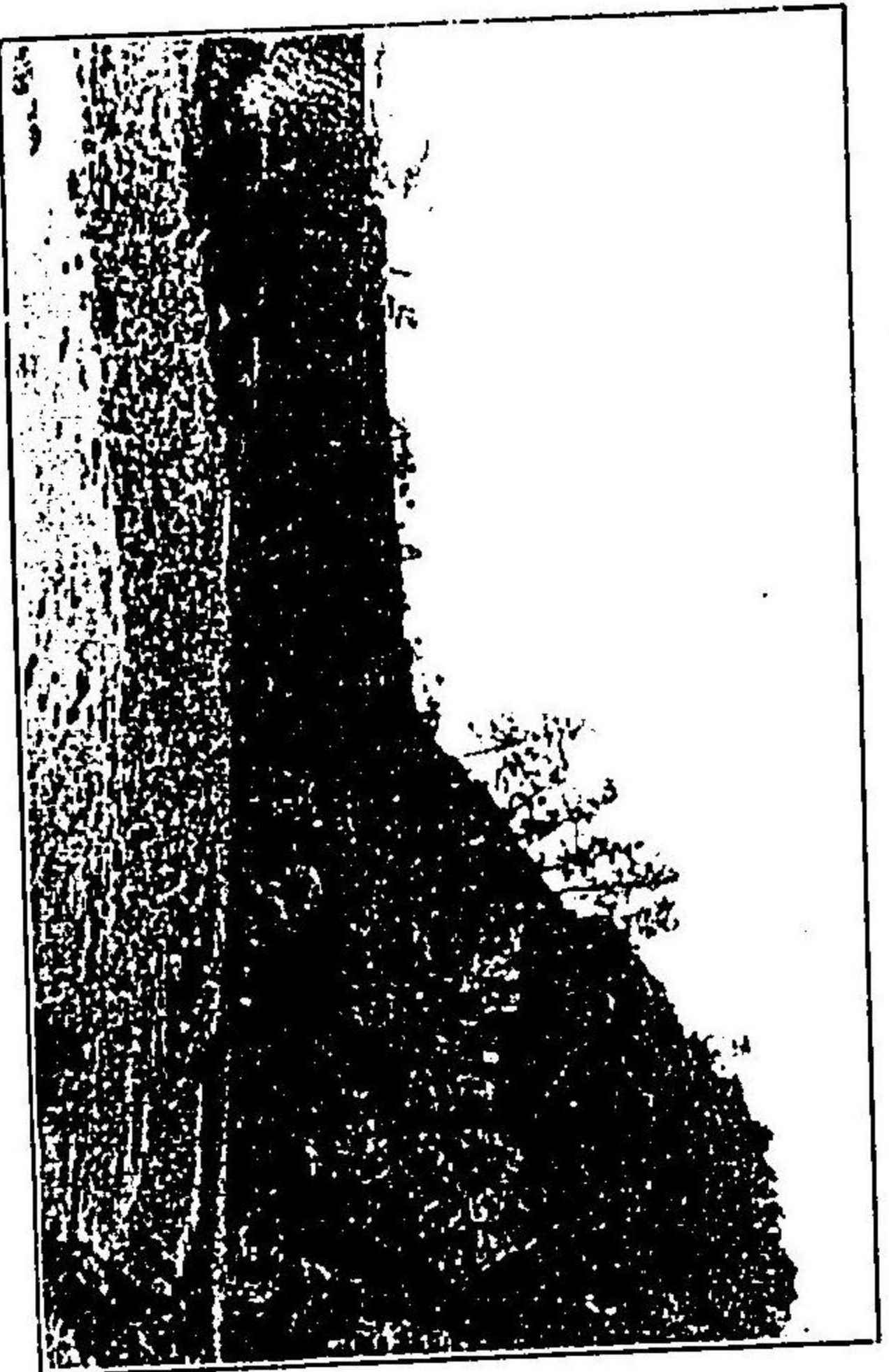


宇佐神宮中西門及勅使松

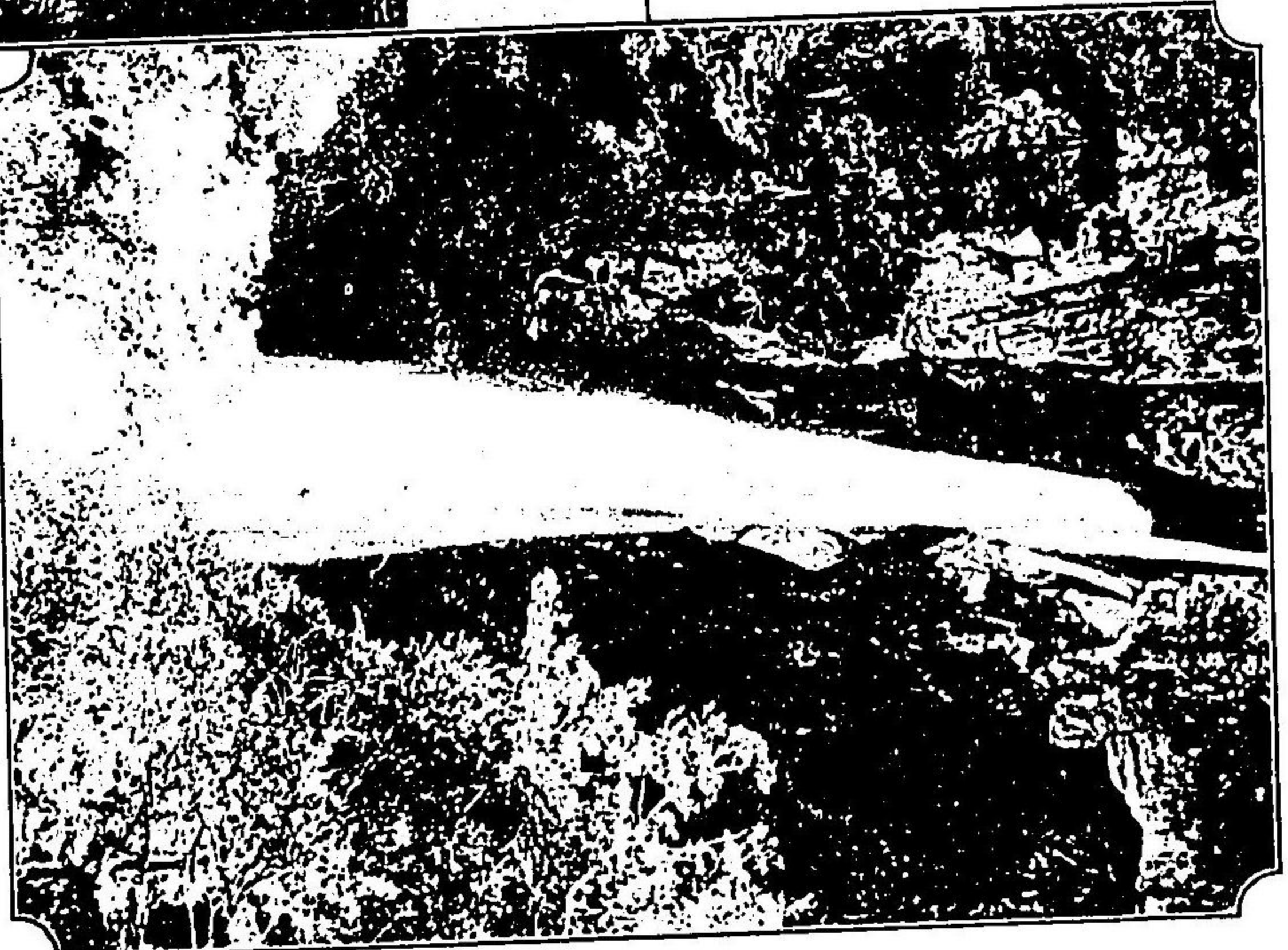


宇佐神宮本宮

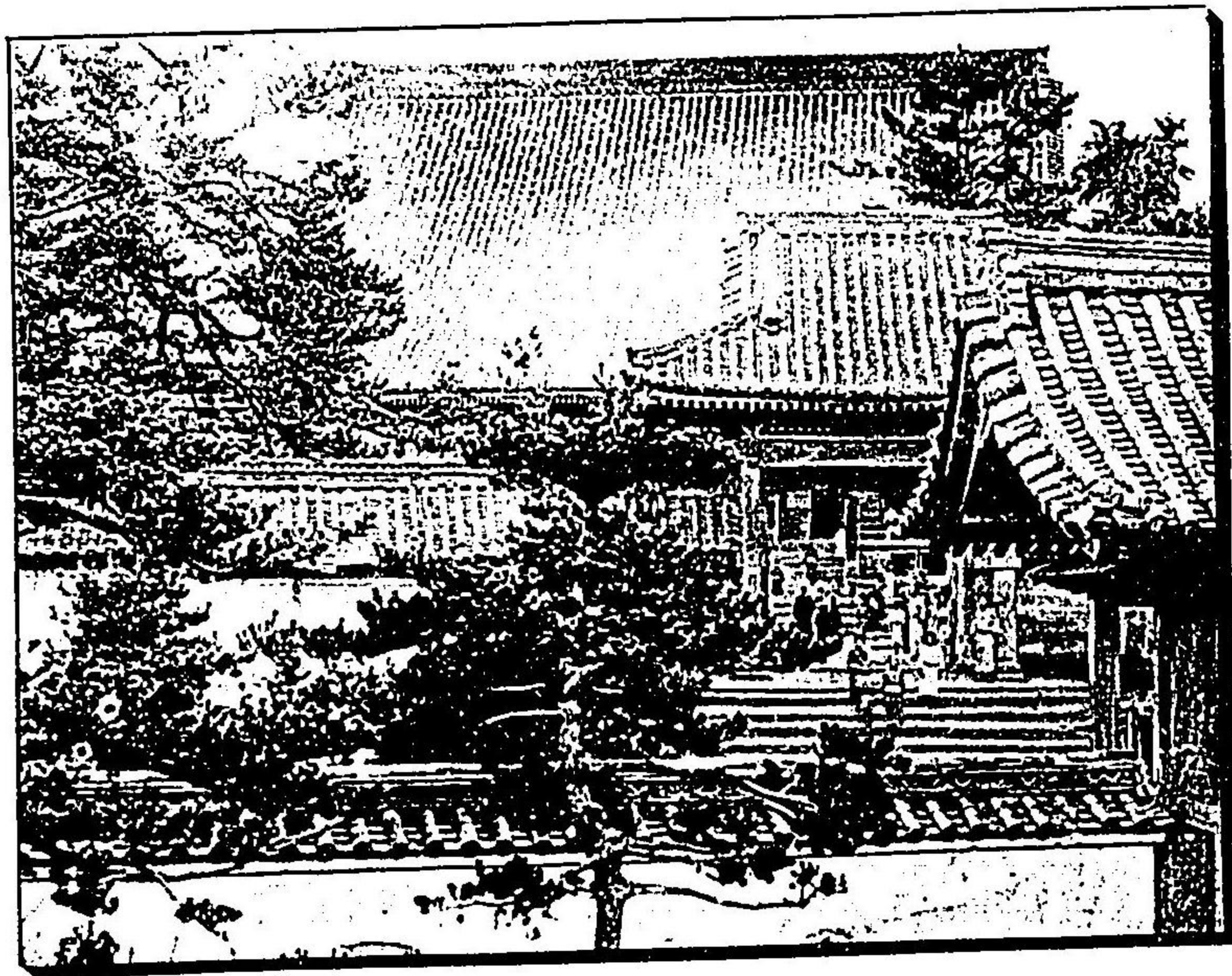
社 神 垣 妻 社 縣



田 鹽 村 戶 封



布 藻 ノ 屋 帷 西 村 内 院 南



院別市日四派寺願本宗真



景ノ門山院別市日四派谷大宗真

浦村(宇佐停車場)よりは九鐵線の開通せるあり其の他西國東郡高田町より長洲町を経て下毛郡に通ずるの縣道及び縣費支辨にかゝる速見郡立石町より長洲道、玖珠郡森町より長洲道、安心院村より長洲道、西國東郡高田町より四日市町道等なり海上の交通は馬關大分間航海船の日々長洲に寄港するなり其の他時々大分四國等の航海船等あり本郡は伊勢大廟に次げる第二の宗廟宇佐八幡宮鎮座の地にして古くより國史に顯はる

神武天皇紀に行至筑紫國菟狹、時有菟狹國造祖號曰菟狹津彦、菟狹津媛、乃於菟狹川上、造一柱、臆宮、而奉祀焉、云々神代記に葦原中國之宇佐島云々古事記に豐國の宇佐云々肥前國風土記に昔者、纏向日代宮御宇天皇誅滅球磨噲噲之時、天皇在豐前國宇佐海濱行宮、勅陪從神代直、遣此邨速來村、捕土蜘蛛云々同天皇在宇佐濱行宮云々舊時國造本紀に宇佐國造、榎原朝、高魂尊孫宇佐津彥命定賜國造云々天神本紀に天之降命豐國宇佐國造等祖也、云々延喜式豐前國宇佐郡云々等とあり

往古は平重盛の領する所なりしが平家滅びて大友氏に移り大友氏亡びて黒田、細川、松平(杵築藩主)諸侯相續て領有し其の後復た中津藩、島原藩及び小笠原加賀守、幕府等の分轄するところとなり以て廢藩置縣に至れり明治四年小倉縣に編入され同九年小倉縣の廢せらるゝや福岡縣の管轄となり同年八月三十一日更に下毛郡と共に我大分縣の管轄に歸せり

宇佐郡

九鐵四日市驛（申津より八哩）より南東に向つて進むこと八合許にして四日市町に出づ郡役所、警察署、小林區署、乙種郡立農學校、共立四日市銀行、柳ヶ浦銀行出張所、二十三銀行出張所等あり戸數五百八十、人口三千一百四十六を有す旅宿の重なるものは奈良屋、唐戸屋等にて京屋、豆腐屋、等に次ぐ町の南端に巍然として雲表に聳ゆる二個の大利あり東西兩本願寺の

◎九州別院

は即ち是れなり事跡考に依れば東別院は元貞勝寺と稱し天正年中（初年紀元二千

二百三十三年）渡邊藏人入道專譽（渡邊光の孫）開基の道場なり養孫正願の代元和の度東本願寺宣如上人より寺號木佛御影等申受け御堂建立歸依の門徒二千餘軒に及び宗門頗る繁榮を極めしが第八世宗順身持不行跡の上西方改派相企て騷動差起り寛保三亥年（紀元二千四百六年）御裁許遠島に被二仰付一寺跡は公儀へ被二召上一一翌延享元年貞勝寺の跡敷地共東本願寺へ被下置本山掛所御坊と致す役僧差下し輪番被二付置候也云々とあり之れ東別院の濫觴にして其の後改派の僧俗西本願寺に乞ひ更に一寺を建立せしもの即ち西別院あり東別院は素と壯大無比の伽藍なりしに御許騷動の時悉く灰燼に歸し遂に舊觀に復せずといふ惜べきなり。四日市より北十數丁にして八幡村大字乙女字黒川に

◎郷社乙咩社

あり宇佐八箇社の一にて今宇佐神宮攝社に列せらる祭神は、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇、田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神、日本武尊、仁德天皇、天津兒屋根命なり

由緒に云 欽明天皇御宇（御治世紀元二千二百年より千二百三十年迄）荒域潮之御降臨詔國靈驗被爲

有神靈其後 元明天皇御宇和銅三庚戌年（紀元千三百七十年）創建す田心姫神以下三柱は 淳和天皇御宇天長九壬子年（紀元千四百五十二年）奉 鎮座宇佐神宮造營使香山宿禰永貞卿之に關す云々

同社より西行六七丁同村大字森山に

◎安樂院

あり宇佐宮成大宮司家の菩提所に於て最も古刹なり門頭に宇佐大宮司公通の墓あり（墓銘安樂院殿關西先守護豐筑對三州大守天宮公通大居士）宇佐氏の系圖に依れば天養元年（紀元千八百四年）十一月二十七日賜大宮司官符、治承四年（紀元千八百四十年）七月十五日再補、敍三正三位

太宰大貳、受三領豐州筑州對州一叙四位、之時、改三宿禰爲三朝臣元曆年中緒方維榮等惡行後奉三造立神殿、紛失黃金封之平田別府等開發云々と之に由つて是れを見れば當時宇佐公通は居を森山村に構へ豐筑對三州を支配して威を鎮西に振ひたるもの、如し傳へ云ふ豐川、驛館、八幡、四日市、糸口、高家、天津各村を貫通し千餘町歩の田面に灌漑する現今の平田井路は公通の開鑿せしものなりと。夫れより西に五丁糸口村大字下時枝字芝原に

◎善光寺

あり傳へ云ふ天德二年（紀元千六百十八年）光勝空也上人開闢の地にして 推古天皇の御宇願轉二年（願轉は九州年號にて或は煥轉に作る推古天皇七年を元年とす）本多善光天皇より佛體を信州に守護し歸り佛願によりて更に三體に分ち一は信濃國一は出雲國一は豐前國に飛來し

宇佐郡

給ふ云々と以て其の靈域たるを知るべし。更に西南十餘町にして長峯村大字佐野に
◎郷社大根川神社 あり宇佐八個社の一にて魯田別尊を祭る創立由緒等に至りては更に記録口
碑の徴すべきものなし。同社より凡十丁ばかり南すれば大字清水に

◎清水寺 あり夫木集に

宿を出て尋ねてゆかん清水寺名に違はずは住やとまるを

と詠せしは即ち此寺にて養老元年(紀元千三百七十七年)僧仁聞の開基せしところなりといふ

縁起に云 養老元年仁聞菩薩歴遊到此山、見山形高懸翠巖幽邃而一條清泉湧出巖中、乃建三立

一精舎、(中略)兩豐太守平重盛、曾仰信東山清水寺觀音自在菩薩、遣家臣彌兵衛者、造營七

堂大伽藍、寄捨木部、清水、里水三邑、以宛齋田、又命名工一樹青塔於東麓、以爲永衛護

隣垣之驗也(下略)

中古の兵亂に際し梵宇殿堂悉く荒廢に歸せしを其の後木下家定の子出雲守宗連再興せしものなりと
宗連父子及び小松内大臣の墳墓寺内に在り内府の墓は家人等遺骨を收めて此地に葬りたるものな
るべしと傳ふ

小笠原長勝清水寺記に云 幾秋の露霜に刻みし文字もあとなくなりししるしあり案内する人にと
へばそのかみ小松の内のおとこのしるしぞといふ誠や此の君は平氏の正嫡にて當國をしるよしし

て世に賢き名をも殘し唐國まで知りつたへ侍りし人とおもへば我がきつる袖の露をさながらの手
向とすそれより下つたかに宗連と云ひし人父子の蹟あり吾れ幼き頃見聞きし人にて幸ならぬ世を
遁れ誘ふ水にいなび難くて此國に來り年久しくして終りをとられし(中略)此面彼面深き木陰よ
りの流を質になして庭にたへ此の水を便として心細くすみなすもねきぞ事たと見えて山井庵
と號せり嶺つゞき見るに折からなかばの冬なれば山の紅葉は皆散りはて、梢さびしくましろの一
群も面かげにそふばかりなり露時雨まなくしぐれて狩の袖もしほれ侍れば鷹人かへさをいそぐえ
もわすれがたき所のさまなれば口ずさみて主の大徳にあたふ 源長勝

住人の心も清し山の井の水を便りに結ぶ菴は

清水寺より南東に向つて七八合横山村大字上元重に

◎小倉池

あり周圍一里水面浩渺宛然湖の如し慶長十二年(紀元二千二百六十七年)大旱に遭遇

せしより時の領主細川侯長く旱害を除かん爲め家臣長岡内膳、杉生佐兵衛、大庄屋麻生、福海寺庄

屋元重久右衛門、四日市源三郎等に命じて開鑿せしめたるものなりと云ふ。小倉池より十餘丁東北

に向つて進めば再び四日市町に出づ夫れより國道を東すること凡を八丁ばかり驛館村大字辛島に

◎郷社泉神社

あり 仲哀天皇、神功皇后、應神天皇、仁德天皇を祀り宇佐八箇社の一なり

社傳に云 孝德天皇大化四年(紀元千三百八年)に辛島勝乙咲奉隨大神の教宮柱を立てると云ふ又

宇佐郡

今の社殿は爾後建換致と雖ども年月不詳此社の側に有寶池大神御靈行之昔此所に御遷座あり御手及口足洗濯之時神奈志津媛來て池泉を汲爲神酒奉大神依而化して爲酒泉古老傳に曰く神奈津媛奉神酒之時大神以御指窪地傾杯殘滴の水涌出て成泉云々八幡本紀に曰く八幡宮宇佐に現はれぬ以前に靈明ありし勝地なり云々

尙ほ國道を東すること八丁許にて豊川村大字樋田に

◎郷社郡瀬社

あり之れ亦た宇佐八箇社の一にて 仲哀天皇、神功皇后、應神天皇を祭る由緒に

和銅元年（紀元千三百六十八年）戊申御託宣に依りて宮柱を此地に奉草創と見たり。夫れより驛

館川の船橋を渡り一二丁進みて左折すれば松林の中に

◎縣社鷹居八幡神社

あり宇佐神宮の故趾にして今八箇社の一に數へらる祭神は 仲哀天皇、神功皇后、應神天皇の三柱にて 元明天皇和銅五壬子年（紀元千三百七十二年）の創立なりと云ふ

驛館川の清流に枕み四望豁然風光絶佳の地なり明治十四年七月境内に招魂社を創立す。同社より復

び國道に出で十丁ばかり南行すれば宇佐町の内に八箇社の一なる

◎村社小山田神社

あり八幡大神を祭る高竈神、間竈神を配祀す之れ亦た宇佐の故趾にして明治十一年宇佐神宮攝社に列せらる

◎宇佐宮縁起に云

元正天皇靈應二丙辰年（紀元千三百七十六年）於鷹居瀬社託宣此處波路頭爾志臣

往還乃人無禮奈利尤此等事永波甚愆志小山田乃林爾移住卅年度願給布者大神朝臣諸男辛島勝波豆米等小倉山之坤小山田之林爾奉造神殿令祭祀云々御征伐之時自此社而御進發也同七癸亥年從彼兩國版座

本社小山田林畢云々

同社より南行十五丁西馬城村大字矢部に

◎孝女市之墓

あり市は矢部村彌平の妻にして資性温良淑徳に富み能く姑夫に事ふ夫彌平癩疾に罹り姑亦た眼を病み家産日に傾きて遂に極貧に陥ると雖も市の心鐵石の如く奉養至らざるなし彌平其の心情を察して己を捨て他に再嫁せんことを勸む市流涕謝して曰く妾君と壯健の日に相見え一朝君の病痾に罹るを見て去らば世人妾を何とか云はん貧苦樂は素より命のみ妾豈に之を厭はんやと倍々苦節を盡す文化四年（紀元二千四百六十七年）藩主奥平昌高備臣野本良右衛門をして碑銘を作らしめ又藩士等に命じて詩歌を募り公自らも長短歌を詠じて其の善行を表旌す

孝婦伊知碑銘

孝婦伊知夫、發惡疾、側伊知侍養備至而年少、將離昏、謂曰、自視猶厭、何況他人、天特刑餘、無以累卿爲、對曰、君之不幸、妾之不幸也、平而合、疾而離、惡用妾矣、尋叔同病、姑亦盲、田產數十畝、已亡三二矣、伊知耕織兼作、晝夜拮据、又伐樵採薪、罌之菟狹市、日二次、而後四口能餬爲、後會歲大雪、樵路不通、夫益危篤、計無所出、乃易一耒於鹽糞、以乞粟、支五日、土俗食

宇佐郡

者、以鹽賀正於隣里、蓋欲自別於乞兒也、已而夫死、竭力營葬、人曰伊知嬖未可以去耶、答曰、盲姑何恃終餘年、且以姑視之、雖叔亦其子也、如之何、棄之令飢也、絕無嫁意、敬養弗衰、著稱鄉黨、有司以聞、先君龍源公嘉之、命賜銀與麥、曰絕則復告之、復終身其家、携酒來賀、村民爾醴贈爲、伊知望府、拜伏感泣久之而後飲客、遂以明和五丙子十一月十二日歿、享年六十八、農人彌兵其夫也、菟狹祠戶傳七其父也、上矢部其村也、村之化人場其密夢也妙喜其法諡也、

今公儉用而惠民、首勸獎孝弟於躬行之餘、啓之子不祀、繼昭先君之舉、使其外親某子、襲稱彌兵後之、還賜舊田宅及耕牛佃器、又表其墓、命臣晁光文之、晁光謹據當年里長所錄、上叙之、鑿以銘、銘曰健順爲賢、貧困砥行、愉婉奉承、受命獨正、勿道草萊之微、實爲生民之規、旌兮嗣兮、千穰手匪爾私、

文化四丁卯冬中津文學臣野本晁光奉 命謹誌

復び歩を返して懸居社の前に出で三丁許東すれば

◎古表社眞名井及古要社眞名井

あり大なるを古表社眞名井とし小なるを古要社眞名井とす放生會の時宇佐宮の行事ありし地なりと傳ふ。尙ほ一丁東すれば宇佐町の西端に

◎兎士塚

あり放生會記に埋隼人頭兎士塚歟とあり又た塚の傍らに

◎百木夫社

あり百木殿とも云ふ傳へ云ふ養老年中宇佐の神軍を以て大隅日向の隼人を平げし

時此處に其の亡靈を祭りたるものなりと

◎宇佐町

戸數六百五十二人口三千八百二十を有し一小市街を爲せり重なる旅宿は香下、若屋、岡本屋等にて名物には宇佐餠、朝鮮餠等あり、宇佐町に入りてより東すること七八丁大なる鐵の華表あり俗に鐵の鳥居と呼ぶ之を潜れば吳橋(元和元年即紀元二千二百七十五年時の領主細川豊前少將忠利の寄附)あり橋を渡れば宏壯なる樓門あり西樓門又二王門を云ひ元和五年細川忠興の建設したるものなりとぞ門内に雲慶の作なりと云へる仁王を安置しあり門を入れば即ち神苑内にて旅館商家等の軒を並べたる部分を出店と云ふ出店より二三百歩にして池の端に出づ歌仙紀貫之が

豊國の菱の池なる菱の根をとりてや妹が袖ぬらすらん

と詠せし菱形池之れなり池中の中島に護王神社(和氣清磨を祭れり貴族院議員本田親雄氏の國の爲いのりし人の眞心もこゝろにしのお宇佐の神垣の詠あり)天満神社、繪馬舎、木匠祖神社、稻荷神社、水分神社等あり征清紀念碑(小松宮彰仁親王殿下御筆)の前に能舞臺あり安元々々年(紀元千八百三十五年)の創立にして元和元年細川忠興大に修繕を加ふ本宮へ能樂奉納を始めしは遠く養老元年(紀元千三百七十七年)九月十九日本宮大念佛會の日にして今に至るまで年々九月廿一日を以て舉行せられつゝあるなり少しく進みて左折二三十歩皇族下馬の札あり下宮を右方に見石級を築づること二三百歩華表あり一の鳥居と云ふ慶長十五年從五位右衛門大夫木下延俊(日出侯の祖)の寄進せしも

宇佐郡

のなり西大門を潜れば即ち上宮境内にて西中門の左側に数株の松あり勅使松と云ふ玉垣の外部に在る稍大なるものは文化元年(紀元二千四百六十四年)飛鳥井中將勅使として参向の時京都より鉢植の松を持ち下り植栽せられしもの又玉垣の内に在るものは元治元年梅溪中將勅使として参向の御京都より鉢植の松五株を持ち下り植栽せられしものにて二本は枯死し一本は西中門の右方なる手水鉢の傍らに移植せり玉垣は梅溪中將の家臣鹿島富三郎直榮の奉納せしものなり因に記す享保以前は朝廷御即位其の他事あることに勅使を参向せしめられしも以降は甲子の年に限り参向せしめらるゝ事となりしと云ふ西中門右方の手水鉢は享保年間津大宮司の先代公著、宇佐宮の東方大尾山の嶺より移し据へたるものなりと云ふ西中門の内に水盤あり神殿の雨水樋を通じて此中に落つ水盤の二字を刻せり傳へ云ふ文化の頃我國著名の書聖鳥石葛辰の書するところなりと南樓門の階下に天復の古鐘を吊るせり天復元年は唐の昭宗皇帝の十三年即ち我紀元千五百六十一年に當れり而して其由來に就ては更に記録口碑等の徴すべきものなし

◎官幣大社宇佐神宮

西方の御殿を一の御殿中央を二の御殿東方を三の御殿と稱し一御殿に 應神天皇を二御殿に 比咩大神を三御殿に 神功皇后を祭れり境内古木森々として繁りあひ一たび瑞籬の内に足を容るれば心も自ら澄み渡りて威靈影の如く響の如く不測の神徳を眼前に仰ぐ心地して尊としとも尊とし抑も

本宮は伊勢大廟に次ぐ第二の宗廟と稱し 皇室的の御尊崇太だ厚く其の火災に懼るや山陵に準じて廢朝あり年中の祭祀は極めて多けれども最も盛儀なるを春季の大祭とす元舊曆二月の初卯に當れる日を祭日とせり其の起原は 欽明天皇の三十年(紀元千二百二十九年)二月十日八幡大神御出顯の當日卯の日に當れるに依りてなり 即今宇佐祭と稱して奉幣使参向の例祭三月十八日なるは二月卯の日を陽曆に引直したるものにて此祭典は往昔和氣清曆より始めたものなりとぞ之れに次で盛んなるを放生會とす放生會は 元正天皇の養老四年(紀元千三百八十年)隼人征伐の時大神冥々の内に於て官軍を援け殺戮するところ多かりしを以て其の冥福を薦めんが爲めに請ひ給ひしところなりといふ社殿の改造は古來一定の年限ありしが 王室陵夷し降りて戰國に及びては漸く舊の如くならず後陽成天皇の天正年中には豊臣秀吉悉く社領を沒收し益々衰廢を極めしが文祿二年(紀元二千二百五十二年)國主黒田長政神領七百石の地を獻じ第二神殿を造營す慶長年間國守細川忠興入國の後神領千石を奉り第一第三の神殿を造營す其後松平重直神領七百石を奉り 後光明天皇正保三年(紀元二千三百六年)將軍徳川家光新に神領千石を奉る等の事ありて稍舊觀に復せり大宮司に兩家あり宮成、到津の二氏にして共に宇佐津彦命を元祖とし子孫相續で宇佐の公たり其の後胤に宇佐公牛人と云ふものあり此時初めて大宮司に任せらる是れ其の初めなり此時は田心瓶、漏津姫、市杵島姫三神を齋れり牛人の子押印使宇佐の公池守の時に入幡大神始めて神と顯れ玉ひぬ此後相續で大宮司

宇佐郡

に任じ今に至つて絶えず凡そ大宮司職人の諱には上古公の字を用う是れ宇佐の公と云ふ心を表する
 と也又大神氏は祝職にして比義を以て元祖とす比義の遠孫田磨初めて大宮司に任ず其後五六世大
 宮司職に補せられしとかや社人に三等あり上官中廳分下神人は是れなり古は社家三百五十餘人寺
 家五十餘人都在り四百餘人ありて怠りなく祭禮を奉仕せり大宮司二家の内宮成氏は宇佐氏の祖家にし
 て到津氏は正安元年(紀元千九百五十九年)宮成より分家して企救郡到津の領主たり因て到津を氏
 と爲す是れより神勸更代の制を設け兩家にて六年毎に大宮司の職を勤め來りしとぞ 天皇即位及び
 國家の大事災變等あるときは必ず使を本宮に派して幣帛を獻らしめ之れを告げ給ふ是れを宇佐使
 と云ふ而して即位を告げ給ふ時の奉幣を一代一度の奉幣と稱し其の大使には必ず和氣使五位の人を
 以て之れに充つ之れを宇佐和氣使と云ふ蓋し和氣使は其の祖清磨 稱徳天皇の時に使を神宮に奉じ
 國家に大功ありしを以て其の子眞綱より以來子孫相繼ぎて使命を奉ずることとはなりしなり 醍醐
 天皇の比より三年に一度更に恒例の使を發せられしが 後伏見天皇の頃より中絶し 櫻町天皇の寛
 保四年(紀元二千四百四年)に至り更に之れを再興せり
 上宮鎮座の地を小椋山又龜山と云ひ大尾山、西山と並び峙つて菱の形を爲せるより三山を併せて菱
 形山と稱し又た之れによりて山麓の神地を菱形池とは呼ぶなり
 造營日記正長元年(紀元二千八百八十八年)大内氏參宮の處に宇豆高山とは小倉山を申とかや今の上

宮之れなりとあり又元慶二年(紀元千五百三十八年)日本紀竟宴歌に得三舉田天皇二右大臣源朝臣多
 菱形のうくらの山ははるけきを君をまゐるにかけもはなれす
 とあり又耕雲か龜山を詠じたる歌に曰
 末の世は君にひけとか龜山の宮木を神はまもりおきけん
 宮つくり昔にかへる龜山は浮木にあへる御代のためしか

末社には住吉社三御殿 北辰社 一御殿 春日社 北辰社の西 若宮殿 西大門の外に在り淳和天皇長元元年即紀元千四百八十四年
 皇東宮下宮の後に在り龜山殿 西大門外に在り 宇佐祖神社 元御警殿にして 黒男殿 北大島居の内在り南中樓門 樓上に仁
 女 道雅郎子尊を祭る 阿蘇大明神 神を祭る等あり
 本殿の直北に當り山麓に下井の水あり紺碧玉の如く極めて清冽なり俗に御心の水と云ふ、池中の中
 島の繪馬舎は元大貳堂と稱し康和年間(初年紀元千七百五十九年)太宰大貳正二位權中納言大江匡
 房卿の建設にかゝるものなりとぞ
 本宮の寶物は其の數非常に多く一々枚舉に遑あらず今其の重なるものを摘記すれば左の如し

八幡本縁 十六卷

正和二年(紀元千九百七十二年)八月神宮寺學頭法印神呼撰應永廿五戌年紀元二千七十八年
 大内義弘三男從四位修理大夫多々良盛見天台宗徒法印信譽上人に命て書寫せしめ奉納せるもの
 宇佐郡

大分縣案內

空海畫像 壹軸 (知證筆と云傳ふ)
 不動の畫像 壹軸 (同上)
 紺紙金泥書法華經 八軸 (菅公筆と云傳ふ)
 一條天皇勅作大刀 一口
 太刀(宗近作) 一口
 太刀(天國作) 一口
 太刀(眞守作) 一口
 太刀(行平作) 一口
 太刀(貞宗作) 一口
 太刀(當麻の作と傳ふ) 一口
 太刀(小鍛治宗吉作) 一口
 太刀(友里作) 一口
 太刀(無銘) 一口

細川忠興家臣田代善右衛門眞綱此刀を帶び全國を武者修行し寛永元甲子年(紀元二千二百八十四年)正月十二日兄の仇を討ち血液附着の儘奉納せるもの

大分縣案內

刀後(鳥羽天皇勅作) 一口
 刀(神息作) 一口
 刀(正宗作) 一口
 太刀の帶取(源義經の所帶と云傳ふ) 一個
 劔(無銘征西將軍懷良親王御劔) 一口

緣由に曰正平十三年(紀元二千十八年)將軍宮爲御代官權少僧都瑞參向之時奉納也然者前天正十四年(紀元二千二百四十六年)至薩州大相國秀吉公御動座之刻久野四兵衛尉雖取置息治左衛門以敬神之義奉返畢慶長二年(紀元二千二百五十七年)三月廿九日黒田甲斐守百留治郎左衛門重直頼當(春日の作) 一個
 陵王假面 一個
 納曾假面 一個
 翁假面 一個
 天復古鐘 一口
 寶物とは別種にして最尊重なるは
 黄金の御正體 三個
 宇佐郡

御幸せしなつはきのふの淺瀬川秋立つ波の夕すゝしも
○月瀬川螢 日野大納言資枝卿
岩かねに影ちる波の月の瀬をとめて螢もよるの川風

○馬場櫻花 同
櫻さく木陰いくたひゆきかへり駒もこゝろや花にひくらん
大馬場の西出店の裏に

○極樂寺 あり 聖武天皇の勅願にて神龜年間に造らせ給へる彌勒寺の本尊たりし一丈六尺の彌勒菩薩及び一丈の阿彌陀如來を安置し髮結の曼荼羅、虎頭枕等希有の寶物を藏す髮結の曼荼羅は延寶二年(紀元二千三百三十四年)僧空念法師佛法結縁の爲め八萬四千人の頭髮を以て結成せしものにて意匠の巧妙なる圖畫の緻密なる文字の遒勁なる見る人感嘆せざるはなし延寶六年 後水尾天皇の御覽に供し其の後宇佐神宮神庫に秘藏され居りしを明治維新神佛判然の令出づるに及んで極樂寺の住職國東翻迷申請けて寶物と爲せり明治十六年には 英照皇太后の御覽に供し奉り三十年六月亦 今上天皇陛下の御覽をも蒙りたる天下無比の珍寶なりとす、神苑より東すること凡そ四丁大尾山の山嶺に

○大尾神社 あり松樹翁鬱風光絶佳なり祭神は八幡大神にて天平神護二丙午年(紀元千四百

二十六年)の冬より神護景雲元丁未年に至る兩年間の神託符の旨を守り宇佐公池守造管押領使となりて大尾山の嶺を伐り拂ひ宮殿を造立し同年六月七日神體を崇鎮し奉る是れ即ち勅使從五位下右近將監和氣清應神託を蒙りし地なり延暦元壬戌年(紀元千四百四十二年)本宮に遷座せられし朝家鎮護の遺蹟を長く尊崇せしめん爲め依然八幡大神を祭祀せるなり今宇佐神宮攝社に列せらる、神苑より北凡そ三丁程隔て

○大樂寺 あり 後醍醐天皇御旨、懷良親王御筆、惠心僧都筆淨土曼陀羅、宋帝筆十六羅漢大涅槃等の寶物を藏す

豐鐘善鳴錄に云 釋道密一名光仙、久寓南京西大寺以律藏著稱、元享中遊化竹斯、詣宇佐祠、時祠官宇佐公連奏上、新建醫王山大樂寺、延密爲開山云々宇佐公連は到津家の祖にして元享元年は紀元千九百八十一年なり

猶北に二三丁
○圓通寺 あり 寛元年間の創建にして著名の古刹なり神作聖觀世音像、開山榮尊禪師自作の像其の他種々の寶物を藏す

豐鐘善鳴錄に云 豐前國圓通寺神子禪師諱榮妹平氏、父曰康賴、母初夢吞朝日而有孕、在胎動搖三十餘日以建久乙卯(紀元千八百五十五年)六月二十六日生子筑後州三潯莊、口放異光、一宇佐郡

七日父母畏避竄卷、牛馬不陷、塵盆不灑、有異煙、抱之歸家、師七歲、從永勝寺嚴琳和尚、薙髮、琳是建仁千光族弟也、字師曰口光、徵生辰之瑞、云々寛元初、入豐創宇佐圓通寺、又勅肥前報恩、筑後朝日、筑前薦福、豐前妙樂、俱爲第一世、文永九年(紀元千九百三十二年)十二月念八日、現疾、恬然順寂、闕世七十八、門人火浴于役官河旁

◎地藏院

宇佐町より國道を東すること凡そ八丁字伏田より右折して十丁許り進めば字日足にあり御許山不動堂に安置しありし僧仁開一刀三禮の作なりと云へる木目不動の像あり奇巧譬ふるに物なし、宇佐町を距る東南凡一里餘にして

◎馬城峰

あり又大元山或は御許山と云ふ山上に大元神社あり祭神は宇佐神宮同體なり各石體にして一は高さ三間ばかりあり山嶺磐石の内に靈水あり廣五寸深一寸五分大雨に増さず大旱に減せず大寒に氷らず汲みても盡きずと云ふ昔眞言宗の僧坊六區在り後三區となりたりしが明治の初年長州の脱兵花山院侯爵の命なりとて四日市陣屋及び東本願寺別院其の他に放火し大元山に櫛籠りしを程なく長兵追撃し來り平野四郎、藤秀桑、原範造等を斬つて四日市に梟首す此時一院六坊悉く兵燹に罹り今は僅かに其の跡を存するのみ宇佐宮縁起に依れば八幡大神御示現の處にして大宮司初拜の時は必ず此山に詣つとなり參拜道は宇佐宮南石段を下り直進すれば五十丁にして七山頂に達す、宇佐町の中央旅館香下の横より北に折れて直進すれば一里許にて

◎長洲町

に出づ戸數千五百、人口七千六百四十三あり之に隣接せる柳が浦村を合すれば戸數二千餘人口一萬以上に達すべし商業の繁盛なること郡中の首位に居る柳が浦村には九鐵線の宇佐驛あり長洲港には大分馬關間航海船の日々寄港するあり海陸の交通頗る便利にして別に速見郡別府町(里程十六里)間の定期馬車(運賃七拾五錢)ありて汽車に連絡す警察分署、長洲銀行、長洲貯蓄銀行、郵便電信局、柳が浦銀行等あり旅館の重なるものは驛水館、兒島屋等にて共に柳が浦村に在り。長洲町より高田道を東すること約一里和間村字浮殿の海中に

◎郷社和間神社

なり宇佐宮放生會の神幸地にして風光頗る明媚四顧の景物一つとして詩料ならざるはなし。宇佐町より西南凡そ六里兩川、東院内、院内各村を経て南院内村字西椎屋に

◎西椎屋瀑布

なり水源玖珠郡森町福熊嶽の麓なる日出生村より出で瀑布を距ること一里餘なり實に世に稀なる大瀑布にして銀河九天より落下するかと疑はれ怪聲地を震ひ破碎雪の崩るゝが如く真に壯觀を極む遠帆樓詩集西椎屋瀑布の引に曰く

椎屋瀑布在惠良瀑布屋村山中蓋有雌雄云余將往觀焉子安導兒仁及門人數輩從同發、踰三十六盤嶺、行數里、遇雨至小河内神祠而憩焉、祠後有蹊、極狹荆棘沒肩、葛蔓蔽面、不辨咫尺、翁傘潛身病瘦而行、一轉益險、乃棄傘兩手摸索、前者顧後後者跟前行半里餘、莽窮而沙忽聞轟然有聲、仰瞻則斷巖千仞、銀河倒瀉、巖石噴吼、噴雲吐烟、倏而雨、忽而雪、奇寒

宇佐

微骨、不能久停焉、子安抱巨木來、橫澗爲橋、日達前岸、則可窺全勝、乃先渡焉、余欲踵、股慄不能、願從者有阻色、子安田、怯、乃接渡而渡、有實兀臨淵者、曰此爲三拜石、高三四丈、上可座數十人、鑿石爲級、苔滑油々然、俯伏而上焉、俄見長風鼓壑、萬籟齊鳴、瀑布怒號、若蛟龍攫雲飛降者、皆相視爽然失色、魄褫胸悸、然不敢口心與目謀、逡巡而退、于時安政二卯仲秋二十一日也

西椎屋より東に向つて往くこと四里餘明治村大字福貴野に

◎福貴野瀑布 あり水源は速見郡太平山より出で瀑布を距る一里なり東西椎屋の如く太だ雄大ならずと雖とも其の景色の美なること前者に數倍せり龍泉寺の後へに在るを以て又龍泉寺の瀧とも云ふ寺の後林松樹の陰を觀望の好位置とす渡邊重春翁の歌あり蓋し實況なり

水上の水は水とも見えながら落つるは雲と烟なりけり

見るか内にひたりみきりにたわひなり嵐さきの瀧とあやしき

夫れより北行二里許龍王村に

◎仙岩寺

あり土俗仙の岩と呼ぶ山腹の岩の間に建設せる古刹にして養老年間(初年紀元千三百七十七年)の創建なりと云ふ。夫れより東に十丁安心院村大字妻垣に

◎縣社妻垣神社

あり 應神天皇、比咩大神、神功皇后を祭る宇佐八箇社の一にて境内閑雅幽邃

なり

由緒に云 天平神護度の初年宇佐八箇宮一柱廳宮へ行幸ありし駐蹕の社にして同年行殿創立勸請

なり一柱廳宮を本宮と稱し境外の地に在り當社を下宮と唱ふ云々

夫れより津房谷を上り南東に進むこと二里許津房村大字東椎屋に

◎東椎屋瀑布

あり水源を速見郡塚原山に發す瀑布を距る二里許なり土俗西椎屋を雄瀧東椎屋を雌瀧と稱す直下數十丈岨角を怒濤して珠玉を跳らせ雪花を翻す其の壯觀敢て雄瀧に譲らざるなり碩儒協蘭室の記あり其真相を穿つて遺憾なし

椎屋在北豊之野、有瀑布二焉、西爲雄、東爲雌、予之所遊、其東者也、蓋三面峻壁、四類

龜突、高四十丈巔則松檜楓梅雜植、文蔚糾紛、嶽腹光澤淨潔如拭、危絕峭直、紫翠照映、下

則芳卉新苔、蔚然衍布、清氣馥郁、秀發可愛、瀑懸最頂、截經瀝下、勢如奔馬逸駕、如瓶裂

壺倒而沛乎傾瀉者、如舞雪飛霰之生於寒空也、有風觸焉、則蕩搖欹側、如綉帟之飄珠璣之碎、

可謂壯觀矣、聲響所及、山谷互應、殷々洶々、不可細語、潭廣四百餘步、深與瀑高相如云、

鑑光藍色激而成瀾、其委則爭走石間、冽清甘美、石之橫渠上者、皆滑而而平、小者如榻、大

者可坐三十人、近瀑之地、隱霧濕嵐、涼冷徹肌、夏日可績也、距潭處、氣融象辨、好景足斷

焉、予則距巨石、掬流泉、攀嘉樹、蹇芳草、悠爾而望、恬然而樂、飄逸若遺塵、靈者、恍惚若

宇佐郡

入三仙之境者、蓋恨三來遊之晚也、而又、且想三西者之奇、不能三已也、未知、曷日克得三探三其
 境乎、雖三然、既觀三其雌、豈有レ不觀三其雄者三哉、姑記以談、丁巳孟夏下院
 東椎屋より佐田村を經西北凡五里にて宇佐町に歸着すべく又山を越ゆれば三里許にて速見郡北山布
 村に出づべし

因に記す 神武天皇紀に甲寅年冬十月天皇親帥三諸皇子三再師東征至三筑紫國狹狹、時有三狹狹國造祖
 號日三狹狹津彦狹狹津媛、乃於三狹狹川上(今の驛館川)造三一柱臈宮三而奉三饗焉と記せる一柱臈宮
 の舊趾に付ては種々の異説ありて確からなざれと敷田年治著宇佐宮雜徵に「宇佐宮より一里餘西南
 に當り川に沿ひて拜田村と云ふあり川より五六丁許り隔りたる處に小高き松原あり南北に通ひし大
 道の跡存り其處を村人は塔の山足上りと云へり塔の山は臈の山足上りは足一臈の略か又此國に土
 用座頭と云ひて四土用に古蹟などを誦し物乞へる盲僧あり其誦する辭の内に拜田上の宮と云へるこ
 とあり」と記せるは蓋し最も信憑すべき考證なるが如し

第四編

褒章受領者

從來本縣に在りて社會公共の爲めに一身を犠牲に供し熱誠の溢るゝところ事、天關に達して忝なくも
 勅定の褒章を拜受し至榮、身に餘りて一門の譽を顯はしたるものは實に左の如し諸氏の益々奮つて
 至大の聖恩に奉答すべきを念ふは勿論、後進の徒亦た正に其の遺芳に學びて大に努る所あるべきなり
 褒章拜受者人名表

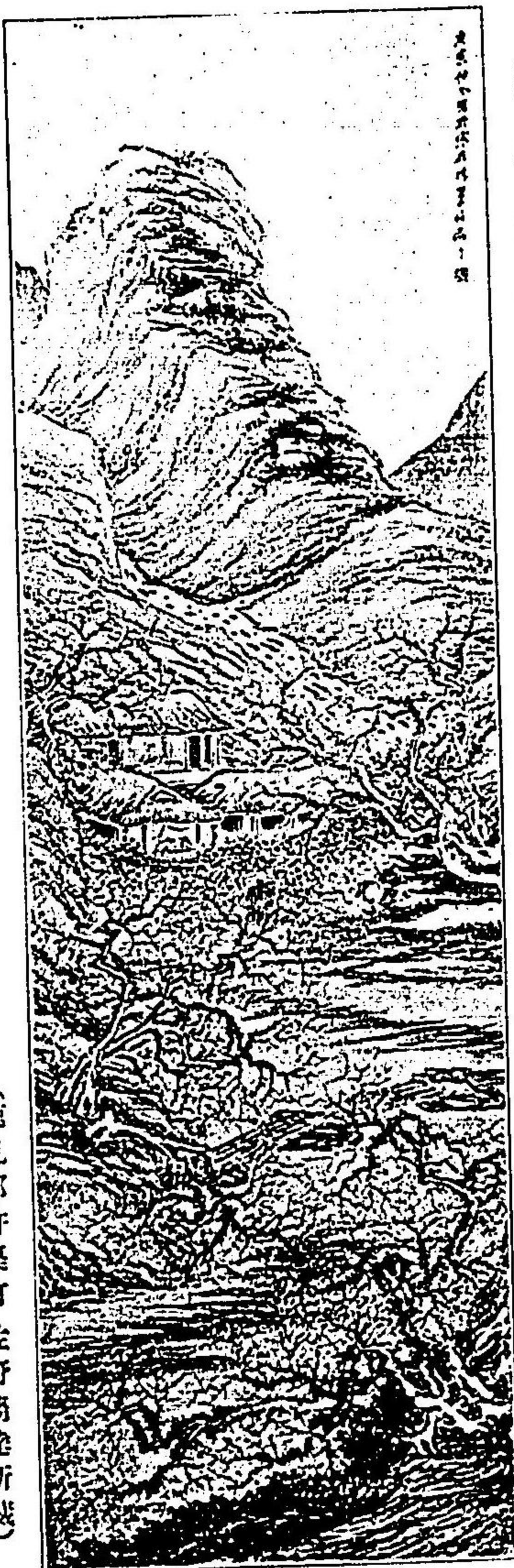
褒章種類	區別	下賜年月日	異	動	族	籍	氏名
紅綬章	人命救助	十八年十一月十三日			大分郡三佐村平民		山村富太郎
黃綬章	海防費納	二十年十二月			同 郡戸次村平民		帆足助作
同	同	同			宇佐郡封戸村平民		水之江 浩
同	同	二十二年三月	死	廿五年十一月十七日	大分郡鶴崎町士族		磯部八郎治
藍綬章	公同事務勤勉	二十一年十二月廿日			宇佐郡宇佐町平民	正七位	南 一郎 平
綠綬章	精實勵業	二十五年十月廿二日		卅年十月十二日死	大分郡大分町平民		辛 島 祥 平

褒章受領者

田能村竹田畫



高橋草坪畫



(速見郡杵築町佐野鶴達所藏)

(大分郡戸次村帆足助作所藏)



大分郡月次村帆足助作所繪

帆足杏雨畫



遠見郡別府町日名子太郎所繪

高橋某坪也

帆足助作所繪

十初めて天地に修理あるを知り乃ち謂て曰く天地は唯是一氣物なり氣外に物なく物外に氣なし一條の妙理宇宙に貫徹して玄界際なく神化測られずと、是より志益々堅く學彌々進む、玄語十餘萬言を著はして陰陽消長の度、氣物融和の道を論じ又贅語を著はして其の餘瀝を盡くす、自ら謂ふ二語未だ性命の理に及ばずと、乃ち敢語を作りて先輩の道を述ぶ之を梅園三語と云ふ、梅園自ら奉ずる節儉にして餘財あれば必ず施す又た常に米錢を貯へ歎歳に貸出し豊年に息を入れしむ倚りて以て飢寒を免るゝもの少からず、此類の德行頗る多く一々枚舉に追あらず、夙に嘉遯を尙む諸侯の招聘屢々至れども皆之れを辭す、天明癸卯の歲杵築侯新に立ち梅園を召見し待つに家老の禮を以てし常に治世の要義を諮ふ、寛政三年三月十四日歿す年六十七梅園新に一家言を爲し自ら條理學を稱す旁ら詩を善くし又書に巧みなり、著す所三語の外詩微、寓意、教證、梅園詩集あり梅園叢書は今に至りて盛に世に行はる、二子あり長は黃鶴字は修齡父歿するの後家を起して郡宰となり儒職を攝す次は玄龜字は大年

◎廣瀬淡窓

名は建字は子基、求馬と稱す日田の人初め時習を趨ひて藝擬自ら喜ぶ弱冠唐宋詩の醇なるを見讀んで未だ巻を終へずして曰く天地間自ら此種の好詩ありと、遂に一家の機軸を出すに至る、幼にして神童の稱あり而して温恭篤敬言語苟もせず、是の時に當り鎮西の地文化未だ洽からず二三の家塾ありといへども生徒寥寥數十に過ぎず、淡窓幼にして龜井元鳳に學び後其の徒を延

鴻儒畫伯

き業を授くるに及びてや前後籍に上るもの四千餘人、家塾の盛なる未だ曾て有らざる所にして人材
彬々知名の士多く其門より出づ、幕府遠く褒詞を傳へ特に爵一級を加へ儒を以て門に旌し直に官に
隸せしむ、蓋し當時に在つて頗る破格の事に屬す大村、府内の二侯皆禮を厚ふして之を延き待に嘉
賓を以てす安政二卯年七十四を以て終ふ、門人私に諡して文玄先生と云ふ門生中知名の士二三を舉
ぐれば恒遠子遠、劉石舟、長梅外、同三州、秋月橋門、三野五岳、紫秋村、石井南橋、松田道之、
島維精等なり

○廣瀬旭莊

名は謙字は吉浦、旭莊又梅畷と稱す浪華に住し帷を下して教授す淡窓の弟にして詩
名淡窓に譲らず文久三年歿す年五十七宜園百花詩論、高青邱詩抄、梅畷詩鈔、旭莊小稿等の著あり

○瀬瀨青邨

名は範字は世叔、青邨は其號なり下毛郡土田村の人本姓は矢野氏廣瀬淡窓に師事し
都講となる淡窓遂に養て子となし家業を繼がしむ、萬延、文久の交内外頗る多事なるを見るや江
戸に遊んで熱々天下の形勢を察し西歸するに及び府内侯延ひて賓となし學政を督せしむ、此時淡
窓既に歿し弟旭莊大阪に在り其の子林外宜園に留守し青邨と鼎立相唱和す世稱して三廣と云ふ、
明治元年徵されて京に入り漢學所に居る八年岩手縣七等出仕兼判事に補せられ後修史局三等修撰
に遷り局廢せらるゝに及び帷を牛込に下して徒を聚め教授し東宜園と稱す、既にして華族學校教
師に聘せられ宮内文學に進す又山梨縣學徵典館に司教たること歳餘、明治十七年十二月三日病を

以て歿す享年六十六、青邨の學紫陽を宗とし晚に老莊を好む又書法に精しく兼て蘭竹を畫く詩は
其の擅長にして自ら一家を爲せり

○廣瀬林外

名は孝字は維孝、林外と號す淡窓の姪にして旭莊の子なり淡窓歿して其の後を受け
帷を垂れて教授す最史學に達し作詩饒に冲澹の致あり明治維新の際東京に出で史館に入る、七年
五月病で歿す享年三十九

○帆足萬里

一に文簡と號す日出藩の儒者なり藩主木下俊政舉げて藩政を改革す、水戸景山公
其の名を聞きて聘せんとするに際し躬幕議を受くるを以て果さず其の後又た官家の招聘ありしが當
時公武の間圓滑ならざるを以て固辭して出でず初め鶴崎の儒者脇愚山に従ふて學び後京師に遊ぶ少
年の時皆川淇園に邂逅し詩の添削を乞ふ「十里長隄鴨水東、土齋微潤不生塵、野店幾群浮白客、羅
裝一帶踏青人」淇園此詩を見て驚て曰ふ此寧馨兒後來必ず大名をなさんと、晩年學術文章は三浦
梅園廣瀬淡窓と併せて三偉人の稱なり殊に經濟、天文、窮理、醫方に通ず故を以て深く藩侯の信認
する處となり寵遇甚だ厚し著す所假字考、修辭通、窮理通、四書標註、荀子標註、肆學餘稿、東潜
夫論、入學新編、井樓纂聞、西峴遺稿等あり嘉永五年家に歿す年七十五門下最も著はるゝものを勝

○田能村竹田

名は孝憲字は君舜、行藏と稱す竹田は其の號又雪月畫堂、補拙虛等の別號あり
鴻儒畫伯

岡藩の人、家世々藩醫たり父を碩庵と云ふ竹田幼にして學を好み詩を嗜む、才思秀拔稍長じて醫を學ぶ其の志に非ざるを以て藩主特に命じて儒員となす時に年二十三、是に於て東都に至り古屋昔陽岳東海に從ひて専ら經藝を攻め傍ら書法を谷文晁に學ぶ之より先唐橋世濟、豐後志を撰し稿を脱せずして死す藩主竹田及び伊藤叔をして其の業を終へしむ竹田因て東都に居ること一年餘にして國に歸り寛叔と同じく其の書を修む書成るに及びて藩主之を徳川氏に呈し又竹田等に時服を賜ひて其の功を賞す、後幾ならずして熊本に遊び李紫溪、大城帯梁、村井琴山等の諸名士と交り又京師に出で村瀬栲亭に就て修業すること二年にして歸る、竹田居常慷慨國を憂ひ數々疏を上りて藩政を諫むといへども容るゝ所とならず乃ち漁父の圖を作り詩を題して曰く「深宮今夜非熊夢、落否釣竿三尺前」と官遂に曉らず茲に於て慨然として骸骨を乞ひ優遊自適風流自ら娛しむ、數々京阪に往來し特に頼山陽、篠崎小竹、小石樞園雲華上人等と交る竹田素より詩文を善くし書畫に長じ傍ら點茶香道の技に至るまで其の繡輿を究めざるなし、本邦古來詩餘を作る者希なり竹田以て藝苑の缺典となし夙に刻苦之れを學び竟に填詩圖譜を著はして世に刊付す、悉く其畫を作るや高く標的を樹て、尋常の規矩に從はず初め谷文晁の風を講といへども後明清人の遺蹟を研究して遂に一家の畫風を作す、山水人物花鳥共に堪能にして其の形狀明清人の筆意に伯仲す頼山陽、雲華上人皆畫を嗜み性高簡にして物に傲る然れども竹田の畫に於ては賞嘆舎かざりしといふ竹田常に曰ふ畫は筆を用るの工ならざるを憂

へず精神の到らざることを思ふ筆を用ふるの工なるものは特に古人を模するに基き精神到るものは自家一脚を建つるに因ると又た以て其の識見の凡ならざるを知るに足る

初め大阪に遊ぶとき米山人と云ふものあり頗る書畫を善くす特に竹田の畫を喜びて曰く後來我畫の真意を傳ふべきものは唯吾子のみと其の夙に名士に知らるゝこと斯くの如し天保六年八月廿五日大阪に病死す年五十九

◎帆足杏雨

名は遠字は致大、杏雨又聽秋半農と號す大分郡戸次の人幼にして畫を好む長するに及んで田能村竹田に學び造詣する處多し、又た帆足萬里、廣瀬淡窓、頼山陽等の門に遊び詩文を攻究し學大に進む後更に畫を浦上春琳に學び復た竹田に從ふて四方に縱遊し年三十餘家に歸つて閑居す山陽爲に杏花春雨村莊舎の扁額を書して贈る、爾來また郷を出でずといへども名聲藉甚、揮毫を乞ふもの常に應至す五十前後に至り畫格一變、専ら文徵仲、沈啓南を欽す筆力雄勁、光彩煥發、晩年に至り風格復た又た變すと云ふ、山陽嘗て評して曰く田翁の畫野逸帆子の畫富貴而して翁の正脈を傳ふるものは夫れ帆子に在るかと、弘化年間禁裡徵畫の事あり杏雨亦た徵に應じて長丈の巨幅二圖を作りて奉獻す叙慮に稱ひ馬内侍を以て褒狀を賜はる、蓋し士庶人の畫天覽に入るは當時に在つて異數をなす篠崎小竹詩を贈つて之を賀す明治五年澳國に開會せる萬國大博覽會に耶馬溪の圖を出品し外人をして深く其の精巧に敬服せしめしと云ふ、廣瀬淡窓、草場佩川、角田九華等の諸老輩皆

鴻儒畫伯

其の畫風を欽して賞詞交々至る淡窓曰く「山容日影總傳神、杏雨先生畫絕倫、俗手千般難到處、文衡山後見斯人」と佩川また曰く「境靜峭巖存古色、風治花柳自春姿、草堂素壁新生色、又見天人同一時」と九華更に曰ふ「我閱此圖興勃々、高揭壁上稱奇絕、君之苦心筆勢新、拂拭慘憺換凡骨」と識者の推重する所となる幸ね斯くの如し、明治十七年五月十六日歳す壽七十五著す所詩集若干卷、自書題語四冊、聽秋閣模古式三冊等あり

◎田野村直入

名は癡字は願絶、小虎と號す後直入と改む其の他竹翁布袋庵等別號多し文化十一年二月竹田町に生る幼名を三宮松太郎と云ふ年甫めて三歳源頼光及び其の四天王の像を畫き四歳にして菅公の像を寫す六七歳の頃岡本棹雪に就て狩野氏の畫法及び彩畫法を學び伯父蓬島に漢畫を習ふ九歳の時田能村竹田の門に入る竹田其の凡器にあらざるを知り養ふて子とし其姓を冒さしむ二十一歳の時竹田に從ひて大阪に出で翌年郷に還る二十六歳の春再び大阪に出で居を安土町に卜し奥野小山等と詩社を結び大に南宗の畫風を發揮す、又た篠崎小竹、廣瀬旭莊等に詩を問ひ咬菜吟社を起し泉南釋尊寺天柱和尚に參禪して印可を得、四十三歳の時大阪藏屋敷に於て藩主中川侯に謁し後土籍に準し三人口を食む、幾もなく居を高麗橋に移し自ら布袋の土偶を作り小室を築き一文庵と號す明治元年京都に移居し六十四歳の時京都博覽會場に於て 兩陛下に拜謁し揮毫を 天覽に供す尋て天保九如の圖を 天皇陛下に栴尾秋色及び五福爭壽の圖を 皇太后陛下に獻納し白絹の恩賜あり

り七十一歳の時繪事の功勞を賞せられ文部省より六國史及描金桐風硯匣等の下賜あり兩三年前得度して黃檗山獅子林院の住職となる、本年實に八十九の高齡に達せりと雖ども猶ほ髮鬚として衰へず過般長くも禁廷より長七尺幅三尺の絹地に揮毫すべき旨の大命を蒙り身に餘る至大の光榮を荷ふて齊戒沐浴蓬萊の圖を謹製し居れりと云ふ、翁か多年丹青界に貢獻せし切績は一々枚舉に遑めらざるが中にも彼の京都に於ける四派畫學校創始の如きは特に其の著大なるもの一なりと云ふ

◎平野五岳

名は岳字は五岳、號も亦た五岳にして別に古竹園とも稱す日田専念寺の住職なり幼にして詞藻を好み感宜園に在りて夙の出藍の譽れ高し、人と爲り寡言物と迂はず一藝を修むることに専心其の藹奥を極む之れを以て書法畫道一として精巧ならざるはなし其の詩の如き皆て難字を用ゐず句格流暢、情味婉轉大家といへども企て及びがたきものあり曾て熊本城下作中村松塙によりて東京博覽會場に掲げられ官の賞賜あり本朝詩を以て賞を得るもの蓋し岳を以て嚆矢とす、初め畫を事とせず年三十餘に至り始めて丹青を弄す用筆閑雅、樹瘦せ山寒く痼然清秀自ら一家を爲せり松方伯曾て日田縣知事たり岳を見大に喜んで曰く上人氣宇海濶天高にして道徳内蘊温情春風の如し予縣事に鞅掌し日夜煩に苦しむ會ま上人を見れば胸次一洗大爺の塵を掃ふが如し實に我の黃叔度なりと、贈右大臣大久保甲東亦た深く岳を愛し居常其の書畫を展覽して 樂と爲す曾て 陛下甲東の邸に臨幸ありしとき壁間岳の畫を掛けて 天覽に供せしに頗る歎服に稱ひ勅して宮中に上ら

鴻儒畫伯

しめられしことあり故木戸松菊また深く岳を崇重し讀嘆惜かざりしと云ふ、岳性恬淡寡欲書畫を乞ふもの恒に瀟至すと雖ども意到らざれば筆を執らず酒を弄し碁を圍み累日逍遙遠來の客動もすれば留まること旬餘に渉り竟に一紙を獲る能はずして還り去るものあり、初め大谷法主岳の人と爲りて欽し數々之れを徵せども病と稱して應せず明治十年法主熊本に巡化するや發するに臨み人に語りて曰く時方に盛夏火國の巡化眞に厭ふべし然れども途に岳を見るを思へば清風自ら腋下に生ずるを覺え敢て勞とするに足らずと、風格高逸其の人の景慕する處となる斯くの如し明治二十六年三月三日寂す年八十三

◎高橋草坪

名は雨字は元吉、杵築の人幼にして書を好む田能村竹田曾て杵築に遊び一見之を奇とし携へ歸りて六法を授く未だ幾ならずして其の業大に進み儕輩の畏敬するところとなる、曾て戸次に在り帆足李蹊の爲に雪中探梅の圖を作る頗る清致あり頼山陽之れを見嘆じて曰く雪や梅や詩人や皆是れ清物ならざるはなし此三清を併せ寫すこと清絶の筆にあらざるよりは素より能はざるとこそ草坪子、腕底一點の塵なし能く此畫をなす所以なりと、後竹田に隨つて大阪に遊ぶ一日竹田畫友玉堂子春琴を訪ふ春琴語つて曰く頃日高草坪なるもの、瀟山水を見たり筆致蒼老、宛然明人なり若し清人ならんには乾隆以前にして稼圃、芋九遠、輩の遠く及ばざる所なり君其人を知るか竹田答へて曰く夫だ之れを知らずと雖も僕門生に高草坪なるものあり姓號相符す甚だ異しむべきなり

と春琴又た曰く方今若し斯の如きの人あらば僕當に贅を執り之れに師事せんのみ時に草坪、竹田に伴ふて堂外に在り竹田即ち呼入れて春琴に紹介す春琴曰く秀才偶々古人と姓號を同ふす亦た藝林の一佳談なりと、他日竹田、草坪作る所の畫を携へ春琴に示す春琴熟視良久ふして呆然自失、徐ろに竹田に謂つて曰く此畫果して前日秀才の作る所たらば則ち囊に見し所の畫亦た必ず秀才の作る所なり僕過てり願くば君吾が爲に草坪子に謝せよと當時傳へて藝苑の一佳話と爲す、曾て頼山陽草坪に謂つて曰く子の筆已に可なり只書卷氣に乏しきを憾むのみ草坪此に於て毎日程を課し作詩讀書習字を修め致々として倦まず未だ幾ならずして其の業大に進み將に室に入らんとするに迨んで偶ま二豎の胃すところとなる、友人歸國養病を勸むといへども中途學を廢するに忍びず病を力めて苦學し遂に瘁死するに至る時に年三十二、聞く者痛惜せざるはなく稱して田門の顔回と爲す

附 記

本書の編纂に就ては佐藤嘉門氏の勞を煩したるもの多し而かも期日僅に三旬愚慮考の時間に乏しきにも拘はらず精勵以て事に當られたるは委員等の多とする處なり又歴史に關する記事に在りては佐藤滋太郎氏校閱の勞を執られ尙游覽の乘中耶馬溪に係るもの、如きは志家松田竹園氏射ら實地東道の任に當り委員に裨益を與へられたるもの多しとせず尙又巻中挿入する處の寫眞は孰れも各町村及有志者の寄贈せられたるものにして此他尙數百の寄贈寫眞ありといへども紙數限りある

附 記

を以て悉く網羅すること能はず其掲出せざる分は實業大會々場に陳列して一般來會者の鑑覽に供する事となせり聊か謝意
を表せんため願末を巻尾に畧叙すること附り

明治三十五年十月

編纂委員

大分縣技師	大町 信	同縣屬	坂本 永定	同拔手	立野 貫一
同拔手	三浦 覺一	同縣屬	工藤 猪鹿	同拔手	渡邊 新七郎
同縣屬	矢野 駒太郎	同縣屬	秋山 武人	同縣屬	熊田 千記
同拔手	井上 康太	同拔手	占部 猪三郎		

大分縣案內終

明治三十五年十月七日印刷
明治三十五年十月十五日發行

著作者

第九回西南區實業大會

大分縣廳內

發行者

安東平太郎

大分縣大分郡大分町八百貳拾五番地

東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷者

山口竹二郎

東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷所

合資 東京國文社

發行書肆

菁莪堂書房

大分縣大分郡大分本町

東温泉ニ接近シ入浴ニ便ナリ
閑静ナル離座敷ヲ有シ庭園恢濶ニ
シテ中央ニ清潔ナル泉水アリ

旅 館

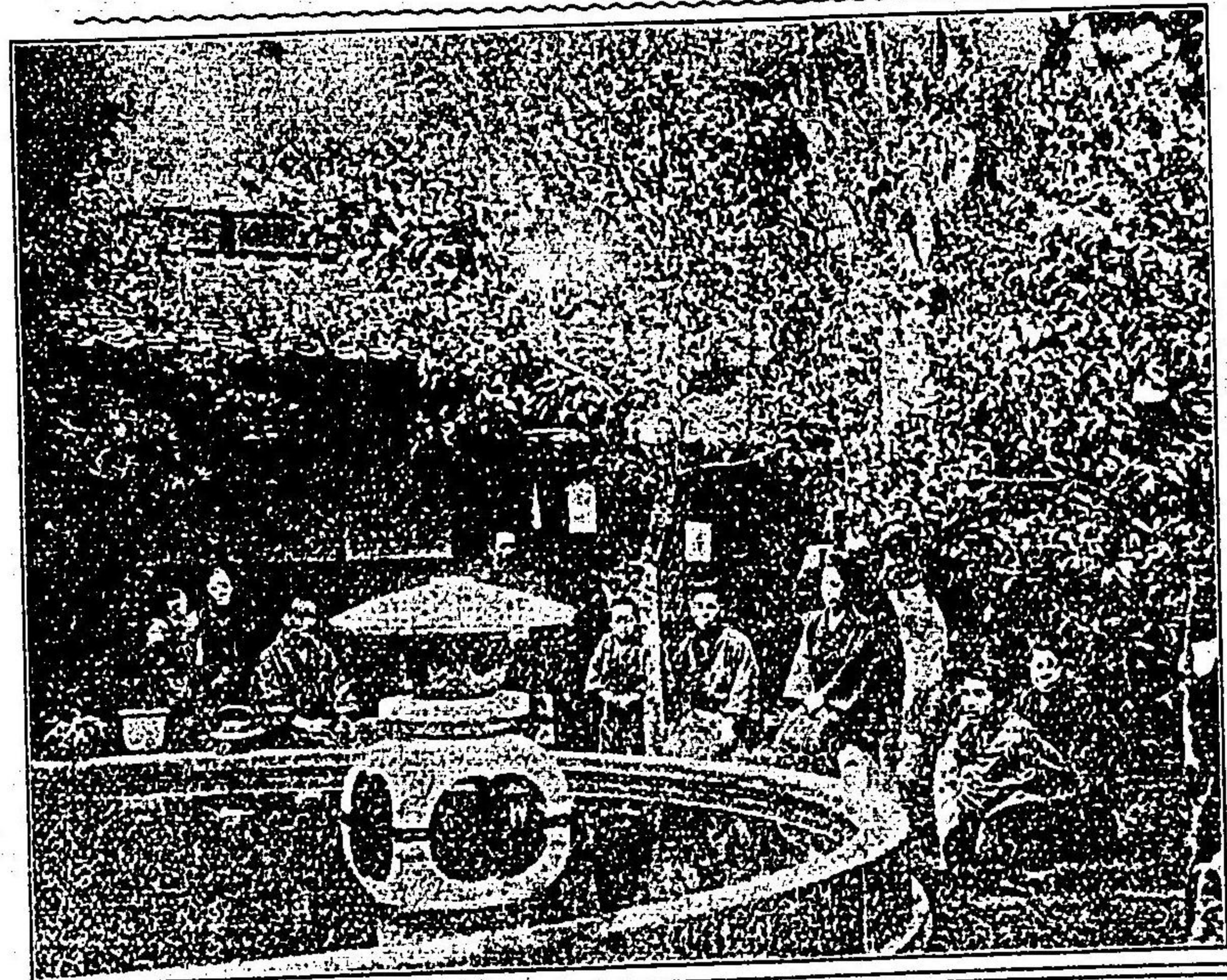
豊後濱脇薬師町

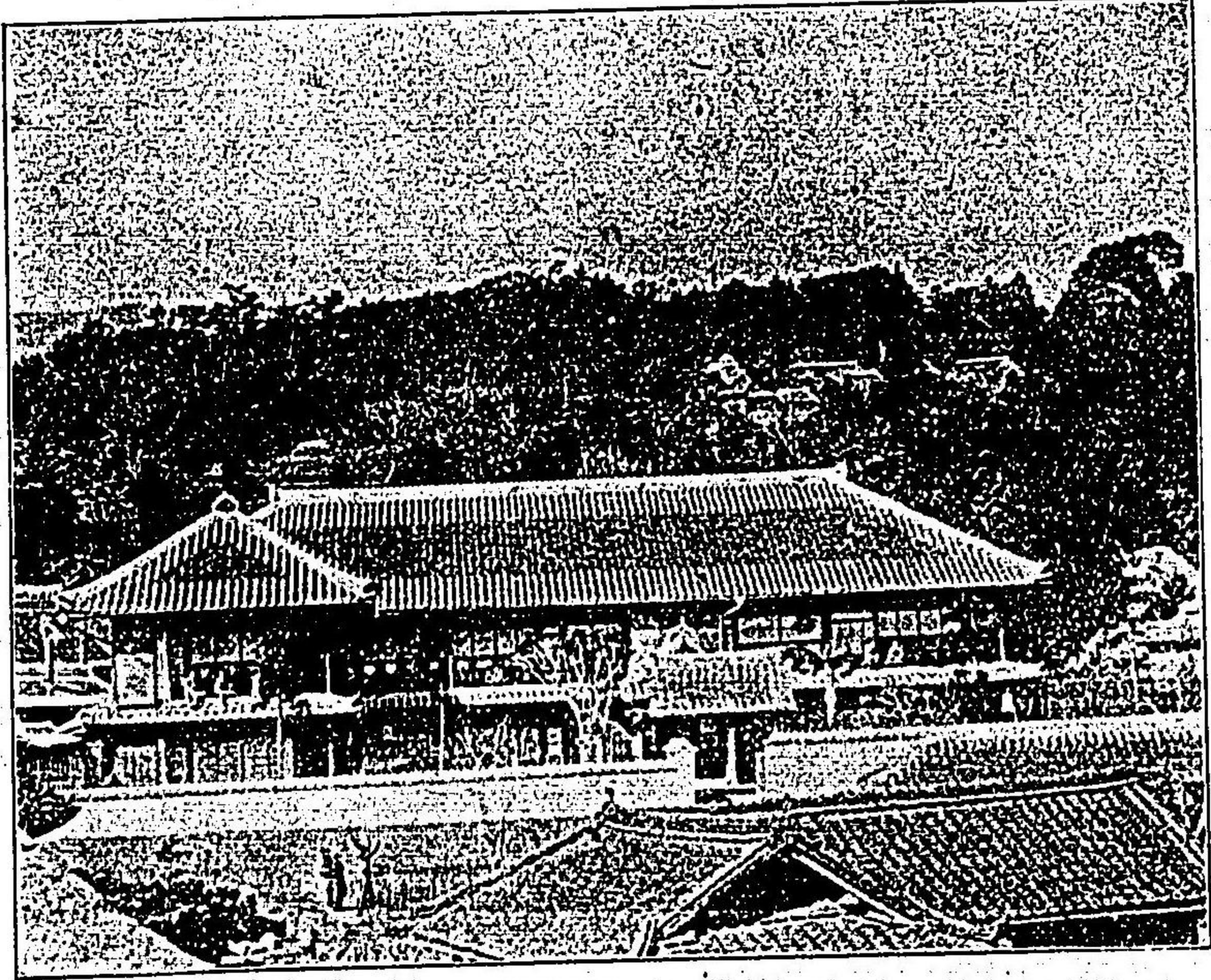
聽泉堂

泉屋

高橋孫三郎

郵便爲替貯金小包ノ取扱ヲナス
ヲ以テ信書ノ往復ニ最モ便ナリ
専有ノ清潔ナル上等温泉アリ





豊後鐵輪溫泉場

富士屋事

入湯旅館 安波利吉

本館ハ上圖ノ如キ別荘アリ共ニ邸内特効ノ温泉
及ヒ蒸風呂各ニヶ所アリテ大ニ入浴ニ便ナリ而
シテ別荘ノ位置ハ尤モ高燥閑雅ニシテ前ハ豊後
灣ニ臨ミ後ハ筑紫富士ヲ負ヒ頗ル眺望佳絶ナリ
殊ニ夏期ハ清涼ニ冬期ハ温暖ニ幾キニ大分新紙
上本縣避暑旅館投票ノ際縣下第一位ヲ占メタリ
且屋外ニ公園ヲ設ケ浴後ノ逍遙ニ供ス誠ニ四方
入浴保養者ノ爲メ最良ノ館ナリ

豊後別府温泉場

米屋事

日本旅館



堀

禮

藏

並ニ汽船回漕業

邸内ニ温泉數ヶ所アリ何レモ鐵氣炭酸ヲ含ミ諸病ニ特効アリ又此温
 泉ハ毫モ臭氣ナク飲料ニ用ヒテ大ヒニ効能アリ先年 村雲殿下御入
 湯ノ際當館へ成ラセ給ヒ實ニ清カナル温泉カナ箱根有馬ノ温泉モヨ
 モ及ブマジ養生ノ爲ニハ又得難キ温泉ナリト宜ヒテ養養泉ト御命名
 アラセラレタリ其後來客非常ニ多ク客室ノ陝隘ヲ告グレニ至リ明治
 三十三年客室ヲ新築ス其結構專ラ衛生上ニ注意シ光線ノ射入空氣ノ
 流通各其宜シキヲ得頗ル四方ノ眺望ニ富ミ且庭園ニハ種々ノ綠樹ヲ
 増植シ殊ニ汽船乗込上陸共ニ便利ニシテ最モ四方浴客好適ノ旅館ナ
 リ

豐後國別府町

入湯御宿

榊田屋旅館

別莊庭内特效ノ温泉浴場アリ

和洋酒 蕘 罎 罐 詰

洋食料 品 器 具 類

清酒 一文字

洋酒 キリンビール
エビスビール

特約一手販賣

豐後國別府温泉場

靈泉館

日本御旅館

日名子益太郎

並ニ汽船回漕業

本館ハ庭内三座ノ温泉ナリ之レヲ新湯男女湯トス其泉質共ニ炭酸泉ニシテ性状ハ無色清澄臭氣ナシ就中新湯ハ硫酸ヲ含ミ温度ハ攝氏ノ四十五六度ニシテ何レモ諸病ニ特效アリ而シテ客室ハ近年新築ノ三層樓ニシテ前ハ渺々タル函蓋ノ灣ニ臨ミ後ハ巍々タル筑紫富士ヲ仰ギ山水ノ勝蹟泉ノ効入浴ノ便全國殆ンド其比ヲ見ザルナリコ、ナ以テ近來内外國ノ紳士貴客繼々來泊セラレ名吟雅章又少カラズ誠ニ世ノ保養者若クハ文人雅客ノ爲メ好適ノ旅館ナリ

尙本館庭内温泉醫治効用ハ不老泉ニ同ジ

本館は別府第一不老泉に隣り眺望佳
絶にして邸内敷座の温泉あり

豊後別府

茶代廢止
同盟旅館

紅葉館

庭園廣潤にして四時花卉の美觀を絶
たず御静養には最も好適なり

事邸内男女各別ニ温泉場ノ
出無害アリ又兩浴場トモ新
日テ入浴者ノ飲料水ヲ設ケ以
利ニ供フ御便



御旅館

植木壽泉館

別府港ヨリ凡ソ一丁半

電鐵會社ヨリ凡ソ二丁半

本館ノ特色
ハ親切ト丁寧トニ
ハ親切ト丁寧トニ
アリ又飲食物ハ總テ新鮮ヲ撰
ビ廉價ヲ以テ調進ス
館主 植木ケリ 敬白

清 醬 油 酒
 商 標


釀 造

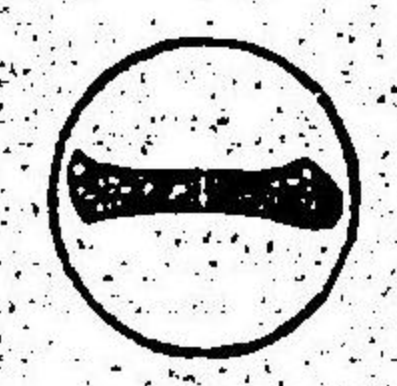
別府町本家多葉粉屋
 釀 造 元
 高 倉 德 三 郎

商 登
 號 記


會 覽 博 業 勸 國 內 同 四 第
 納 拜 狀 褒

商 賣 販 造 製 針 縫

し 可 ず 嘉 る 頗 る 見 を 用 適 て し に 密 巧 造 製

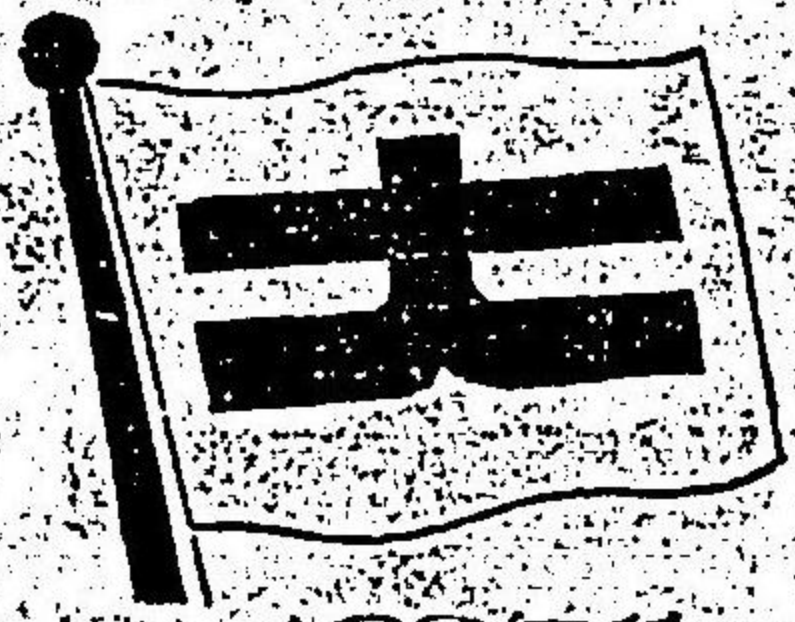


家 本
 河 村 藤 吉

大分縣豊後國速見郡別府町

弊店從來製造の縫針類は總て炭素燒の精妙を極め光澤は勿論針
 耳圓滑にして糸の通ひ善く且針力は剛柔宜敷を得加之針尖
 銳利にして指腕肩の勞を助け其効用の多きとは既に江湖諸君の
 賞讃せらるゝ所にして復弊店の冗辯を要せず去る明治廿八年第
 四回博覽會に出品し褒狀を辱ふしたるも其事實の虚ならざる
 を表明する者にして弊店の幸福之に過ぎず依て此度表裝改正一
 層廉價に販賣普く諸君の貴需に應ずべく不拘多少御購求あらん
 ことを希ふ

追伸近來處々に印模擬品有之に付き下名御注意を乞ふ併て他
 店同業者好心を以ての製造品より一層上等有之云々申し粗惡
 品を以て顧客を購着する者ある由聞及び候に付右奸商等に購着
 されざる様御注意尙善惡は現品御試用の上御高評を賜はり永當
 御引立の程を奉願候



大阪商船株式會社別府支店

每日 ●昇航

日出、守江、長濱、三津濱、今治、多度津、高松ノ諸港ヲ經テ神戸、大阪ニ至ル

出帆 ●降航

細島線——大分、佐賀關、白杵、佐伯、土々呂ノ諸港ヲ經テ細島ニ至ル
宇和島線——大分、佐賀關、八幡濱、吉田、ノ諸港ヲ經テ宇和島ニ至ル
但シ毎偶日出船ハ深浦宿毛ニ延航ス

湯治旅館

小島屋事

不老園

位。置。造。構。溫。泉。料。理。

別府町ノ西端田圃ノ間ニアリ鶴見四極ノ諸山朝見ノ清流函海ノ漁火一眸ニ集リ風光明媚眺望佳絕ナリ

家屋新築ニシテ空氣ノ流通ニ意ヲ用ヒ庭園廣潤ニシテ四時花ヲ絶タス避暑旅館トシテ極メテ適合ナリ

門前ニ上等温泉不老泉アリ湯瀧ハ他ニ比類ヲ見ス邸内數ヶ所ノ浴場ヲ設ク醫治効用ハ不老泉ニ等シ

專ラ衛生ニ注意シ新鮮ナル魚菜ヲ撰ヒ輕便ヲ旨トシ又浴客ノ便宜ニヨリ旅籠自炊注意トス

豐後國別府不老町

旅館 不老園主 河村 秀夫



豐後 大 海軍御用 別府

大阪商船會社客取扱

瀛船乘客待合所
 神戸大阪行瀛船毎日貳回出港
 豊州電気鐵道荷物取扱

山形田舎店
 山形章

大分堀川驛電鐵構内ニ出張所アリ
 宇和島行細島行瀛船毎日出港偶數ノ日宿毛ニ延航
 馬關航路瀛船取扱

御旅館

豐後國別府港
楠溫泉前

山常事

明月館

岩尾常吉

庭内ニ特効ノ溫泉アリ

同港海岸通

海陸
物産

萬問屋

山常支店

主任 野田庄

馬關行
門司行
大阪行
宇和島行
細島行
豐前各港
每日
出航

御榮館

客荷船澳

荷爲替取組所
日本海上保險申込所
石炭販賣所

岩尾

店扱取
邸内特効
溫泉アリ

豐後別府港
木公館
松尾龜四郎

廣告

一 豐後名産 白酒 由布の雪

白酒 由布の雪は

豐後第一の高山由布嶽(一名豐後富士)より湧出せし清水を利用し且つ其山上の積雪白妙にひとしければ此名稱を附したるなり

白酒 由布の雪は

適宜御試用あるときは總て身體の健康を助くるのみならず其味ひ芳美にして無上の快樂を覺へしむるの佳品なり

白酒 由布の雪は

昔年より豐後名産の高評を賜わりしを以て今獨販路の日々に廣まるは全く各位の御愛顧に外ならずと感謝の至りに堪へざるなり

白酒 由布の雪は

體裁優美にして御進物用最上の良品なるを以て賣捌店は各地最寄の酒販賣店にあり

豐後國別府港



西山酒造店

酒類醸造元

同 盟 旅 館

位置ハ東温泉ニ隣シ入浴便ナリ

旅籠並ニ入浴賄其他銘酒ノ販賣ヲ

業トス清潔ナル内湯ニケ所ニアリ

登佐屋 濱崎丑治

前邸ニハ三階ノ家屋及庭前ニ噴水

アリ避暑ノ爲ニハ眺望ヨキ別莊ニ

ケ所アリ時トシテ貴客ノ遊場ニ充ツ

豐後濱脇藥師町

入湯御宿

豐後濱脇町本家鹽久事

家近久兵衛

内湯

庭内ニ特効ノ温泉アリテ其泉質炭酸泉ナリ且ツ庭前ニハ有名ナル東ノ湯アリテ内外ニ入浴頗ル便ナリ

効能

僂麻質斯胃病婦人生殖器病腺病貧血病疥癬痛風等其他諸病ニ頗ル効驗アリ尙詳細ハ東ノ湯ニ同シ

客室

近年新築ノ三階ニシテ前方ハ南ニ面シ夏ハ涼シ冬ハ暖カニ又空氣ノ流通宜シク最衛生上ニ適當シ且ツ四方ノ眺望ニ富メリ

飲料水

遠ク山中ヨリ純良ナル清水ヲ庭内ノ處々ニ引キ又ハ使用ニ供ス

宿費

宿料ハ最モ安直ニ客ノ望ニ應シ待遇丁寧ニ調進ス

右ハ本館ノ特色ニシテ爲ニ近來來客頗ル多ク目下尙諸般ノ改良ニ注意シテ專ラ浴客ノ便益ヲ計レリ

皇國一品名聲轟四海



商標 豐後 特産 芽生姜酢漬 瓶詰 數種

一 本品ハ全國製産品博覽會同共進會有功ニ等銅牌ヲ拜受セリ
一 本品ハ當縣下ヨリノ土産物トシテ他ニ比類ナシ
一 本品ハ外國へ輸出チナス
一 近來模造品アリ御購求ノ御方ハ商標并ニ製造人長野屋徳治ニ御注意アリタシ茲ニ拾五年紀念トシテ別府名産滋養ノ親玉ヲ發賣ス



商標 不老温泉乃露

本品ハ別府温泉不老湯ヲ利用シ芽生姜其外諸種ノ滋養品ニテ製造スルモノナリ

製造本元 日出港上町 長野屋徳治
發賣元 別府町名譽川筋 二階堂雜貨店
同 中町 二階堂藥舖
同 佐野小一郎

豐後國日出港上町本通

登記商號 長野屋徳治 電話略語(ウトク)

汽船問屋 御旅館

一 當宿ハ廉價町噺ヲ本旨トス
一 當宿ハ郵便電信局諸銀行并ニ港ニ近シ有名ナル松屋寺ノ蘇鐵ハ西北參丁餘ニアリ
同港西上町本通

鎌田回漕店

第二回水産博覽會褒狀 全國製産物博覽會有功ニ等銅牌



日出 滋養の海

一名鯛の花
一 即席高等料理品旅行用并ニ土産物ニ適ス
一 滋養分ヲ含有スル衛生上有功唯一ノ珍肴佳品ナリ

長野屋水産物製造店

入湯旅館

海老傳

大分縣豐後國速見郡濱町

位置

弊舗ハ濱脇東温泉ト西温泉ニ狹レ又一方ニハ藥師上等温泉ニ隣シ且ツ庭内ニ專有ノ温泉アリ入浴ノ御便利ナルコト全國其比ヲ見ス來テ御實驗アラントナクフ

庭内ニ特効ノ温泉ト

飲用ノ噴水アリ

附記

弊舗ハ蘭類ノ盆栽ヲ持ツ建蘭金龍邊春蘭等百種以上ノ培養ヲナシ以テ旅客ノ癖心ヲ助ケントス



東洋第一の人造肥料



●普通過磷酸肥料

此肥料は一反歩五乃至十貫の割合にて腐肥、堆肥、人糞、尿、大豆、豆粕、魚肥、種粕、草類等の在來肥料と併用すれば米、麥、菜種、果樹類、根菜類、穀類等の成熟を早め收穫を増し品質を良くすること大なり又之を併用すれば作物の病虫害を減する間接の効能あり

●特製過磷酸肥料

此肥料は最上等の過磷酸にして前の過磷酸に比し二割の減用量にて同効あり

●普通完全肥料

此肥料は在來の金肥に代用せし米、麥、菜種、根菜類、果樹類、棉、煙草等に對し利益多し

●特製完全肥料

此肥料は大麥、亞麻、藍、茶、桑、苧、甘蔗等に著効あり稲作等にも好適す

●蒸製骨粉肥料

此肥料は一反歩三乃至五貫の割合にて在來肥料と併用すれば諸作物に良好の結果あり

製造元

東京深川釜屋堀

東京人造肥料株式會社

大分縣販賣元

豐後日出

肥料商

河野庸夫商店

關西代理店三井物産合名會社大分縣代理人 各地に特約店及販賣店あり若し見當らざる節は直接に御注文を乞ふ精々割引可致候

東宮殿下献納

純良清酒

遠藤孫六
造り
酒

即後正宗は精撰
良の原料を用ひ多
年の研究と幾多の
経験とによりて醸
造せし芳良醇美の
清酒なり
「しらぬひ」は積年
の實驗によりて發
明せし弊家特有の
保存法を以て三年
以上貯藏する處の
一火物なり

釀造元

大分縣速見郡豐岡町

遠藤孫六



外内 煙草卸問屋

大分竹町 得丸商會

東京 千葉牡丹商會
東京 岩谷商會
神奈川 村井兄弟商會
鹿兒島 秦野物産株式會社
備後 林孝四郎
備後 蘆田煙草株式會社
備後 平地治平

其他 刻卷各種

製縣下特約品
大販賣元

高等小問物
高等袋物
内外化粧品

卸問屋

豐後大分竹町

トクマル

確實正札

保險附

純金 ユビワ
金銀 クサリ
金銀 綠眼鏡
兩眼 鏡

確實正札

唐木製茶棚花臺
床飾リ人物佛像
鳥毛製造花、貝細工
絹布製紙製造花
盛籠用模形果物

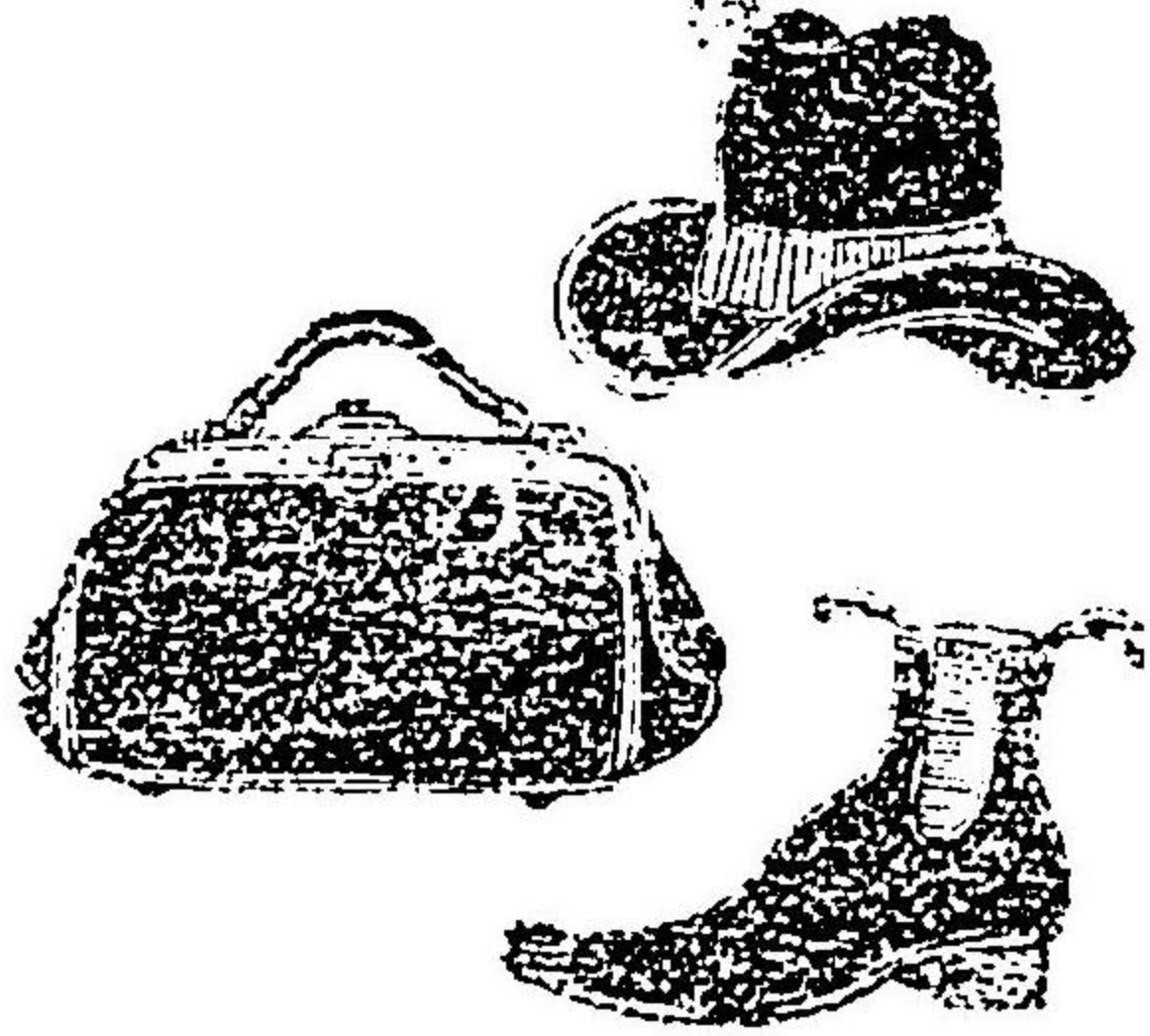
トクマル貴金屬部

トクマル雜貨部

最新流行品廣告

精品廉價

正札附贈



意匠斬新

商號紅屋

大分竹町通

一丸洋物雜貨店

(電信略號)一〇〇

洋傘類各種、帽子類各種、カバン類種々、グツ類種々、夏冬敷物種々、シャツ、ツボン下各種、風、水、ゴム枕種々、洋馬具一式、洋服用附屬品類一式、冬向物品左ニ

トンビ各種、被布類種々、コート各種、毛布類種々、外ニ毛織物類一式、東京櫻組製造靴特約販賣元、やまと織敷物特約販賣元やまと織敷物ハ一疊敷拾疊敷ニテモ御望次第やまと織敷物ハ夏冬兼用便利ノ敷物ナリ尙定價表御入用ノ御方様エハ差上可申候
右ノ外種類澤山有升
弊店ノ賣品ハ總テ製造元ト特約仕リ大安價ニ販賣仕居候間他店ト御見競ノ上多少ニ不限御用向仰付被下度候

創業明治二十六年

資本金五拾萬圓

大分縣大分郡大分町

株式會社 大分銀行

頭取 小野吉彦

支店出張店

鶴崎、日出、白杵、竹田、長洲、別府、坂之市、

皮膚病梅毒耳鼻咽喉科生野病院

○らい病

本院特殊ノ注射新療法ハ有効確實ニシテ已ニ全治セシ者甚々多シ且ツ受療中一人トシテ著効ヲ見ザル者ナシ

○皮膚病科

しらくも△がんがさ△いんきん△こせ類△なます△あたまかざ△ひげがさ△ひせん△あたまのかゆみ△にきみ△わきか根治法△しもやけ△やけど△ほうせ△手のらはらの諸病△つめの病△はげあたま此にげあたまは發病後十七八年内外を経たる者も頭毛再生す△其他皮膚一切

○梅毒科

ばいどく△たい毒△便毒△淋病△よこね△男女陰部諸病△膀胱加答兒△淋毒性りようまちす△梅毒性りようまちす△痔疾局處麻酔根治療法
耳鼻咽喉科諸病
一本院ハ去ル卅三年九月開業以來誠意懇篤ヲ以テ數千人ノ患者ヲ治療セシニ皮膚病ノ如キハ東北寒地ニ比シ九州暖帶地方ノ者ハ一般ニ善良ニシテ如何ナル慢性頑固ノ症モ殆ント百發百中ノ好成績ヲ得タリ病客諸氏速ニ來院受療シ年來ノ痛苦辛酸タル痼疾ヲ平癒シ安樂健康ノ體ニ復セヨ

診察所

豊後大分町字荷揚町

院長

元東京醫科大學助手同大學撰科卒業

醫學得業士 生野壽六

おいた名物はらぶとぎこはちよいと頭に石があるそれがまことのこいしく

豊後國大分町

松

土

子

煮



製造元 幸野裁藏

各博覽會共進會褒賞受領

豊鑑詰 販賣所ハ 各地ニ有リ

定價 金拾五錢○貳拾錢○貳拾五錢 參拾錢○五拾錢